

東方銃憶録

MICRA

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バイオテロに巻き込まれた過去を持つ主人公が、幻想郷で暮らすお話。
基本まったり。

コメントお待ちしております。

…現在休業中…

…大規模アップデートまでお待ちしております…

目次

| | |
|--------------|-----|
| 滅びし街の記憶 | |
| ラクーン事件 | 1 |
| 幻想郷より | |
| 幻想入り | 11 |
| 見知らぬ物 | 20 |
| 紅魔館1日目 | 32 |
| 紅魔館2日目 | 42 |
| 人里より | 53 |
| 紅魔館での生活 | 62 |
| 向日葵畑からのお誘い | 71 |
| 幻想郷　　春雪異変 | |
| 春雪異変、前編 | 78 |
| 春雪異変、後編 | 85 |
| 宴会 | 93 |
| 宴会の後始末 | 99 |
| プレリユード | 105 |
| 日常の中の非日常 | 113 |
| 敵が味方か？ | 120 |
| 異変の始まりと酒呑み妖怪 | 128 |
| デトロイトの悪魔 | 135 |
| 異変の終結 | 142 |
| 外界の異変 | |
| 寒い寒い島にて | 148 |
| その娘、狂暴につき | 155 |
| 鎮守府での暮らし | 163 |

| | |
|-----------------|-----|
| 鎮守府での暮らし・2日目 | 170 |
| 東京　　ゝ　あきつ丸返却大作戦 | |
| 上京 | 177 |
| 陸軍省より | 184 |
| 妹宅にて | 190 |
| 陸軍の走り屋 | 196 |
| 休日 | 202 |
| 呪われたネックレス | 209 |
| 幻想に還し者 | |
| 帰郷 | 216 |
| 帰郷・船上にて | 223 |
| 帰郷・単冠湾 | 229 |
| とある日常 | 235 |

| | |
|------------------|-----|
| とある日常・2 | 241 |
| とある日常・3 | 247 |
| 羊の皮を被った狼 | 253 |
| 幻想郷　　ゝ　永夜異変 | |
| 永夜異変の始まり | 258 |
| 蓬莱人との戦い | 264 |
| 永夜異変　　ゝ　永遠亭内部 | 270 |
| 永夜異変の終わり、新生活の始まり | 276 |
| 向日葵畑の恐怖 | 282 |
| 人里にて | 288 |
| 忘却と酒乱 | 295 |
| 忘物 | 302 |

| | |
|--------------------|-----|
| 友人の異変 | 308 |
| 地底　　ゝ　はみ出し者の棲む処　　ゝ | |
| 地殻の下の嫉妬心 | 314 |
| 混沌 | 320 |
| 喧嘩と私とあきつ丸 | 326 |
| 波乱の予感 | 333 |
| 番外編　あきつ丸より | |
| 番外編　あきつ丸の一日 | 339 |
| 人物紹介 | |
| 登場人物紹介　I | 345 |
| 登場人物紹介　I I | 355 |
| 登場人物紹介　鎮守府 | 364 |

滅びし街の記憶

ラクーン事件

自己紹介をしよう、俺は弥生。

最近変な噂が多いラクーンシティに向かっている、

森深くに不思議な生物が居たり、行方不明者が多かつたり

オカルトじみた話が多い。

それにしてもハイウェイなのに前を走っているジープ以外
いない、

走っている車が

そこまで田舎では無い筈なのに…。

しかもそのジープ凄い飛ばしている、急ぎの用事なのだろう。

ハイウェイから降りると先を走っていたジープが止まり、

中から警官の制服を着た青年が出て来た、どうやら前で人が倒れているらしい。

少しするとやはり手招きされた、手伝えと言う事だろう。

しかし、すぐに青年の顔は青くなつた

? 「伏せろ!!?」

フアツ!!? いきなり発砲して来ましたよあの警官。

だが俺の後ろから複数の呻き声が聞こえて来た、ん?と思
つて後ろを見ると…

死体が歩いていて、それも大量に。

? 「逃げるぞ!!?」

警官の青年に手を引っ張つられてやつと意識が戻つて来た。

…

…

? 「危ないところだったな」

あれから逃げて一時間、大通りに出た

弥 『あれはなんなんだ?』

? 「わからない、まだ配属初日なんだ。俺はレオン、レオン S ケネディ、お前

は?」

弥 『俺か?、俺は弥生』

レ 「そうか、よろしく、弥生」

弥 『こちらこそよろしく』

どうやら青年はレオンと言う名前らしい

レ「しかし、これはまずい状況だな」

弥『あれはゾンビか何かか？』

レ「だとしたら厄介だな」

弥『ああ』

ドアの方から物音がした、まさかなあ：

レ「誰だ！」

すかさずレオンが銃を構える

？「撃たないで!!？」

レ「伏せろ！」

女性の後ろにいたゾンビを的確にレオンが撃つ

？「避けて!!？」

ナイフ投げの要領でレオンの背後のゾンビを倒す

こいつら妖怪なの？

レ「STARS：特殊部隊なのか？」

ナイフの刃に入った刻印を見てレオンが問う

？「兄がね」

レ「君の名前は？」

? 「クレア レッドフィールドよ」

レ 「なぜラクーンに？」

ク 「消えた兄を探しにだけど」

俺忘れられてね？」

ク 「その貴方は？」

忘れられてなかつたわ

弥 『俺は弥生、よろしく』

ク 「貴方武器は？」

弥 『無いですけど?』

ク 「何で？」

弥 『普通持つてこないですよ、まして日本人ですし。』

普通持つてこないよねえ

ク 「どうするのよ？」

弥 『大丈夫、適当にそこら辺の死体から貰うから』

レ 「なら、そのC96で良いんじゃないか？」

「

死体が持つていた銃をレオンが拾い、俺に渡して来る。

何だこの形

弥 『不思議な形だな』

レ 「それはライフルをベースにしてるからな、だから弾は上から入れるんだよ」とりあえず、弾は入ってるみたい

弥 『分かった』

……

……

レ 「それはそうと、早く進まないと脱出もクソも無いぞ」

弥 『あそこにパトカーがあるな、あれで逃げようぜ』

ク 「だけどキーはどうするの？」

レ 「バイザーに挟んであるか、ワイパーに挟んであるんじや無いか？」

弥 『正解、よく分かったな』

レオンがセルを回しエンジンをかけた

レ 「大体ここに置いてあるからな」

スキール音と共に発進 危ねえ

レ 「とりあえず警察署に向かおう、生存者がいるかもしれない」

……

：

屋根から物音と呻き声、まさかな。

弥 『二人共！窓！』

レ 「掴まれ！」

レオンが車体を左右に揺らす、しかしゾンビは落ちず

パトカーは左右の壁にぶつかって横転してしまった

レ 「クソッ……」

弥 『いててて……』

ク 「貴方雑過ぎない……？」

タンクに引火してもおかしく無いぐらい燃えている

あれ、これやばくね？

レ 「早く逃げるぞ！」

弥 『マズい！』

ク 「早く言いなさいよ！」

逃げた所で、さつき乗って居たパトカーは爆発してしまった。

ク 「危ないわね……」

一難去ってまた一難、今度はゾンビの大群がこちらに来た

ク 「少しは休ませてよ」

レ 「ああ、まったくだ」

弥 『本当にな』

……

……

……

ゾンビを撃ちながら警察署まで来た

レ 「やっとここまで来たな」

弥 『疲れたな』

ク 「意外と広いのね、町も警察署も」

弥 『博物館みたいだしな……ん？』

重傷の警官が倒れて居た

レ 「大丈夫か……？」

酷い傷だった、多分助からないと思うが

もちろん口には出さない

レ 「マービン……あんたの名前か？」

マ 「ああ……お前はレオンか……？」

レ 「ああ、そうだ」

マ 「悪いな：お前の歓迎会は出来そうに無い：」
そう言つてマービンは微笑んだ。

マ 「俺のことはいい：他の生存者を探してくれ：」
レ 「でも：。」

マ 「さあ行け！お前らなら間に合う：」

レ 「必ず戻つて来るからな！」

そうして俺たちは部屋を出た

……

……

……

弥 『あそこのパソコンが使えそうだな』

レ 「ここにカードを差し込んで：出来た！」

近くで鍵が開いた

弥 『どこから行くよ？』

レ 「一番手前から順々にかな」

レオンがドアノブを捻ると、ドアは軋みながら開いた

弥 『窓口?』

レ 「多分」

ク 「何故?」

レ 「わからん」

部屋の隅にコンテナが有った

弥 『これ使えるかなあ?』

レ 「持ちきれない荷物でも置いとけばいいんじゃないか?」

弥 『そうだな』

またドアを開ける

レ 「またかよ!」

レオンは悪態をつきながらも的確にヘッドショットを決める

弥 『よくそんなに当たるよな!』

俺は胴体に当てるのでやつと

ク 「貴方が下手なだけよ!」

辛辣な言葉を吐きながらクレアもヘッドショットを決めていく

弥 『失礼な!』

そうしてらうちにゾンビは全滅した

……

……

……

廊下を進んで角を曲がった

弥 『ん……！』

異様な死体があつた、首から上が無いのだ

それも刃物で切られたような傷では無く、力でねじ切られたような跡があつた。

レ 「何だこれは……」

ク 「……」

何かが滴るような音がした、上を見ると、

異形な者が居た、舌が長く人から皮を剥がしたような外見で、

天井に張り付いていたのだ

そして、落ちてきた

レ 「逃げろクレア!!？」

俺はクレアを突き飛ばした、直ぐに右半身に痛みを感じ意識を失った

最後に聞いたのは、クレアとレオンの叫び声だった

幻想郷より

幻想入り

目が覚めると見知らぬ森にいた。

ここはどこだろうか…。

まあとりあえず生きている、それどころか怪我も治っている。

手元のC96もまだ弾が残っているようだ、これで安心

警察署の近くには森は無かったはずなのに俺は森にいる。

…!?

何故？

よく考えたらずっと聞こえていた呻き声や悲鳴は聞こえなくなっている。

近くの鳥や虫の声がよく聞こえ、

近くに湖でもあるのかせせらぎの音が聞こえる

取り敢えず…、歩くかな。

…

…

特に何も無く進んで行くと、前に小さな女の子が居た。
金髪で黒いワンピースの少女が浮いていた。

…どゆこと!?!?

少女はワイヤーとか紐とかで吊るされているわけでは無く
フワフワ浮いていた。

俺が驚いて見ているとこちらにフワフワやってきた

? 「貴方は食べても良い人間?」

…何という質問、ダメと言って聞くかなあ

弥 『ダメですよ?』

? 「何ですよ?」

何で?俺が死にたくないから

弥 『まだ死にたくないんですよ』

? 「腕一本でも良いのよ?」

弥 『嫌です』

? 「もう、わかったわよ、で貴方名前は何?」

弥 『弥生と言います』

? 「へえ、私はルーミア、妖怪よ」

なるほど、つてなるかよ！妖怪？何じやそりや!!？

弥 『そ、そうなんですか。で妖怪ってどういうことですか?』

ル 「そのままの意味よ、分かるでしょ?」

弥 『すいません、来たばかりでして、良く分かりませんの』

ル 「ああ、外来人なのね、説明してあげましょう。ここは幻想郷。

忘れ去られたものが来る所よ?」

∴ Oh No なんとという事だ、俺忘れられちゃったの?マジ?

弥 『本当ですか?』

ル 「本当よ?」

とりあえず俺は、ルーミアについて行くことにした。

∴∴∴∴

∴∴∴

∴

しばらくルーミアについて行くと、大きな鳥居と階段が見えた、やべえ∴高けえ∴

息切れしながら登っていると、ルーミアが話し掛けてきた。

ル 「情けないわねえ、これぐらいで息切らすなんて」

弥 『仕方ないでしょ、外界ではこんな急な階段なかなかないもん』

ル 「へえ、貧弱ねえ」

弥 『外はそんなもんですよ』

ル 「あ、そろそろ着くわよ？ 気をつけてね、ここの巫女気難しいから」

弥 『ほお、面倒くさいねえ』

？ 「めんどくさくて悪かったわねえ？」

ル 「あら、見つかつちやった」

階段の上に少女がいた、巫女服のような服を着ているが、

俗に言うオフショルダーのようになっていた

頭には大きなリボンをつけ、お祓い棒を肩に当てながらこちらを見ている、

眉間に皺を寄せながら…

弥 『何で眉間に皺寄ってるの…』

ル 「聞かれてたんじゃない…？」

？ 「そこココソコソしない！」

弥 『すみません』

？ 「はあ…で、あんた誰？」

弥 『私ですか？ 私は弥生です、よろしく』

？ 「へえ、私は霊夢よ、博麗霊夢、それであんた、外来人？」

弥 『そうらしいですねえ、良く分らないですけど』

霊 「それで、あなた帰りたいの？」

弥 『…それでも無いんですよねえ』

霊 「じゃあ何で来たのよ!!？」

弥 『連れて来られたので』

霊 「はあ…所で何で帰りたくないの？」

弥 『まあここが気に入ったのが一つ』

霊 「あとは？」

弥 『外に洒落にならない怪物たちが居るのが一つ』

霊 「ほう…どんな？」

弥 『生ける屍と、下の長い怪物とか、色々』

霊 「そんなのここにも居るわよ？」

マジかよ、面倒な

弥 『だけど引つ搔かれたり噛まれただけで感染しないですよね?』

霊 「確かにそこまではまだ居ないわね」

? 「よう霊夢く!、そいつは誰だぜく?」

後ろから金髪の魔法使いみたいな服を着た少女が来た、元氣そうな子ね

霊 「あら魔理沙、また来たのね」

魔 「またって何だよ、邪魔みたいな言い方しやがって、で、お前誰だぜ?」

弥 『私ですか? 弥生って名前です』

魔 「ほう、私は魔理沙だぜ!」

霊 「立ち話もなんだから、中に入りましょ」

霊夢から神社に入って良いと言われたので皆上がらせてもらった、初めてかも

……

…

中は思いの外質素で、ちゃぶ台、タンスなどの必要最低限しかなく、シンプルそこに4人ちゃぶ台を囲んでお茶を飲んでいる、なんだこの絵面。

魔 「で、弥生が持つてるそれは何だ?」

弥 『ん? これか? 拳銃だよ』

魔 「どう使うんだ?」

弥 『専用の弾丸を入れて、ボルトを引いて、引き金を引くと弾が出る』

魔 「どのくらいの威力なんだ?」

弥 『人を殺すのには十分なくらい、弾によって変わるぜ?』

何と無く表情をニヤツさせて見たら、魔理沙と霊夢が青ざめていた。どした?

弥 『どしたの？青ざめちゃって』

魔 「いや怖ええよ！そりや青ざめるわ！」

霊 「右に同じよ！」

ちなみに、ルーミアはニヤニヤしています

弥 『まあ怪物には力不足が否めないけど』

霊 「じゃあそんなに速く無いの？」

弥 『いや、弾が小さいんだよ』

葉室から一発取り出すと霊夢の方に転がした

霊夢と魔理沙はそれを拾うと、興味深そうに見ている、珍しいからね

魔 「こんな小さいのがそんな速く飛ぶのか？」

弥 『見せるのが一番いいんだろうけど、的が無いと分かんないかも知れないね』

霊 「外の木にでも当てれば良いんじゃない？ご神木は駄目だけど」

弥 『耳塞いでおいた方がいいぞー』

魔理沙以外が耳を塞いだのを確認して、引き金を引いた

耳を劈く破裂音と共に弾丸が発射され、放たれた弾は木にめり込み止まった

魔 「何も聞こえないぜ？」

霊 「あのバカは放っておきましょう」

弥 『で、どう思う?』

霊 「確かに妖怪には力不足ね、あれじゃ怯むだけ」

弥 『やっぱりかあ…』

…

…

その後神社に戻った

弥 『俺どこに泊まろう?』

魔 「ウチはどうだ?」

霊 「あんたの家は瘴気とガラクタの温床でしょ」

弥 『…ウチみたい』

魔 「ならウチに来るんだぜ!」

俺は手を引かれて神社から連れ出された、霊夢とルーミアは俺に手を振っていた
有無を言わず俺を箒に乗せると、楽しそうに浮かび上がった
箒ってこんな早く飛ぶんだなあと感じっていると、森に着いた。

魔 「お前は瘴気大丈夫なんだな」

弥 『その様で』

魔 「それはそうと、これがウチ、霧雨魔法店だ!」

弥 『ほほう…、良いじゃないの』

魔 「ささ、入った入った！」

中に入ると、さっきの台詞を撤回したくなった。

見知らぬ物

魔理沙の家に入ると、知らない物に溢れていた

しかし通り道と思われる空間はあり、そこには物が無かつた
気になる物を手に取ると、それはナイフだった、

All es fur Deutschlanbと書いてある

弥 『魔理沙、これくない？』

魔 「どれだ〜いいぜ〜」

弥 『ありがと、貰いますね〜』

魔 「じゃあここで今日は寝てくれ」

なかなか綺麗な布団が丁寧に敷かれていた、育ちが良いのかね

弥 『ありがとな〜』

魔 「寝てる間に襲ったりするなよ？」

弥 『分かってるよ、やらねえし』

魔 「じゃ、おやすみ〜」

弥 『おやすみ〜』

俺は疲れていたらしく、直ぐに眠りに落ちていた。

……

……

……

？ 「…ねえ、聞こえる？」

懐かしい声が聞こえた、聞き覚えは無いが何故か心地の良い声だった

弥 『誰だ？』

？ 「私は蛇、貴方の命の代わりよ」

弥 『やっぱり彼処で死んでいたんだな』

蛇 「そうよ、で変わりが私」

弥 『ほう、じゃ貴女がいなければ死んじやう訳ね』

蛇 「そう、その代わり貴方に能力が追加されたわ《作る能力》がね」

弥 『何でも作れるわけ？』

蛇 「そうよ、何でもね、だから私ほぼ仕事なくなるわね、貴方が蓬莱の薬を作れば」

弥 『それは要望？』

蛇 「そうよ、楽したいからね、あと私に名前つけてくれない？」

弥 『うん…うん？』

弥 『最初は分かるけど名前を付けろと?』

蛇 「そうよ、名前」

弥 『分かった…、考えとくわ』

蛇 「よろしく、起きる時間らしいわよ」

そして俺は目が覚めた、蛇は女性みたいね

…

…

魔 「弥生く起きる時間だぜ」

弥 『うい、おはよう』

魔 「おはようだぜ」

弥 『そういえば蓬菜の葉って何だ?』

魔 「ああ、不老不死の葉って奴だ、何でも月の都とやらで作られたらしいぞ」

魔 「で、それがどうした?」

弥 『なに、気になっただけさ』

魔 「ふーん、そうか、じゃ朝飯にしようぜ?」

弥 『分かった、今日は何だ?』

魔 「きのご鍋だぜ!」

弥 『良いねえ、美味しそうだ』

魔 「じゃあ食べようぜ」

弥 『いただきます』

魔理沙は料理は得意のようだ、普通に美味しかった

……

：

魔 「これからどうすんだ？」

弥 『どうしましょうね？』

魔 「まあとりあえず住む場所が見つかるまでいて良いぜ」

弥 『ありがたいね』

魔 「で、今日どうすんだ？」

弥 『なんか良いところないかなって見て回ろうかな』

魔 「じゃあ私が案内してやるぜ！」

弥 『じゃあ頼みます』

魔 「よし！、早く準備しろよ、早く行こうぜ！」

この子元氣だね、すぐやる気になる。

……

魔 　　： 「ここは人里だぜ〜」

箒に乗って少しすると村の様なものが見えた、しかも近年では無く、江戸に近い

弥 『駄目だ、ここには住めない』

魔 「私も同感だ、ここはつまらない」

魔 「あとは、紅魔館ぐらいか？」

弥 『どんな所なのさ？』

魔 「吸血鬼と、魔女と、悪魔がいる紅い館』

弥 『凄く怪しいです』

魔 「だけど気になるだろ？」

弥 『もちろん』

魔 「じゃあ飛ばすぜ〜！」

……

：

少し飛んで行くと目に悪い色をした館があつた

弥 『あれが紅魔館か？』

魔 「ん？、そうだ」

弥 『ますます怪しい、なんか寝てるし』

魔 「ああ、あいつは何時もこうだ」

弥 『門番なの？』

魔 「そう」

弥 『駄目じゃん』

他愛もない話をしながら館の前に降り立った

弥 『ごめんください』

？ 「…ん？、誰ですか？」

弥 『あ、私は弥生と言います』

？ 「私は紅美鈴です！、この事は咲夜さんには秘密に…」

？ 「誰に秘密にしろって？」

紅 「ひつ、さ、咲夜さん…」

咲 「初めまして、私はこの館のメイド、十六夜咲夜です」

弥 『初めまして、弥生です』

咲 「お嬢様がお呼びです、こちらへどうぞ」

弥 『魔理沙く、行って来るねく』

魔 「おっおい」

館の門はそこで閉ざされた

……

：

咲 「武器は一度預けて頂けますか？」

弥 『あ、はい』

モーゼルと短剣を預ける、デリンジャーはブーツの中に入っているが、まあ良いだろう

咲 「ブーツの中のもよろしいですか？」

弥 『ありや、バレちゃいましたか』

咲 「メイドですから」

この人メイドを完璧超人だと思ってるのかしら

仕方がないのでデリンジャーも預ける、残念

咲 「それでは、こちらです」

中に入ると王座のような椅子があり、そこに少女が座っていた、とりあえずそこまで歩いて行き、

王座の下で立膝をし、自己紹介する

弥 『私、弥生と申します、差し支え無ければ貴女様の御名前をお聞きしたい』

? 「あら、礼儀はわきまえてる様ね、私はレミリア スカーレットよ」

弥 『ご用件は何でしょうか?』

レ 「単刀直入に言うわ、ここに住みなさい」

弥 『何故でしょうか、執事にでも私をお使いになるのですか?』

レ 「いいえ?、客人としてよ」

弥 『1日考えさせていただきませんか?』

レ 「良いわよ、それじゃ下がって良いわ」

弥 『私は魔理沙の家に居ます、明日来なければそこまで来て頂いてよろしいですか

?』

レ 「良いわよ」

弥 『それでは失礼します』

そうして俺は部屋を後にした、あの人を惹きつける何かがあるね。

……

…

武器の一通りを返してもらった後、咲夜さんに別れを告げ、魔理沙と共に帰った

魔 「大丈夫だったか?」

弥 『なんか奥に凄い人いた』

魔 「レミリアの事か？」

弥 『そう、その人』

魔 「あいつカリスマ性があるからな」

弥 『へえ、それでさ、なんか紅魔館に住めって言われた』

魔 「マジか！」

弥 『アリだと俺は思うの、どう思う？』

魔 「確かにアリだな、あそこ金あるし」

弥 『ただまだ魔理沙のところを離れるのは名残惜しいのよ』

魔 「良くそんな台詞真顔で言えるな…」

弥 『??』

魔 「まあなんだ、たまにウチに来てくれよ、人手が必要なんだ」

弥 『分かった、善処する』

家に入ると今日もキノコ鍋だった、ちよつと飽きた

…

…

魔理沙の見えないところで蛇に言われた蓬萊の薬とやらを飲んで見た、特に変化もなく良く判らなかつた

少しすると時空が裂け、中から女性が出て来た

？ 「貴方が弥生かしら？」

弥 『そうですが、貴女は？』

？ 「八雲紫、貴方は何者なの？」

弥 『人だつた者です』

紫 「と、言うとは？」

弥 『どうやら一回死んでいるようで』

紫 「蓬莱人？」

弥 『それでもあります』

紫 「…はあ、私は幻想郷の管理人の様な仕事をしているわ、困ったら言つて？」

弥 『分かりました、どう貴女を呼べばいいですか？』

紫 「名前を呼んでくれたら行くわよ」

弥 『それでは早速』

紫 「何かしら？」

弥 『紅魔館に住めと言われました』

紫 「本当？」

弥 『はい』

紫 「なかなか無い事よ、レミリアが他人に住む場所を提供するのは」

弥 『じゃあお言葉甘える事にします』

紫 「気を付けてね、あそこには気の触れた子が居るわ」

弥 『何とかなると思いますが、それではおやすみなさい』

紫 「おやすみなさい、頑張つてね」

……

：

魔 「誰と話してたんだ？」

弥 『八雲紫つて言う人』

魔 「あいつか……」

弥 『どうした？、なんか嫌な思い出でも？』

魔 「いや、あいつ胡散臭いよなって」

弥 『そう？裂け目から出て来る時はそう思ったけど』

魔 「まあいいや、おやすみ」

弥 『おやすみ』

またもすぐに眠りに落ちた、疲れてるのかな

……

：

蛇 「あらー、また来たのー」

弥 『名前考えて来たぞー』

蛇 「どんな感じ？」

弥 『コレットなんてどう？』

蛇 「うーん、コレットねえ、気に入ったわ、今日から私はコレットよ」

弥 『喜んでくれて良かったよ』

コ 「大切にするわね」

嬉しそうな彼女は可愛かった、彼女にするならこう言う子が良いね

紅魔館1日目

昨日考えておくと言ってしまったので、

迎えが来るまで魔理沙に幻想郷を案内してもらおう事にした

魔 「ここは無縁塚だ、私や霊夢と一緒にのとき以外は来ちゃダメだぜ」

弥 『何故?』

魔 「ここはいろんな意味で危ない、妖怪は凶暴で獣のようだし、結界の外に弾き出される事もあるからな」

弥 『危険なのね、来るときは貴女を呼ぶわ』

魔 「任せろ!」

ふと奥を見ると、薄い青に光る大きな物があつた、あれは…車か?

弥 『少し奥に行つて良いか?』

魔 「ん?、良いぜ」

見覚えのある形をした車があつた

弥 『やっぱりだ…』

魔 「何だ?これ」

弥 『俺の車だ』

魔 「へえ、動くのか？これ」

弥 『多分な』

幸い鍵はまだ持っていたので、車内に入り、セルを回す、すると心地良い振動とエンジン音が辺りに響いた

魔 「お、動いたな、だけどスピードはどうなんだ？」

弥 『100キロは軽いな』

魔 「なかなかじゃ無いか」

弥 『紫、来て下さい』

空間に亀裂が入り、スキマが空いた

紫 「何かしら？、あら、車？」

弥 『これは私のなんです、空を飛べないのでこれを移動手段にしてよろしいですか？』

紫 「良いんじゃ無いかしら？」

弥 『それだけです』

紫 「じゃ、ごゆっくり」

そうして紫はスキマの中に消えた

弥 『…ガソリンは能力で賄うかな…。』

魔 「お前能力あるのかよ!?、どんなのだ?」

弥 『作る能力みたい』

魔 「凄いなそれ」

ついでに車が壊れないように能力で自己再生機能をつけた、これで安心だろう

魔 「じゃあそれに乗って帰ろうぜ」

弥 『そうしよう』

ギアを1に入れ、霧雨魔法店に帰った

…

…

魔理沙宅に帰ると、玄関先にレミリアと咲夜が居た、

咲夜は礼儀正しく頭を下げ、レミリアはニヤニヤしていた、俺もニコニコしておく

レ 「遅かったわね、どこ行っていたのかしら?」

弥 『少し無縁塚に行って来ました』

レ 「なんか欲しいものは有ったかしら?」

弥 『愛車が見つかりました』

レ 「じゃあ乗せてって頂ける?」

弥 『分かりました』

エンジンをかけ直すと、持病のバックファイアが出てしまった

レ 「何^{!!}?、どうしたの^{!!}?」

弥 『すいません、まだ本調子でないようで…』

レ 「ああ、そうなのね…」

弥 『後部座席か助手席、どちらが良いですか?』

レ 「折角だし、助手席にするわね」

弥 『それでは、お乗り下さい』

左ドアを開けつつそう言うと、レミリアはお淑やかに乗り込んだ

弥 『咲夜さんは後部座席で良いですか?』

咲 「はい、大丈夫です」

椅子を倒して後ろに乗り込んで頂く、3ドアだと乗り辛いかな

…

…

少し走っていると赤い館が見えて来た、あれがこれから俺の家になるのか…趣味悪

レ 「貴方今趣味悪とか思ってた無い?」

弥 『いいえ?、滅相もございません』

レ 「そう、なら良いわ」

危ねえ、バレルところだったぜ

大きな門が開くと、噴水と植込みがありそこを突つ切る様に石畳があつた

石畳走れば良いよね

レ 「ここで停めてくれる？」

弥 『あ、はい』

レ 「ここが今日から貴方の家になる、紅魔館よ」

車から降りながら芝居っぽくレミリアはそう言った

レ 「夕食の時に紹介するから咲夜に部屋を案内してもらいなさい」

弥 『了解です』

レ 「また後でね」

レミリアはそうして自分の部屋に戻って行った

咲 「それでは弥生さん、こちらに」

弥 『はい』

少し歩くと廊下の突き当たりがあり、端から二番目の部屋に案内された

咲 「家具は自由にお使い下さい、私物を置くのも良いですね」

弥 『この部屋は自由にして良いんですね？』

咲 「そういう事です」

咲 「それでは失礼します、用件が有りましたらお呼びください」

弥 『分かりました』

ふう…やつと寝れる、ここの住人と会う前に寝ておきたいからね
俺はまた眠りに落ちた

…

：

弥 『おつす、コレット』

コ 「今日は貴方よく寝るわね」

弥 『なんか疲れたんよ』

コ 「お疲れ様」

弥 『で、どう思う？』

コ 「怪しいよね、いきなり初対面の人間に家に来いなんて」

弥 『俺もそう思うんだよ、なんか裏がありそうだ』

コ 「あら、もう時間らしいわよ」

弥 『じゃあ、適当に行ってくる』

…

：

弥 『…ああ、咲夜さんでしたか』

咲 「お嬢様がお呼びです、早く起きて下さい」

咲夜と共に食堂に行くと、大人数が集まっていた

レ 「彼が今日から紅魔館に住むことになった弥生よ、それじゃ弥生、自己紹介して」

魔 『今日からここに住むことになった、弥生です、以後お見知り置きを』

？ 「ふーん、パチュリーよ」

？ 「小悪魔です、こあつて呼んで下さい！」

紅 「この前はともです、紅美鈴です！」

レ 「あと妹のフランが居るわ、あまり外に出て来ないの」

弥 『それでは部屋に戻って良いですか？、準備が有りますので』

レ 「あら、食べないの？」

弥 『食欲が無いので』

レ 「そ、そうなの」

弥 『それでは、用があれば呼んで下さいね』

俺はそう言い残し、食堂を後にした

……

…
妹はどんな人なんだろうか、引き籠もっているらしい、自分に似た香りを感じるしかし、なかなか大変なことになった、馴染むのは大変そうだそんな俺は今机を精製している、コレット曰く時間がかかってしまうらしい数分すると出来上がった、西洋風のインテリアに合う物にした位置を何処にするか考えているとレミリアが入って来た

レ 「ねえ、何してるの？」

弥 『机の位置をどこにしようかなって』

レ 「そこが良いんじゃない？」

部屋の隅に指差しながらレミリアは提案してくれた、良いじゃん

弥 『良いですね、そうしましょう』

弥 『で、要件は？』

レ 「そうそう、図書館に一緒に行きましょう？」

弥 『良いですけど、どうしてです？』

レ 「良いから着いて来なさい！」

強引に俺の手を取ると、レミリアはグイグイ引っ張って行った、図書館どこ？

…

：

しばらく歩くと大きな扉に着いた、この館広いな

レ 「パチエ、入るわよ」

そうレミリアが言うのと、扉が独りでに開いた、凄いなこれ

小 「こんばんは、弥生さん♪」

弥 『こ、こんばんは』

小 「ささ、こちらへ」

弥 『は、はい』

そのまま付いていくとパチュリーの居る所まで案内された

パ 「どうしたのかしら？」

弥 『連れて来られました』

パ 「もう、レミィ、なんで連れて来たの？」

レ 「貴女達合いそうだからよ」

俺が苦笑いしていると、パチュリーが話しかけてくれた

パ 「貴方魔法に興味あるかしら？」

弥 『ありますね、外には無いので』

パ 「じゃあ気になる事があつたら私に言いなさい、教えてあげるわ」

弥 『ありがたいです』

弥 『それでは部屋に…』

小 「それじゃ弥生さん、私とお話ししましょう！」

弥 『え？、あ、はい』

そうして俺は半ば強引に連れて行かれた、もうやだ寝たい

紅魔館 2 日目

小悪魔に連れて行かれたのは、本棚の一角だった

そこには《魔導大全》や《グリモアール》など魔導書が置いてある

小 「この中から気になる本を選んで下さい♪」

弥 『ん、じゃあこれで』

俺が選んだのは《闇魔法入門》という本だった

小 「お目が高いですねえ、流石です♪」

小 「それじゃパチュリー様の所に行きましょう！」

また手を引つ張られてパチュリーの所に連れて行かれた、本日二度目です

パ 「貴方、これをやるの？」

弥 『出出しで難しい方が後々楽かなって』

パ 「はあ…、まあ良いわ、闇魔法は影や暗闇を操ることが…」

突然横の扉が爆発して中からレミアに似た金髪の子が出て来た、

その子がニヤリとした後、俺の視界は暗転した

……

…

：

コ 「貴方殺されちゃったのね」

弥 『二度目だな』

コ 「復活まで時間が掛かるわよ」

弥 『やっぱり？、どれぐらいよ』

コ 「15分ぐらい？」

弥 『意外と早いな、服とか身に着けてた物は？』

コ 「安心なさい、大丈夫よ」

弥 『で、どんな感じで死んだよ？』

コ 「頭が飛んだわ」

弥 『派手に逝ったな』

コ 「あ、それと肉は再利用したりするけど血は無理よ、だから辺りは血の海ね」

弥 『ご迷惑ですねえ全く』

コ 「あ、出来たみたいよ、行ってらっしゃい」

弥 『はい』

…

：
グジグジュと言った嫌な音と共に肉体が構成されて行つた、あれ?、出来たんじゃなかつた?

目玉が出来た頃、周りの視線は驚きであつた

パ 「貴方今、死んだわよね…!!?」

弥 『残念ながら死んでしまいました』

パ 「じゃあ何故そこにいるの…」

弥 『私蓬萊人なんで生き返るんです』

パ 「そういう大切な事は先に言いなさい、心臓に悪いわ」

パチユリーは溜息をつきながら呆れたようにそう言つた

弥 『気を付けます』

レ 「え?え?、どういう事?」

パ 「薬にの効果で死なないって事よ」

レ 「ああ、そういう事ね、つてなるかーッ!!?」

レミアアがわきやわきやしていると、さっきの彼女が居た

? 「あれ?、壊したのに何でそこに居るの?」

レ 「フラン、貴女彼程言つたのに…」

フ 「貴方は誰なの？」

弥 『弥生と申します』

フ 「私を怖がらないなんて、なかなか肝が据わってるのね」

弥 『もう一度目死んでますしね』

フ 「気に入ってたわ！、私フランよ！」

後ろのレミリアの目が死んでますよ

レ 「フラン：？、人の話を聞きなさい：？」

ギギギとフランが首を回すと紅い槍の様な物を持ったレミリアが笑みを浮かべていた、ヤバいぜこりや

フ 「逃げるよ弥生！」

またも手を引かれ連れて行かれる俺、今度は何処に行くんでしょう？

……

……

連れて来られたのは地下室だった、所々に赤黒いシミが付いているが、それ以外は年頃の少女の部屋だった

フ 「ここが私の部屋なの、そこらじゅうにシミがあるでしょ？、それが壊しちゃった人の数だよ」

フ 「本当は壊したくなかったの、だけど遊んでいるうちに……」

そのままフランは泣き出してしまった、心優しい子なのね

少しして落ち着いて来たらしく泣き止んだ、丁度外の部屋からレミアが入って来た

レ 「聞いたわよ、貴女も反省はしてるのね」

レ 「今回の事は無かった事にしてあげる、ただ図書館の掃除はするのよ」

フ 「了解しました!!?」

レ 「弥生もよ?」

弥 『え?、私もですか?』

レ 「そうよ、貴方の肉体だった物でしょう?」

レ 「それに見なさいよ、パチュリーの目、ジト目どころの騒ぎじゃ無いわよ」

パ 「何かしらレミイ……?」

レ 「なんでも無いわよ?」

俺はモップを作っておく、三本あれば良いかな、あとバケツ

弥 『さて、フラン始めましょうか』

フ 「そうしましょう」

そのあとテンションが上がって図書館全域を掃除したのはまた別のお話

……

：

部屋に戻って転がっているうちに寝てしまったようだ、体が痛え

調子に乗って図書館全域を掃除したのは間違いだっと思ったと思う、もう気力がない、次いでに体力もない

このまま寝てしまいたい所だが、平和な時間は長く続かない

一時間くらいボーっとしていたら、窓の外に灰色の服で、白い顔の少女がいた、最早ホラーだよ

しかも俺の部屋の窓を叩いていると来た、これは開けてあげるべきかな？

弥 『えーと、どうされましたか？』

？ 『えー、ここは何処でありますか？』

弥 『ん？、もう一回よろしいですか？』

？ 『あ、ここは何処でありますか？』

弥 『ちよつと待っていてもらって良いですか？』

？ 『了解であります』

さてはてどうした物が、取り敢えず中に入れれば良いかな

弥 『咲夜さーん、来て下さーい』

咲 『どうされましたか？』

弥 『窓の外の子をこの部屋に連れて来て下さい』

咲 「確と承りました」

しばらくして、咲夜と外にいた子が来た

? 「ここはどこなんでありますか!?!?」

弥 『幻想郷です』

? 「どういう所でありますか?」

弥 『化け物いっぱい』

弥 『貴方の名前は?』

? 「あ、失礼、自分陸軍揚陸艦、あきつ丸であります!」

この子何言ってるの?、俺には理解不能

弥 『私は弥生、人間だった者です』

あ 「どういう事であります?」

弥 『今は蓬莱人になって、死なない体になってます』

あ 「良く分からないでありますなあ」

弥 『私も分からないです』

あ 「行く当てが無いので泊まらせて欲しいであります」

弥 『ちよつと待って下さい、確認してきます』

あ 「分かったであります」

取り敢えずレミリアに確認を取りに行く、俺の独断はまずいからね

弥 『レミリアー、いますかー』

返事がない、取り敢えず入ってみる

弥 『あ、すみません』

慌てて閉めたのには理由がある、そりゃ下着姿の奴がいたら閉めるし

レ 「もう良いわよ…」

レミリアが出て来た、ちゃんと服着て

レ 「何の用かしら？」

弥 『空き部屋ってありますか？』

レ 「無いわねえ、誰か居るの？」

弥 『あきつ丸って子が』

レ 「貴方と相部屋で良いんじゃない？」

弥 『マジで言ってるの!?』

レ 「ちよつと、タメ口になってるわよ」

あ、やべ、ビックリしてタメ口になっちゃったわ

弥 『すみません』

レ 「だけど貴方、その方が良いわよ」

弥 『まあ、慣れて来たらそうしますね』

レ 「じゃ、そういう事よ、頑張つてね」

有無を言わずレミリアは部屋に戻ってしまった、先が思いやられる

……

……

部屋に戻るとあきつ丸は寝てしまっていた、疲れたのでしよう

幸いソファで寝てるので、毛布を掛けるだけで済んだ、後でセクハラとか言われたら

敵わん

少し作業していると、あきつ丸が起きた様で、机を覗き込んできた

あ 「何をしてるんですか？」

弥 『銃の整備を少し』

あ 「モ式大型拳銃でありますなあ、しかも9mm弾仕様」

弥 『よくお分かりですねえ』

あ 「それでは自分も十四式の整備をします」

こうしてモノトーンの二人が並んで作業をしようというシユールな絵面になったの

だった

…

…

作業も終わり、何かを忘れていた、相部屋という事だ

日本陸軍とはいえ、女性であるから、ハードルが高いと思う、取り敢えず聞いておこ

う

弥 『えーと、あきつ丸さん？』

あ 「なんでありますか？」

弥 『残念ながら部屋を用意できませんでした』

あ 「残念でありますなあ」

弥 『なので、相部屋になってしまいました』

あ 「はい、それで？」

弥 『いや、それでも大丈夫かなあつて』

あ 「気にならないでありますよ」

弥 『なら良いです』

これは俺が男として見られていないって事ですわかります

この後、あきつ丸と談笑してから、眠りについた

…

：

弥 『またまたこんにちは』

コ 「貴方、意外とすぐに馴染んだわね」

弥 『まあ、レミリアのおかげじゃん？』

コ 「レミリアには感謝しなきゃね」

弥 『そうだねえ』

なんか、外界より平和な気がする

人里より

なんとなく人里に行きたいと思った、それは甘味が欲しいからだ、それも和菓子多分咲夜に頼めば買って来てくれるだろう、だけどなんかこう釈然としない

レ 「だから人里に行きたいの？」

弥 『そうなんですよ』

レ 「良いけど、気をつけなさいよ？」

弥 『わかりました』

レ 「あと、誰かと一緒に行きなさい」

弥 『じゃあ、あきつ丸辺りと行きますね』

レ 「そうしなさい、じゃあ行ってらっしゃい」

弥 『行って来ますね！』

……

……

あきつ丸を誘って人里に来た、建物は明治より古い時代の建て方で、アスファルトも

無い

しかし活気はあるし、所々現代の技術が垣間見える所もあり、独特の雰囲気がある
あ 「何処に行くのでありますか？」

弥 『甘味処とか本屋とか、あとは適当に』

あ 「決まってるんでありますな」

弥 『そういう事ですなえ』

? 「ちよつと、その君！」

はいはい無視無視、あんな呼び方する奴大体面倒くさいからね

しかし、肩に手を置かれたら流石に無視は出来ない

弥 『何でしょうか？』

? 「悪いのだが、子供を探してくれないか？、生徒の数人が逃げてしまつて……」

あ 「了解であります！、帝国陸軍の誇りに掛けて探し出すでありますよ！」

弥 『もう……で、貴女の名前は？』

? 「上白沢慧音だ、寺子屋に居るから見つけたら連れて来てくれ、子供の名はチルノ
だ」

弥 『分かりました、外見の特徴は？』

慧 「青いワンピースで青い髪、あと他には、大妖精、リグル、あとルーミアだ、

多分一緒に遊んでいるから見つけたら連れて来てくれ」

弥 『分かりました、探して見ます』

慧 「よろしく頼むぞ！」

……

…

こう考えると、出歩く事に面倒ごとに巻き込まれる気がする、まあ探すんですけどルーミアが居るらしいので、湖付近に来て見た、上手く行けばここにいるはずだ

ル 「あー、弥生〜」

弥 『おつす、お久しぶり』

? 「あんた誰?、今なら子分にしてやっても良いぞ!」

弥 『遠慮しておきますね』

? 「あたいはチルノ!、あんたの親分よ!」

人の話を聞かないのね、了解です

弥 『慧音さんが心配しているようですよ、帰る帰らないは勝手ですが、帰った方が身の為ですね』

チ 「やなことつた!、授業つままないし!」

そのチルノの背後には慧音が居た、ああ、終わったな

弥 『ところでチルノさん、背後に気付いて居ますか?』

チ 「何も居るわけ…、あ」

目の光が無い慧音がチルノの頭を驚掴みにしてどこかに消えた、御愁傷様です
しばらくして、頭にたんこぶを携えたチルノと慧音が帰って来た、なんだあれ頭ぐら
いあるぞ

慧 「迷惑かけてしまったな、ありがとう」

弥 『いえいえ、主に頑張ったのはあきつ丸ですから』

あ 「え、まあ少しは頑張ったであります…」

慧 「何か困った事があれば言ってくれ、出来る限りの事をするから」

弥 『分かりました、早速ですが甘味処はどこですか?』

慧 「ああ、人里の大通りにあるぞ」

弥 『ありがとうございます、それでは』

そうして俺はその場を離れた、チルノとルーミアが何かを言っていたが、よく分から
なかった

…

…

大通りをだいぶ歩くと、甘味処の看板が見えた、大通りの端から端まで歩いた気がす
る

あ 「疲れたでありますなあ、何を頼むんでありますか？」

弥 『俺はみたらし団子を頼むよ』

あ 「自分もそうするであります」

弥 『みたらし団子2人分お願いします』

店 「はいよ！」

少しして団子が届いた、美味しそうな香りだ

あ 「おいしいでありますよ！」

弥 『そうだな、作りたてだからかなあ』

あ 「そうでありますなあ、次はどこに行くでありますか？」

弥 『本屋さんにでも』

あ 「良い案でありますな」

弥 『食べ終わったら向かいますかね』

あ 「了解であります！」

食べ終わって少ししてから、俺たちは甘味処を出た

……

：

甘味処の主人に聞いた話だと、本屋は無いが貸本屋があるらしい、本が読めればそれ

で良いや

鈴奈庵というらしいが…、有った、だいぶ遠かった

中々古い書籍や妖怪に関する本が多いようだ、流石幻想郷

？ 「何をお探しですか？」

弥 『妖怪についての本を少々』

？ 「ほほう、それなら知り合いに書いている人が居ますよ、紹介しましょうか？」

弥 『是非！、そういえば貴女は？』

？ 「あ、申し遅れました、私本居小鈴って言います」

弥 『小鈴さんですね、私は弥生と言います』

小 「あ、弥生さんですね、妖怪の本の著者は、稗田阿求っていう人です、今度言っ

ておきますね」

弥 『よろしくお願いします』

そうして俺たちは店を出た、あきつ丸は本を借りた様だ

弥 『何を借りたんだ？』

あ 「秘密でありますよ」

弥 『秘密ですかあ』

あ 「そうでありますよ」

弥 『次どこに行きます？』

あきつ丸にそう問うと、にこやかに笑いながら

あ 「適当に決めて欲しいでありますよ」

と言った、キュンとするよね

弥 『紫く、出て来て下さいな』

そうするとスキマが開き、紫が顔を出した、それ貞子みたいだな

紫 「なんか失礼な事考えてない？」

弥 『考えてないと思いますよ』

紫 「そこは断言しなさいよ……」

紫 「で、何の用？、私は冬眠の時期なんだけど」

熊なのかしら、冬眠って

弥 『ここら辺で綺麗な所ってありますか？』

紫 「向日葵の畑なんてどうかしら？、住んでいる奴が中々危険だけど、花を傷付けな

ければ問題無いわ」

弥 『ほほう、どこら辺にあるんですか？』

紫 「あそこ、ちよつと遠いけどね」

弥 『じゃあ行って見ますね』

紫 「行つてらっしゃい〜」

こうして俺たちは向日葵の畑を指して歩き始めた、車持つて来れば良かった

……

…

特に道中何も無く、普通に歩いて来れた、しかし不穏な空気が少ししている

銃に弾は入っている事を確認してから向日葵の畑には行つた、そこには向日葵が咲き誇つて居た

今冬だよね？、そして背後からは不穏な気配がしている、何かいるようだ

あ 「…背後に気配を感じています」

弥 『ああ、俺もそう思うんだよ…』

あきつ丸と話していると、背後にいた気配が前に来た、緑の髪に日傘を差した女性だが

何とも言えない殺気を感じる、まだ悪い事してないですよ？

？ 「貴方達は何をしに来たのかしら？」

弥 『観光の様な物です』

？ 「誰に言われて来たの？」

弥 『八雲紫です』

？ 「それは本当かしら？」

弥 『ええ、ここで嘘を吐いても良い事無いので』

？ 「信用出来ないわね、まあそこのお花を傷付けなければ良いわ」

弥 『分かりました』

？ 「傷付けたら殺すわよ、それじゃ」

そうして彼女は家に入って行つた、怖えな

隣を見るとあきつ丸は青くなつていた、ただえさえ白いのに

弥 『おーい？、大丈夫か？』

あ 「え？、あ、大丈夫でありますよ」

弥 『なら良いけど』

あ 「にしても、綺麗でありますなあ」

弥 『そうだねえ』

そうして少し見てから早々に退散した、紅魔館に帰ると咲夜とレミリアが出迎えてくれて居た

紅魔館での生活

フ 「弥生、起きてる〜?」

その日はその一言から始まった、なんか重い眼を開けるとフランは身体の上に乗っていた、それはどうかと思う

弥 『今起きましたよ、退いてくれます?』

フ 「あ、ごめん」

フランが退いたので起き上がると、グツスリと寝ているあきつ丸が見えた、あいつ軍人だったよな?

あ 「…もう…食べられないでありますよお……」

寝ぼけてると来たか、もう良いや、今日は置いていこう

フ 「お姉様から車っていうのがあるって聞いたんだけど…、乗せてくれない?」

弥 『良いですけど、他の人に言ってきましたか?』

フ 「お姉様に言ってきましたわ!」

弥 『なら良いですよ、行きましようか』

フ 「うん!」

こうして車が置いてある所まで向かった、最近夜型になって来たな

……

：

車に乗り込みエンジンを掛けると、闇夜に咆哮が轟いた、フジツボ製は伊達じゃ無い
フ 「へえ、意外とうるさい物なのね」

弥 『そうなんですよね、どこに行きますか？』

フ 「魔理沙の家なんてどうかかな？」

弥 『良いんじゃないですか、そこにしましょう』

そう目的地が決まった、ギアを1に入れ、走り出そうとした時、咲夜に窓を叩かれた

咲 「どこに行くのですか？」

弥 『まさか…許可が？』

咲 「出ておりません」

弥 『どつちのですか？』

咲 「妹様です」

弥 『…なんてこった』

弥 『どうしましょう』

咲 「お嬢様の許可を取って来て下さい」

フランに向かって目配せすると、低いトーンでこう言われた
フ 「弥生、分かっているよね？」

目に光がありませんよフランさん、どう転んでも怒られるなこれ、よし出掛けよう

弥 『咲夜さん、適当に言い訳しておいて下さい』

咲 「え？、ちよつと待って下さい？、行くんですか？」

弥 『八方ふさがりなんで』

咲 「はあ…、分かりました、どうなっても知りませんよ」

弥 『分かりました』

そうして車を発進させた、泣けるぜ

……

…

少し走っていくと、妖精達に止められた、チルノとかかな

チ 「やい！、その妖怪！、ここはあたい達の敷地だぞ！」

なんかよく分からない事を言っている、パッシングしとこ

チ 「い…威嚇しても無駄だぞ、お前なんか一瞬で凍らせられるんだからな！」

おお、うろたえてる、もう一押しかな、そう思いエンジンを吹かす

大 「やめとこうよ…、だいぶ怒ってるよ…」

チ 「そうかなあ……」

その時、後ろから破裂音がした、またいつもの持病だろう

音に驚いたのか、妖精達は逃げていった

通れるようになったのでそのまま走り去った

……

：

魔理沙の家に着くと、フランはすぐに車の外に出た、なんか悲しい

サイドを引いて外に出ると、家から魔理沙が出て来た、寝癖が酷いのでさつきまで寝て居たのだろうか

フ 「魔々理沙〜！、久しぶり〜」

魔 「おお、久しぶりだな、お前らどうしたんだ」

弥 『遊びに来たかったんだってさ』

魔 「夜中に来るなよ……」

弥 『悪い、仕方なくてな』

魔 「つたく、中に入るか？」

弥 『おお、頼む』

中に入ると、前来た時より酷くなっていた、凄いなこれ

魔 「適当に座ってくれ」

弥 『どこ座って良いの?』

魔 「まあ、そこら辺だな」

取り敢えず周りに有る物を退かしながら座った、居心地は良いけどフランは魔理沙の隣に陣取っていた、俺はその向かい側

魔 「何をやるんだ?、生憎カードゲームの類はないぜ?」

弥 『俺も持つて来てないわ、フランはどうですか?』

フ 「無いなあ、どうしよう?」

しばらく沈黙が続いた、やがて魔理沙が口を開いた

魔 「…神社にでも行くか?、夜起こされると霊夢不機嫌になるけど」

弥 『そうだな、車で行くか?』

魔 「たまにはそういうのも悪く無いな」

弥 『じゃあ行きますか』

フ 「はい」

そうして俺達は車に乗り込んだ、今日は良くMARCHが働くわ

…

…

靈 「で、うちに来たのね？、真夜中の睡眠中に」

弥 『誠に申し訳ありません…』

魔 「悪かったぜ…」

フ 「ごめんなさい…」

流れで神社に行つたらこつ酷く怒られた、まあ迷惑よね

霊夢の背後には般若が見える、こりやキレてますな

靈 「大体ねえ、こんな真夜中に活動してるんじゃないわよ、迷惑でしょ？」

こんな調子でお説教が一時間は続いた、みんなの目から生気が無くなるのには時間はさほど掛からなかった

靈 「で、何しに来たのよ？」

弥 『遊びに来たのよ？』

靈 「帰れ」

魔 「来たばかりじゃんかよ」

靈 「来なくて良いのよ！」

このままだと追い返されてしまいそうだ、仕方ない、伝家の宝刀を出そう

弥 『あーあ、酒盛でもしようと思つたのに』

その一言で、霊夢の表情が変わつた、目がキラキラしてますねえ

霊 「おつまみと酒は持って来たの？」

弥 『トランクの中に』

霊 「よくやった！」

手のひら返しどころの騒ぎじゃない、魔理沙とフランが冷たい目で見てますよ
こうして小さな酒盛が始まった

……

…

霊 「弥生いく、あんたが誘ったんだから構いなさいよお〜」

霊夢は酒に酔うと面倒な事がよく分かった、魔理沙とフランは楽しそうに飲み交わしているのに

霊 「聞いているのかしらあ？」

弥 『聞いてないよ』

霊 「聞いているじゃないの、構いなさいよう」

弥 『はいはい、分かりました、構ってあげますよ』

霊 「じゃあ、お酒注いで！、あとイカ取ってきて」

これはパシリじゃ無いかな？、まあいつか

愛車のトランクを開けて漁る、何処入れたっけ

弥 『さて、イカはこの辺に……って、紫、居るんでしょう？』

紫 「あら、バレたかしら？」

弥 『貴女も酒盛に混ざります？』

紫 「いいえ、結構よ、それより話しておきたい事があるの、いいかしら？」

弥 『何ですかね、そちらら会いに来るなんて』

紫 「近々、異変が起きるのよ、その時に呼ぶかも知れないって事を伝えに来ただから、じゃあね」

なんか意味不明な事を言つて紫はスキマに消えた

その後酒盛りは朝まで続いた

……

…

紅魔館に帰ると、玄関先でレミリアが出待ちしていた、怒っていらしい

レ 「貴方達、どういうつもりかしら？」

弥 『気分転換ですね』

レ 「次は無いわよ、弥生」

弥 『了解です』

レ 「貴女もよ、フラン」

フ 「はーい」

そうしてレミリアは踵を返して帰って行った、今度はお土産買ってこよう

向日葵畑からのお誘い

ある日、俺宛に手紙が来た、差出人は風見幽香らしい

あの向日葵畑に来いという内容だった、憂鬱だ

こういう日に限って特に予定も無く、行くしか無い状態になってしまった

あきつ丸やフラン、咲夜も予定があるらしく同伴してくれなかった

仕方がないのでレミリアに外出を告げ、愛車で向かった

向日葵畑に着くと、前に会った緑髪の女性が居た、こちらに殺気を向けながら…、車だからか？

敷地内に入り入れるとさらに殺気が強くなったが、俺に気付いたのかすぐに消えた

？ 「良く来たわね、歓迎するわ」

？ 「私が風見幽香、貴方は？」

弥 『弥生って名前です、ゆうかりんって呼んで良いですか？』

幽 「殺されたく無かったらやめておく事ね」

物凄い殺気を出しながらそう言った、やめどころ

弥 『で、何故私は呼ばれたんですか？』

幽 「少し話してみたかったのよ、ところで貴方、花は好き？」

弥 『人並みといった感じですね』

幽 「名前は分からないけど綺麗だなと思う程度って事かしら？」

弥 『まあそんな感じですね』

弥 『ただ、何故この季節に向日葵が咲いているのかは疑問ですけど』

幽 「それはねえ、こういう事よ」

突如、足元に花が巻きついて来た、足が折れる程では無いがきつく巻き付いて動けなくされてしまった

幽 「私は花を操ることが出来るの、貴方なんてすぐに殺せるのよ？」

少し締めまりがきつくなつた、花ってこんな使い方出来るのね

弥 『それは怖い、分かったので離して頂きたいです』

幽 「…まあ良いわ、離してあげる、だけど私を怒らせたら、分かっているわね？」

手で合図すると、花は足元からスルスルと離れて行った

弥 『そんな命知らずな事しませんよ』

幽 「そう、なら良いわ、家に入りましょう？、お茶出すわ」

弥 『はい』

こうして不思議なお茶会が始まった、色々質問するとしよう

……

：

幽 「ちよつと、聞いてるかしら？」

弥 『ん？、ああすいません、ポーっとしてました』

幽 「…もう、もう一回説明するわよ」

弥 『はい、お願いします』

どういふ流れが、今花の植え方を教わっている、お茶会はどこへ？

幽 「と、思ったけど客が来たようね、ついて来なさい」

玄関先に出ると、あきつ丸が居た、用事が終わったのか？

あ 「あれ？、弥生殿、用事はどうなったんでありますか？」

弥 『これが用事です』

あ 「ああ、それなら言ってくれば…、自分もでありますぞ」

弥 『一緒に来ればよかつたな』

あ 「でありますなあ」

幽 「話は終わったかしら？、中に入りましょう、風邪引くわよ」

あ 「了解であります、行きましょう」

あきつ丸に手を引かれ、また家の中に入った

……

…

結局最後まで花の手入れをして終わった、夕方なので帰るとしよう

弥 『それでは帰るとしますか』

あ 「そうするでありますな」

幽 「あら、泊まって行かないの？」

弥 『誰にも言っていないのでね』

幽 「じゃあ…」

幽香はしばらく考える様なそぶりをした

幽 「じゃあ、週一でここに来なさい」

あ 「え？」

最早俺は声すら出で居ない、何、週一で？

弥 『何故週一で？』

幽 「最近変な噂が流行っちゃったの、そのせいで妖精とかが手伝ってくれないのよ」

弥 『拒否権は？』

幽 「勿論無いわよ」

凄い笑顔で言われた、泣けるぜ

弥 『分かりました、週一です』

幽 「約束よ、破ったら…、分かるわよね？」

最早脅しである、気に入られてしまったようだ

弥 『じゃ、帰りますね』

幽 「また来なさいね」

そうして今日は帰る事が出来た、また来る事になるだろうけど

…

…

無事紅魔館に帰ってくると、フランが出迎えしてくれていた

フ 「おかえり〜」

弥 『ただいまです』

フ 「どこ行って来たの？」

弥 『向日葵畑に行つて来ました、綺麗でしたよ』

フ 「へえ〜、今度連れてってよ」

弥 『そうですねえ、今度行きましようか』

フ 「本当？、約束よ！」

弥 『ええ、約束です』

フ 「あとさ、敬語じゃなくていいんだよ?、執事じゃ無いんだし」

弥 『じゃあそうする事にするよ、これで良いか?』

フ 「その方がいいね、柔らかくなった」

弥 『じゃ、部屋に戻るとするよ、疲れたし』

フ 「寒いからちゃんと布団掛けてね、風邪引いちゃうから」

弥 『分かった、貴女もね』

そうして俺達は部屋に戻った、もう春が訪れても良い時期なんだけどな

……

：

部屋に戻ると直ぐにベッドに潜り込み、早々に寝た

だから今は白の部屋（つて呼ぶ事にした）にいる、正面にコレットが居るのだが、ム
スツとしている

弥 『えーと、何故怒ってらっしやるのです?』

コ 「怒ってないわよ!」

怒ってるじゃねーか、なんかしたっけな

コ 「最近全くここに来ないじゃない!」

弥 『来方が分からない、呼ばれてないんじゃないかと』

コ 「呼ぶに決まつてるじゃない！」

弥 『あらー、妬ましいんですかあ？』

少し小馬鹿にしてみたら、思いつきり殴られた、変な匂いする…

弥 『そんな怒らないでくれ、冗談だ』

コ 「まつたく…、それはそうと話があるのよ」

弥 『ほほう、やきもちだけじゃなかったんだな』

コ 「あんた、いい加減にしなさい？」

またコレットは拳を振り上げている、笑顔で

弥 『で、話って？』

少しオロオロしながら聞くと、コレットは拳を下ろしてくれた、セーフ

コ 「貴方死んだあといつも能力で体を作るじゃない、あれ意味無いわよ」

弥 『意味が全く分からない』

コ 「だから、蓬萊の薬が勝手に体作ってくれるのよ」

弥 『服とかも？』

コ 「そのようね、なぜだか分からないけど」

弥 『へえ、便利だねえ』

そうしてコレットと談笑しながら、今日は終わった

幻想郷 春雪異変

春雪異変. 前編

咲夜が神社に向かうらしい、なんでも異変解決を命令された様だ
折角なので俺も向かう事にする、ここに来て初めてのイベントだ、楽しみ
朝から慌ただしく準備をしていると、あきつ丸が起きてしまった

あ 「……どこかに行くのでありますか？」

弥 『異変解決とやらを見に行こうかなって』

あ 「その割に重装備でありますな』

確かにC96や短剣、デリンジャーを持って行くつもりでいる、なんか危なそうなん
だもの

あ 「自分も付いて行くでありますよ」

弥 『心強いね、寒いから準備して来てくれるか？』

あ 「了解であります！」

直ぐにパタパタとあきつ丸は準備を始めた、俺も始めますかね

あきつ丸は十四式を準備して来た、よく似合う

こちらもロングコートを着て準備終了した、あきつ丸はマントを纏っている
あ 「準備完了でありますな？」

弥 『ああ、行くとするか』

そうして目的地である神社に出発した、車で向かう事にしよう

……

……

……

神社に着くと、もう霊夢達は出発するところだった、少し遠くから話しかけられる

魔 「お前達も行くのか!?？」

弥 『そのつもりだ!』

魔 「私達は白玉楼に向かう!、早く来いよな!」

弥 「分かった!、ありがと!」

魔理沙は大きく手を振って行ってしまった、白玉楼ってどこ?

あ 「白玉楼って何処でありますか?」

弥 『知らない、聞いたことないな』

あ 「どうするでありますか?」

弥 『まあ、最悪紫さんにお願いしよう』

あ 「そうするでありますね、じゃあ今日も適当に動くんでありますな」
弥 『ま、そういう事だね』

そうして俺たちは車に乗り込んだ、

少し走って行くと防寒着に身を包んだ少女がいた、しかし雰囲気は寒々しく雪女を彷彿とさせる

? 「ふふ、くろまく〜」

何かを喋りながらふわふわと浮いて居た、スルーに限るな

直ぐ脇の小道に乗り入れようとした時だった

? 「その妖怪さん?、ちよつとお待ちなさい」

そう言いながらこちらに近づいてくる、敵意は感じ無いが…、車から降りた方が良いのか?

? 「貴方見ない顔ね、どこから来たの?」

側から見たら車に話し掛けている少女である、絵面がシニールだな

あ 「降りた方が良いのでありましようか?」

弥 『分かんないわ、どうするよ』

? 「あら、中に人影があるわね」

バレたようだ、降りるかな

あ「バレたみたいでありますよ」

弥『仕方ない、寒いけど降りるとしますか』

エンジンを止めサイドを引く、ドアを開けると厳しい冷気が車内に入って来た

弥『こんにちは、初めまして』

？「あら、こんにちは、貴方は誰？」

弥『弥生です、こちらはあきつ丸です』

？「へえ、私はレティ・ホワイトロックよ、貴方達は冬を終わらせに来たの？」

弥『いいえ？、野次馬に來ただけです、スペルカードもまだありませんし』

レ「本当に野次馬に來ただけなのね…、襲う気無くしたわ、行つていいわよ」

そうしてまた車に乗り込み、その場を去った、レティとはまた会う事になりそうだ

…

…

森の中に進んで行くと、ボロボロの廃屋があり、その前で猫の様な少女が居た
エンジン音が遠くから聞こえて居たのか、こちらに威嚇している

？「ここは私達の領域だ！、今すぐ立ち去れ！」

まさに猫の様に威嚇してくる、そこまでの事はまだしてないんだけど

ドアを開けると思いい切りそこに弾幕をぶち込んで来た、腕だと思つたのだろうか

? 「もう一度言うー!、今すぐ立ち去れ!」

仕方ない、引き返すとしますか、ギアをDに入れ加速し、猫娘を支点としサイドター
ンする

猫娘は咳き込んで居たが知ったことじゃない、白玉楼はどこにあるんだろうか

あ 「これは紫さん呼んだ方がいいんじゃない?」

弥 『そうだな、どこにあるかわかんないし』

紫 「呼んだかしら?、さつきはウチのがごめんさい」

弥 『さつきの猫娘は知り合いなんですか?』

紫 「ええ、うちの式の式よ」

あ 「またややこしいでありますな」

弥 『そうそう、白玉楼ってどこですか?』

紫 「あら?、貴方も異変解決に?」

弥 『いいえ?、ただの野次馬です』

紫 「: : : そう、白玉楼は空の上よ、連れて行きましょうか?」

弥 『頼みます、車じゃ行けないので』

紫 「ホント不便よねえ、鋼鉄の鳥でも作ったらどう?」

弥 『俺空を飛ぶの苦手なんです、そもそも重力に逆らうのが間違いですよ: : :』

あ 「自分もそう思うであります…」

紫 「情けないわねえ、それじゃ行くわよ」

そうして車ごと隙間に落とされた、最近雑な気がする

……

…

落とされた先は橋の上だった、ミシミシと木が悲鳴を上げている、早々に退くべきだろう

ギアをDに入れてゆっくりと滑り出す、橋には多大なダメージが入っただろう
ふと上を見ると、魔理沙と銀髪の子が弾幕ごっこをしていた、すげえ綺麗

よく見ると霊夢と着物の人も戦っている、こりや凄いな

紫 「綺麗でしょう？、これなら妖怪との力の差も出難いし、人間が異変を解決しやすくなるの」

弥 『理に適っているって事ですか、よく出来たルールですね』

紫 「そう！、ルールを破れば手痛い報復が待ってるしね」

弾幕ごっここの話をしている時の紫はイキイキとしていた、余程好きなのだろう

弥 『それじゃ、もっと近くに行きましようか』

桜の木がそびえ立つ庭の隅に車を停めた、しばらくは弾幕をあきつ丸と眺めることに

春雪異変・後編

上で行われている攻防を見ていると、近くの花が蠢き始めた

幻想郷の花ってこんな感じなのかと問抜けな事を考えていると、紫に叩かれ霊夢に怒鳴られた

霊 「何ボサツとしてるのよ、死ぬわよ！」

紫 「あの西行妖は死を誘う力があるの、封印した筈なのに……」

弥 『まあ何と物騒な、あきつ丸避難させて来ますね』

鉛弾を数発打ち込んでから魔法障壁を展開する、魔理沙が色々言うてるが知ったことじゃない

あきつ丸を車に乗せ、窓から西行妖に向かいワンマガジン分打ち込む、全くビクともしない

早々に西行妖の力の届かないところまで離れ、車ごと置いていく

あ 「行くんでありますか？、なら自分も！」

弥 『今回は相性が悪いから駄目、車番でもしといてくれ』

あ 「で、でも……」

弥 『車が無いと帰れないから、よろしくな』

そうして俺は走って西行妖まで行った、あきつ丸は敬礼していた

……

…

西行妖に向かうと全く何も変わっていないなかった、封印を邪魔されている様だ

魔 「全然体力削れねえ、バケモンだなこれ！」

魔理沙達は攻撃は入るものの、全く衰えを見せない西行妖に翻弄されているところだった

霊 「そりやそうでしょ、大妖怪レベルなんだから！」

魔 「おい弥生、何で戻って来た!?!?」

弥 『少し案があるんだ!』

霊 「どんなのよ、変なのじゃ無いでしょうね!」

実は変なのである、実戦初の「対妖怪弾」創る能力の賜物だが…、取り敢えずクリツプで装填する

徐に腰に着いているストックをC96に付け、狙いを真ん中に定め引き金を絞る、効けっ!

いつもより少し強い反動と共に発射された弾丸は幹の真ん中に命中した

それと同時に西行妖は叫び声の様なものを上げ、少し衰弱した様だ

魔 「すげーなおい！、少し効いてるぜ、そのまま頼む！」

弥 『了解だ！』

そのままの体勢で4、5発撃ち込んだが、流石にそのままにはしてくれない様だ

西行妖は此方にターゲットを変え、弾幕を撃ち込んできた、しかし霊夢はそれを見逃

しはしなかった

霊 「霊符・夢想封印!!？」

それにより結界が現れ、西行妖は封印された、異変の終了だった

……

…

車に戻るとあきつ丸が抱き付いてきた、そこまで心配だったの？

弥 『無事帰って来たよ、車番ご苦労様』

あ 「…良かった、良かったでありますう」

そう言つて人のシャツをぐしよぐしよにしてくれた、そんなに心配だったの？

弥 『今日の所は戻ろうか、これ以上は迷惑だろうし』

あ 「うぐつ…、そうでありますな」

最早あきつ丸に陸軍としての威厳は無く、泣きまくった跡まみれになっていた

しかしそう簡単には返して貰えない様だ、車の前に銀髪の子と、浴衣の女性が現れた？ 「貴方達々？、出てきて貰えないかしら？」

車から降りると周りには咲夜や霊夢、魔理沙もいた、ついでに紫も、皆聞きたい事があるようだ

？ 「白玉楼まで案内致します、付いて来て下さい」

銀髪の少女について行き、本堂まで案内される、帰るのは先になりそうだ

……

……

皆お茶を飲み和んでいると、魔理沙が口を開いた

魔 「そういえばお前、魔法使えたんだな、それにあの攻撃ってどうしたんだ？」

弥 『魔法はパチュリーに教えて貰ったんだ、攻撃は……長くなるから後で』

霊 「そっちが気になるのよ、勿体ぶらないで教えなさい」

弥 『え？、みんなそっち目当て？』

銀髪の子と浴衣の人以外が頷いた、そんなに気になるなら教えてあげましょう

弥 『答えは簡単、弾丸を変えたの』

魔 「どんなのだ？」

弥 『対妖怪9mm弾に』

皆が納得した様だ、なーんかつまんない

紫 「それどの位の威力があるの？」

弥 『炸裂薬1・5倍、弾頭部に妖怪に効きやすい金属に変えたただだよ』

紫 「で、威力は？」

弥 『分かんない、実戦投入初めてなんだ』

霊 「ちよつと、それつてもしかして？」

弥 『効かない可能性がありました』

霊 「何でそんな物ここで使ったのよ！」

弥 『効いたから良いじゃん』

霊 「…つもう、危なっかしいわね」

そんな他愛もない話をしていると、浴衣の女の人が話し掛けてきた

？ 「所で貴方の名前は？」

弥 『あ、弥生です、でこつちがあきつ丸』

あ 「よろしくでありますぞ」

？ 「へえ、私は西行寺幽々子、でこの子が魂魄妖夢よ」

妖 「以後お見知りおきを」

そうして他愛話は永く続いた、幽々子さんめつちや食うな

……

……

……

紅魔館に帰つてくると、直ぐにフランに戯れ付かれた、いつも全力だから体が悲鳴上げてるけどね

フ 「今日のお出掛けどうだった？、楽しかった？」

弥 『どつちかと言うと綺麗だったよ、初めて弾幕ごっこ見たしね』

フ 「良かったね！、私は今日寂しかったけど……」

弥 『今度また遊ぼうな、その時は一日中遊ぼう』

フ 「本当？、約束だよ！」

弥 『ああ、約束だ』

そうして俺達は部屋に戻った、寝る気満々だったがあきつ丸に話し掛けられた

あ 「弥生殿、お話があるであります」

弥 『ありや、何ですかねあきつ丸さん』

あ 「今日一緒に寝て頂きたいのであります！」

弥 『添い寝って事ですよね？』

あ 「そういう事であります、弥生殿はいつも話が早くて好きであります」

弥 『そりや嬉しいね、じゃあ早く寝てしまおう、今日は疲れたでしょう?』

あ 「そうするでありますな、さき、ベッドに入つて、子守唄でも歌いますか?」

弥 『大丈夫、多分すぐ寝てしまうから、じゃあお休みなさい』

あ 「お休みなさい、また明日でありますよ」

そうして同じベッドで寝る事になった、背中に柔らかい物が当たつてますよ、これは寝れなさそうだ

……

：

結局寝てしまった俺は精神の部屋に來ている、そしてまたコレットは拗ねている

弥 『こんにちは、來ましたよ』

コ 「貴方、外ではお楽しみだったわねえ?、私にだつて見えるのよ?」

弥 『ごめん、何を見たんだい?』

弥 『まさか、また構つて貰えないと危惧してよく分からんことを…』

最早殴る準備は万端の様で、肩を回しながらこちらに笑顔で近付いてくる

弥 『はいごめんなさい、何でもするから許して』

コ 「貴方は人を馬鹿にし過ぎよ…」

弥 『それが無ければ私じゃないでしょ?』

コ 「それもそうね」

弥 『で、私やなんで呼ばれたんでしょうか』

コ 「特に理由は無いわよ？、話したかっただけ？」

弥 『そうっすか、まあ良いけど』

またもや他愛無い話をしてその日は終わった、明日は宴会だ

宴会

夢を見ていた、幼い頃に仲の良かった友人との夢だ、しかし名前がスツポリと抜けていた

あいつは元気しているだろうか？、まあ俺には知る由も無いだろう

昨日の名残であきつ丸は背中にくっ付いたままだった、悪いが起きて貰う事にする

弥 『あきつ丸？、起きてくれるかな』

あ 「…もうそんな時間ではありませんか？」

弥 『今日は宴会があるから早めに出ないと夜間に合わないよ』

あ 「面倒でありますな、アリス殿でありましたか？」

弥 『魔理沙に聞いた話だと、挨拶に行かなきゃね』

あ 「さて、起きるでありますか」

そうしてあきつ丸は起きて着替えに行ってしまった、俺も着替えるかな

初めて会う相手なので取り敢えずスーツで行ってみる、堅苦しいね、やめた

あ 「いつも通りでありますな」

弥 『だな、代わり映えはしない』

あ 「まあ無難でありますな」

弥 『じゃあ行きますか、夜までに神社に行かないといけないし』

そう言いながら俺達は車に乗り込んだ、セルを回すといつもの様にけたたましい咆哮を上げた

そのままギアをDに入れ発進する、砂煙を上げながら目的地を目指しMARCHは走り出した

……

…

凹凸の激しい道にエアロを擦りながらラリーカーの如く走り抜ける

魔法の森に入った辺りで道が細くなり、あまり飛ばせなくなってきた

あ 「…あの、飛ばし過ぎじゃありませんか?」

弥 『いつもこんな感じだけど?、飛ばし過ぎかなあ』

あ 「これで飛ばし過ぎじゃ無ければ何が飛ばした事になるんですか?」

弥 『俺の地元にはゴロゴロ居たよ?、この位』

あ 「どんな場所なんでありますかそこ…」

そんな会話をしている間に、洋館着いた、ここがアリスなる人物の家らしい扉を叩くと中から金髪でお人形の様な少女が出て来た

? 「貴方が弥生ね?、私はアリス、アリス。マーガトロイドよ」
ア 「さ、入って入って」

部屋に招き入れられると、周りはお人形に囲まれていた、あきつ丸は目を輝かせているが、俺は怖い

あ 「すつごいでありますなあ」

ア 「あら貴女、人形は好き?」

あ 「大好きであります!」

ア 「そう、貴女とは話が合いそうね」

弥 『んで、私達はなぜ呼ばれたのでしょうか?』

ア 「ちよつと前から噂になってたのよ貴方、だから気になったの」

それはそうときつきから人の短剣を引き出そうしている人形がいる、何がしたいのこの子

ア 「ちよつと上海、何してるの?」

上 「シャンハイ!」

ア 「それはそうと弥生、今日夜乗せてつてくれる?」

魔理沙の奴、何かを吹き込んだな

……

：

あきつ丸とアリスの談笑を聞き流しながら、閃光手榴弾を生成している、単に考えるだけで作れるのだが

あ 「目がおかしくなってるでありますよ」

弥 『どゆこと？』

あ 「紅い光が揺れる様で、その後それが黒目一杯に広がる感じであります」

弥 『凄いなそれ』

ア 「貴方の目よそれ」

懐中時計を取り出し時間を見るともうマズい時間になっていた、こりやマズい

弥 『それじゃ出発する時間ですね、行きましようか』

ア 「わかったわ、どこに乗れば良いの？」

弥 『取り敢えず後部座席が良いですか？』

アリスは後部座席に潜り込む様に乗り込んだ、あきつ丸はいつもの様に助手席に

エンジンを掛けDに入れる、アクセルを開けると滑る様に走り出した

峠の様な旧道をしばらく走っていると後ろから断続的に悲鳴が聞こえた

弥 『アリスさん、大丈夫ですか？』

ア 「あ、ええ、ここまで激しい物とは…」

道あつたんだ
下回りやエアロパーツを路面に擦り付けながら、神社を目指しに進んで行く、こんな

ブレーキを踏み前重心にしつつハンドルの切る、小刻みにサイドを引きながら
すると車体は横に流れ、きつい右を抜けて行く

久しぶりに派手に滑らせたからか、感覚が掴めていない

隣にいたあきつ丸は蒼白とした表情でアリスは最早意識がない

あ 「弥生殿…、心臓に悪いので2度とやらないでいただきたい」

弥 『ごめん、次からは言うから』

弥 『あ、着きましたよ』

そんな事をしているうちに博麗神社の前まで来た、神社はもうどんちゃん騒ぎだが

魔 「よう弥生、来たのか！」

弥 『呼ばれたら来るだろ、にしても人が多いな』

魔 「ああ、お前の所の吸血鬼達も来てるからな」

そう言われ遠くを見るとレミリア達というフランが手を振っていた、こつちに来いという事か？

弥 『魔理沙、行ってくるわ、あきつ丸、その辺の酒とか飯とか食べて良いつてさ』

あ 「本当でありますか弥生殿!!？」

弥 『ホントホント、それじゃあね』

フランの近くに行くとすぐに抱き付いてきた、酔っているのかな

フ 「弥生いゝ、最近全然構ってくれないじゃん？、今日は付き合ってもらおうよお」
こりや本当に酔ってるな、仕方ない、付き合つてあげよう

弥 『わかつたよ、まだ呑む？、ワインとか持つてくるけど』

フ 「良いよお、咲夜に持つて来させるから、それより膝に乗せて？」
取り敢えず酒を用意して台に座る、すかさずフランは膝の上に乗つた

猫の様に擦り寄ってくる様は非常に愛らしい、さながら猫だな

フ 「やっぱり居心地がいいねえ、ずっとこうしていたいな」

弥 『他の人にそんな事言うなよ？、勘違いされるよ』

フ 「弥生だからこんなこと言ってるんだよお？、勘違いなんてしないでしょ？」

弥 『そうだな、まあ今日はこのままいれば良いよ』

そうして俺は初めての宴会に出た、こんな感じなら幸せで良いな

宴会の後始末

前日の宴会は大盛り上がりだった、幽々子があり得ない量の食事をしていたり、妖夢が潰れていたり

現在は幽々子達も帰り、他の奴らも酔い潰れている、嗜む程度にセーブしてて良かった

フランは膝の上で眠ってしまい、あきつ丸も肩に寄りかかっている

これじゃ動くに動けない、つまりは霊夢の手伝いをする事も出来ない、ごめん霊夢
霊 「何で誰も手伝わないのよ!、そして弥生、狸寝入りはバレてるわよ」

弥 『ありやりや、バレちゃったか』

霊 「まあ、あんたはその二人が起きてから手伝ってもらうから良いけど」

弥 『分かった、起きてからね』

しばらくの間俺は動けそうになさそうだ、MARCHの下回り見たいのに

……

……

しばらくしてフランが起き、レミリア達と帰って行った、一緒に帰れば良かった

あきつ丸は依然として起きない、規則的な呼吸音が耳元で響いている、うるさい
そしていくら軽いとはいえ一人分肩に寄りかかっていたらキツくなってくる

弥 『あきつ丸、辛くなつて来たから退いてくれない…?』

あ 「…ん?、ああごめんなさい、寝てしまっていましたか」

弥 『霊夢から言われたんだけど、片付け手伝えつてさ』

あ 「また面倒な話であります」

弥 『文句言つてると鬼巫女が来るよ』

その瞬間後ろから殺気を感じた、ギギギと首を回すと後ろに笑顔の霊夢が居た

霊 「誰が鬼巫女だつて…?」

弥 『滅相もございません、だからその振り上げたお祓い棒下ろして』

霊 「…まあいいわ、そこら辺の酒瓶を集めて頂戴」

弥 『分かった、あきつ丸も手伝つて』

あ 「了解であります」

そこら辺に落ちた酒瓶を拾い集めながら…つて多いな!、100本は軽くあるぞこれ

弥 『霊夢…、いつもこうなのか?』

霊 「そうよ、嫌になるでしょ?」

弥 『お察しするよ…』

今度から出来るだけ手伝つてあげよう

それから机やら皿やらを片付け、今は洗い場で3人で皿を洗っている、あきつ丸皿拭いてるだけじゃん

弥 『にしても皿多いな、何枚あるんだよ…』

あ 「数えるのは100枚ぐらいからやめたでありますよ…」

霊 「ほんと嫌になるでしょ…」

皿を洗い過ぎて手がふやけてきた、寒い日の皿洗いは最悪だ

しばらく洗いまくったが全然減らない、主に幽々子のせいだな

霊 「本当無くならないわね、一回休みましょう、もう手が限界よ…」

弥 『右に同じ』

あ 「同じであります」

少しも減らない皿に嫌気がさし、取り敢えず一休みする事にした

居間に行き卓袱台を囲むと、霊夢がお茶を持って来た

霊 「悪いわね、お茶ぐらいしか出せないわ」

弥 『別に良いよ、見返りを求めた訳じゃないから』

霊 「あんた達だけよ、手伝つてくれるの」

あ 「他の人たちがおかしいだけであります」

弥 『魔理沙とか紅魔館から本盗んで行くもんな』

霊 「あいつ何してるのよ……」

他愛無い話をしながら一休みしていた、皿洗いが憂鬱だあ

……

……

皿洗いが終わり紅魔館に帰って来た、何枚あつたんだよ皿

何となく物置を漁るとライフル銃が出て来た、使えるのかこれ

レミリアに確認を取ると、拾って来たものらしい、好きに使えとの事なので好きに使わせてもらう

いつもの様に机で作業しているとあきつ丸が覗き込んで来た、顔近い

あ 「これは確か…、モーゼル k a r 9 8 k でありますな、狙撃眼鏡が付いてるから狙撃用でありますよ」

弥 『へえ、良く知ってるな』

あ 「日本陸軍でありますから！」

あ 「だけど狙撃眼鏡が社外品でありますな、見易いであります」

弥 『純正だどうなってるの？』

あ 「銃の真ん中あたりに付いていて、見辛いんですよ」

弥 『へえ、でこれ撃てると思う？』

あ 「弾はあるんでありますか？」

弥 『ここに』

あ 「じゃあ外に行くでありますよ」

そうして俺は手を引かれ外に連れて行かれた、最近こんな事多くね？

外に行くのと直ぐに的が用意された、仕事が早い

クリップで装弾し、ボルトを操作すると滑りが悪い事が気になった、古いんだな

引き金をを少し無理に引くと弾は発射された、しかし標準も狂っており明後日に飛ん

で行った

あ 「これはひどいでありますな、手入れしないとダメであります」

弥 『流石にそのまま使えないか…、部屋に戻ろう』

部屋に戻り机の上で分解する、あらゆる所に砂や泥が入り、グリスも乾いていた

あ 「よくこれで撃てたでありますな」

弥 『見てよこれ、スコープ曇っちゃってる』

あ 「自分が狙撃眼鏡をやるので、本体をお願いするであります」

弥 『分かった』

こうしてまたモノトーンの二人が並んで作業しているシニールな絵面になった、前に

もあつたよな

……

……

……

メンテナンスが終わり、すっかり綺麗になったkarr98k、スコープもマウントされ撃てるようになった

あ 「自分が調整したいではありますが…、よろしいですか？」

弥 『任せるよ、俺分かんないし』

あ 「任されたであります！」

満面の笑みで走って行ってしまった、MARCHの修理に行こうと

ジャッキアップをしてウマを嘯ませる、下回りを見るとダメージが凄い、あそこで擦りまくったからか

良く見るとアンダーカバーが外れていた、どこで落としたりした？、マフラーに穴も開いていた

自動修復能力を付与しているが、しばらくは休ませてあげよう

ウマを外しジャッキを下げ、エンジンを掛け屋根のある所に停める

ボンネットに腰掛け空を見ると鋼鉄の鳥が飛んでいた、ここは幻想郷だったよな？

プレリユード

鋼鉄の鳥はそのまま紅魔館を過ぎ去った、しかしこれはどこかに結界の綻びがあるのか

はたまたゲートの様な出入り口が出来てしまったのか、どちらかは分からない

しばらくすると、腰掛けていたMARCHのエンジンが掛かった、誰も乗っていないのだが：

しかし俺は幻想郷で色々な物を見て来た、今更驚く訳…、あるよ！、意味わかんねえよ！

冷静に考えれば配線の誤作動、もしくは付喪神か？

そんな事を考えていると運転席側のドアが開いた、乗れって事かな

運転席に乗り込むと、エンジンが停止した、自分の車ながら良く分からない

取り敢えず乗ってくれて事なのか？、さらにグローブボックスがいきなり開いた

中には手紙の様な紙切れが入っていた、幻想入りした時に間違えて車に入り込み

出られなくなったと言う悪魔からの手紙だった、何と問抜けな

まあこちらに危害は加えないらしいから何ら問題無い、運転の主導権は俺にあるとの

こと

呼んでくれればすぐにでも迎えに来てくれるおまけ付きだ、何と便利な事でしょう。名をミアというらしい、って事は女性か、最近女の人に囲まれてますね、大半人外だけど

弥 『って事は貴女は車を動かせるのかな？』

するとまたエンジンが掛かった、動かせるってことか

……

……

部屋に戻るとあきつ丸が帰って来ていた、誇らしげにモーゼルを右手に持っていた

あ 「調整終わったであります！、で誰がこれ使うんでありますか☑」

弥 『俺ライフル使った事ないし、咲夜さん辺りが良いんじゃないかな』

あ 「ああ、確かに似合いそうですありますな」

弥 『呼びに行くか…、って居るし』

そんな話をしているとあきつ丸の後ろに咲夜が現れた、それ心臓に悪い

咲 「お呼びになりましたか？」

弥 『このライフル使って見てよ、暇な時で良いから』

咲 「はあ、よく分かりませんが分かりました」

そして咲夜はライフルを持って消えた、あれどうなってるの？

弥 『にしてもあきつ丸、お前は頼りになるな』

あ 「褒めても何も出ないでありますよお」

弥 『その笑顔が見れて俺は十分だよ』

あ 「キザな台詞でありますな」

あ 「まあ弥生殿なら似合うでありますが」

弥 『恥ずかしいから2度と言わない』

そんな話をしていると早速銃声が轟いた、咲夜さんノリノリだな

何回か撃ったあと、咲夜さんは戻って来た、目をキラキラさせながら

咲 「これ良いですね、貰って良いですか？」

弥 『気に入ったんですね、どうぞお使い下さい』

咲 「ありがとうございます、大切に使用させていただきます」

弥 『弾が必要なら言っして下さいね』

咲 「分かりました、失礼します」

咲夜はお辞儀をするとまた消えてしまった、今度能力について聞いてみよう

……

…

あ 「そういえばK11って何馬力なんですか?」

弥 『純正で1300ccなら101馬力、1000ccなら60馬力しかない』

あ 「それって軽自動車レベルでありますぞ!」

あきつ丸は驚いた素振りをしながらそう言った、確かに非力だもんな

弥 『だからSR20エンジンに積み替えたよ、おかげ様で150馬力まで上がった』

あ 「だからあれ程速いんですな」

弥 『まあ他にも手を加えてるけど、またの機会に』

弥 『それにしても、何でいきなり?』

あ 「外にいた時欲しかった車があるのであります」

弥 『何が欲しかったんだ?』

あ 「MARCHE turboであります」

弥 『なかなか渋いな…』

あ 「あれ格好良いでありますよなあ」

弥 『8ビット走法の時代のか…、格好良かったな』

あ 「まあ、85馬力しかないんですが」

弥 『それで俺のMARCHEの馬力を聞いたって訳か』

あ 「そう言う事でありませぬ、にしても、外が騒がしいでありますな」

弥 『あつちは…、湖方面だな、見に行く?』

あ 「行くであります!」

弥 『んじや、行つてみよう』

…

…

湖に出ると妖精に遊ばれている異形の者が居た

水死体の様に白い体に巨大な球を括りつけた様な者だ

隣を見るとあきつ丸は困惑と敵対心の混ざった味わい深い顔をしていた

取り敢えず助けてやろう、妖精ってどうやって追い払うんだ?

弥 『あきつ丸…、MARCH乗つて来て、あいつ引き摺つて紅魔館まで連れてくか

ら』

あ 「何を言っているんですか?、あいつは敵でありますぞ?」

弥 『え、そうなのか?、それじゃ鹵獲つてことにすれば良い』

あ 「後悔しても知らないであります、あいつはヤバイでありますよ」

あきつ丸に鍵を投げ渡すと吐き捨てる様にそう言った、そこまでマズい相手には見え

ないが

近づいて行くと妖精はすぐに逃げて行き、その相手だけになった

敵対心は無く衰弱した様子で、顔は見えないが所々に傷があった、これを殺すほど冷酷になれないな

取り敢えず台車を作りそれに乗せようとする、しかし重たい、人間が持ち上げられる重さじゃない

何かを伝えたい素振りを見せたが、話せないように諦めていた、台車に乗らねえしばらく格闘していたが諦め、あきつ丸が来るのを待つ事にした

少しするとエンジン音が響きMARCHが到着した、あきつ丸はムスツツとしている
あ「本当に知らないでありますぞ……って何故台車に乗せないんでありますか？」

弥『想像以上に重たかった、手伝ってくれ』

あ「深海棲艦とはいえ失礼でありますぞ」

弥『じゃあ持ち上げてみ、素晴らしいくらい重たいから』

するとあきつ丸はあいつを持ち上げようとして……唸っていた

あ「ぬおおお……無理であります！」

弥『仕方ない、転がそう、それで載せれば良い』

大玉ころがしの如く、ゴロゴロと専用の台車に乗せ、ワイヤーで縛る

弥『やつと上手く行った、大変だったな』

あ「そうでありますな、後ろのフックに繋げれば良いんでありますか？」

弥 『そう、牽引用の輪っかね』

あきつ丸は手際良くワイヤーを繋げると、助手席に乗り込んだ

運転席に座りDに入れ、アクセルを開ける、すると前輪が空転しながら発進した

あ 「…あれは深海棲艦と言つて、我々艦娘の敵、と言つか人類の敵であります」

弥 『ほう、マズい物拾つちまつたかな?』

弥 『だけど勝手に殺したら問題になるだろ、ここ幻想郷だし、下手な事出来ないな』

あ 「確かに、だけどこちら側に仇を成したら…」

弥 『その時は殺してやればいい』

あ 「まあ、そうでありますな、それよりどうやって館に入れるつもりで?」

弥 『フランとか咲夜、美鈴に手伝つてもらおう』

あ 「どうやったら深海棲艦つて治るのでありましよう…?」

弥 『分からない、咲夜さんに頼めば良いんじゃないかな?』

そんな話をしていたら紅魔館に着いた、ここから中に入れるの面倒くさい

…

…

深海棲艦、ワ級と言うらしい、咲夜に頼んで医務室で手当てをして貰っている

ワ級は喋れるようだが、今は衰弱して何も話してくれない、まだ敵だと思っているの

かも知れない

しばらく脇に居てやったが何も喋らない、まあ仕方がないだろう、こちらにはあきつ丸が居るし

あ 「奴は何か喋ったでありますか？」

弥 『いいや？、全然話してくれないよ』

あ 「まあ、あちらからしたら敵地でありますからね」

弥 『しばらく治るまでは咲夜に任せよう、咲夜なら大丈夫だろう』

あ 「仕方ないでありますな…、部屋に戻りましょう、弥生殿」

弥 『俺は物置きを見に…』

あ 「戻りましょう、や・よ・い・殿？」

弥 『はい…』

その後長つたらしいお説教をくらったのはまた別のお話

日常の中の非日常

あきつ丸の耳の痛い説教が終わり、一息ついた所にパチュリーが来た

パ 「侵入者がトラップにかかったわ、見に行きましょう」

弥 『私達よりレミリアさん達の方が見に行くべきでは？』

パ 「もう行ってるのよ、ささ、ついて来て」

パチュリーに着いて行くと地下室に着いた、扉の隣にレミリアが目を瞑って腕を組んでいた

レ 「…弥生、気を付けろ、奴は何を考えているか分からない」

弥 『分かりました、あきつ丸、ここで待っていて』

あ 「了解であります、必ず戻って来て下さい」

そうして俺は重い扉を開けた、中は黴臭く蠟燭の灯りで薄暗い、牢屋を見ると所々に血が付いている

重苦しい雰囲気の内を進んでいくと、牢屋の一角に飛行服を着た同世代の男が居た
足があらぬ方向に曲がっているが、表情は貼り付けた様な薄ら笑いだった

寒気のある気味の悪い表情だった、まるで痛みを感じていない様な

近くには不恰好なハンドガンが落ちており、すぐにも届く位置にあった腰のモーゼルに手を掛けつつ話しかけてみる、最悪撃ち殺せば良いな

弥 『あの、貴方は?』

? 『ここは…どこですか?』

弥 『紅魔館の牢屋です、私は弥生、人間だった者です』

? 『?、俺は如月空です、日本海軍の提督やつてます』

昔知り合いにそんな名前の奴が居たな、ここまで痛い奴じゃなかったが

弥 『まあ、あとは咲夜さんに聞いて下さい、それじゃ』

空 『え?、ちよつ、待つ』

ツカツカと俺は黴臭い牢屋から出た、もうここに用は無い

……

…

MARCHの下に潜りながらあきつ丸に聞いてみる、タイロッドが曲がってるだけ

ど…

弥 『なあ、如月空提督って知ってるか?』

あ 「知らないであります、そもそもクソ海軍の事など…、興味無いでありますよ」

弥 『じゃああいつどうすりゃ良いんだ、紫にでもどうにかしてもらおうか』

するとあきつ丸の隣に裂け目が出来、中から紫が出て来た

紫 「呼んだかしら？、後何をしてるの？」

弥 『流石に話が早いですね、車の様子を見ました』

そう言いながら俺はMARCHから這い出て、ウマを外しジャッキを下げた
ミアはやりたい事が分かっているのかボンネットのロックを外してくれた、気の利く車
だな

弥 『迷い込んだ人間が居るんです、どうやって外に返せば良いのかなって』

ボンネットを開けるとエンジンがかかった、特にこつちには問題無さそうだ

紫 「ああ、前飛行機で入って来ちゃった人達ね、すぐにも返すつもりよ」

弥 『ついでに外の世界からMARCH用のタイロッド買って来て下さい』

別に勝手に治るし、俺も能力で作れるんだけど、にしても何故曲がった？

紫 「自分でいけば良いじゃない」

弥 『幻想郷から出れないでしょ』

紫 「仕方ないわね、自由に行き来出来る扉作ってあげるわよ」

弥 『そんな事して大丈夫なんですか？』

紫 「以外と抜け道があるものよ、世界って」

そう言つて紫はスキマに消えて行つた、抜け道つてどんなのなんでしょうね

…

…

しばらくの間暇していると、咲夜が客人を連れて来た、人の形をした可愛らしいなにかだ

妖精と言うらしいが、幻想郷の妖精とは種類が違うのか？

？ 「ここに空つて名前の人来てませんか？」

咲夜に目配せすると、言つて良い領かれたので質問に答えた

弥 『いますよ、今は地下の牢屋です』

？ 「あの人、何かしたんですか？」

咲 「この館に不法侵入、これだけで充分ですよね」

？ 「おっしゃる通りです、うちの提督がすみません」

咲 「次は無いと思つて下さい、2度も許す程甘くはありませんよ」

咲夜はにつこりと微笑みながらそう言った、セリフと表情が合つてない

？ 「分かりました、きつくと言つておきます」

咲夜について行き、牢獄の提督の元に案内する、未だに奴の足の向きは変わつていな

い

銃は取り上げられたのか無くなつていた、薄ら笑いは変わつていない

？ 「提督！、迷惑掛けてないで帰りますよ」

空 「え、俺への心配は？、足の骨折れてるんだけど」

？ 「知らないですよ、勝手に出撃して怪我しても」

空 「マジか…、酷くねえ？」

弥 『茶番は他所でやって下さい』

？ 「あ、すいません、それはそうと、どうやって帰れば良いんですか？」

弥 『紫っていう人が貴方達に接触する筈です、その人について行って下さい』

？ 「分かりました、うちの提督が迷惑掛けてすいません」

？ 「ほんの気持ちですが、うちの鎮守府の電話番号です」

妖精と言われた人から紙が渡された、ウチ電話あつたつけな

？ 「それでは、ご迷惑をおかけしました」

そうして提督は連れて行かれた、凄い雑に扱われてんな

…

…

咲夜から銃が渡された、例の提督が持っていたものだ、咲夜さん返し忘れたのかよあきつ丸に聞くとこれは九四式拳銃と言うもので、第二次世界大戦時連合軍側にスーサイド・ナンブと言われたらしい、俗に言う自殺拳銃ってやつか

あ 「それで、どこで手に入れたんでありますか？」

弥 『ああ、例の提督が忘れてっつらしい、今度返しに行くかな』

あ 「そこまでしてやる必要は無いと思うでありますよ」

弥 『ついでに話さ、外に行くゲートも作ってくれるらしい』

あ 「そういう事ではありますが、その時はお供するでありますよ」

弥 『よろしく頼むよ、日本は変わってそうだしね』

あ 「住みづらくなりましたよ、深海棲艦のせいだ」

弥 『それは大変そうだ、まあ面白い物するぶんには攻撃されんだろう』

あ 「陸地に居る分には安全でありますよ、余程の事が無い限り」

弥 『その時点で不安だわ、また何かに巻き込まれるかもな…』

あ 「なんかあったんでありますか？」

弥 『然るべき時に話すよ、思い出したくも無いんだ』

ラクーン事件、とでも言うのかな、俺にはトラウマだ

あ 「分かったであります、にしても、全く手入れされてないでありますな、この九四式」

弥 『分解の跡はあるんだけどなあ』

あ 「やはり海軍、低俗であります」

弥 『まあ、そう言つてやるな、恐らく使わないんだろう』

あ 「整備してやらないと九四式が不憫であります」

そうしてあきつ丸は手際よく九四式を分解していく、最早プロの域だな

まだ新しい様で埃などは溜まっていなかった、これなら油吹くだけで良さそうだ

あ 「数回しか撃つて無いであります、状態は良いでありますな」

弥 『へえ、よく分かるな』

あ 「陸軍たる者、この程度分からなければ話にならないであります」

しばらくは九四式をいじっていた、あきつ丸ならなんでも出来そうだ

敵が味方か？

ワ級が回復したらしい、良い事だ、もう館内を歩き回っているらしい
あきつ丸は椅子に深く座り足を組んでいる、目付きも鋭く陸軍人つて感じがする、け
ど見えますよ

そう言う俺も足を組み頬杖をついている、二人で何してるんですかね

あ 「3つ話があります」

弥 『どうぞお話になつて？』

あ 「まず1つ、ワ級が襲つて来たらどうするおつもりで？」

弥 『専用の弾丸を作つてみたので、それを撃ち込んでみるよ』

あ 「それで駄目だったら？」

弥 『紫にスキマで処理してもらう、外界に送つてしまう寸法さ』

あ 「結局人任せなんでありますな」

あ 「2つ目、幽香殿の元にはいつ行くんでありますか？、そろそろ怒られるでありますよ」

弥 『暇が出来たら行こうと思つている、いつになるかね』

あ 「3つ目、暇であります、遊びに行くでありますよ」

弥 『同意、せっかくだから妖怪の山とやらに行こう、その後に幽香さんの家に』

あ 「そうするでありますな、さて、準備するであります」

よし、ぼちぼち俺も準備するとしますかね、今日はいつも通りジャケットで良いか
咲夜に出掛ける旨を伝え、車で出発した、妖怪の山ってどう行けば良いんだ？

…

…

取り敢えず山に着いたが、麓に水辺が有り、なかなかのどかである

その近くには緑の帽子にリュックを背負った少女が居る、キュウリを冷やしてますね
こちらに気づいた様で近付いて来た、取り敢えず逃げますかね

シフトをRに入れ、アクセルを踏み込む、するとバックギア特有の情けない音を出し
ながら走り出した

するといきなり彼女は焦ったように大声で話し始めた

？ 「待ってくれその人間！、危害を加えるつもりじゃないんだ！」

あら、中に俺らがいるのがバレてる、珍しいタイプだな

隣のあきつ丸は、相手を睨みながら口を開いた

あ 「…なんか言ってるでありますよ？」

弥 『どうするよ、止まってみる？』

あ 「物は試しでありますな、止まってみましょう」

ブレーキをかけ停車すると、彼女はボンネットに思い切りぶつかっ

た？ 「イテテ…、盟友、出来ればこれから出て来てくれないか？」

MARCHのボンネットを叩きながら彼女はそういった

あ 「なんか腹立つてありますな」

弥 『そう？、まあ出てやりますか』

ドアを開け車から降りると、彼女は少し身構えていた、なんでよ

弥 『…ミア、少し下がってて』

小声でそう言うと、バックでそのまま走って行った

？ 「…あれ、勝手に走るのか」

弥 『悪魔が取り憑いているんです、科学的な物じゃ無いですよ』

？ 「なるほど、そう言う手もあったか、私は河城にとり、盟友は？」

弥 『弥生って名前です、こちらはあきつ丸』

あきつ丸はなぜかにとりに敵意剥き出しだった、何が気に入らないのかね

に 「ここは妖怪の山、トップには天狗が立っている、奴らは排他的だ…、入らない方

が身の為だぞ」

弥 『仕方ないですね…、忠告ありがとうございます、今日の所は帰りますよ』
踵を返し車の方に向かおうとした時、にとりに呼び止められた

に 「出来ればまた来てくれ、話が合いそうだ」

弥 『そうですね、また会いましょう』

そのまま車に乗り山を出た、案外上手く行かないものだな

…

…

近くまで来たから人里の貸本屋で銃火器の本を借り、早々に人里から出て幽香の家に
向かう

幽香の家に着くと家の外で幽香が待っていた、満面の笑みで、怒ってらっしやる…

幽 「しばらくぶりね、どう言うつもりなのかしら？」

弥 『すいません、異変とか忙しくて』

あ 「右に同じであります、ごめんなさい」

幽 「次は無いと思いなさい、痛い目に遭いたくなければ」

そう言つて幽香は家に入って行つた、俺らもついて行きましょう

中に入ると至る所に植木鉢が置いてあり、本当に花が好きなのだと分かる

しばらくすると紅茶が出された、紅魔館の紅茶と違い少し濃く出されているらしい、

ちよつと渋い

お茶菓子はチョコチップクッキーだった、こつちの世界にもあるんだ

弥 『こつちにもあるんですね、チョコチップクッキー』

幽 「ああ、私が作ったのよ、美味しいかしら？」

弥 『ええ、外で食べた物より』

幽 「それは良かった、作った甲斐があるわ」

そんな調子でその日はお茶会をしていた、たまに行くのも悪くないな

……

：

紅魔館に帰って少ししてから、俺と入れ替わる様にあきつ丸は風呂に入りに行った、暇だ

借りて来た本に載っていたストラライカー12なる散弾銃を精製してみた、後で撃ってみよう

そのあと暇な俺はクーガーFやらデザートイーグルなどを精製していた、本当便利だなこの能力

そんな調子で暇を潰していると、扉がノックされた、扉を開けるとそこには色の白い少女がいた

蠟のように白い肌に光を放つ目をした少女だ、ワ級か？

？ 「オマエガ弥生力？、私ハワ級、マア知ツテルダロウガ」

弥 『ほう、如何にも俺が弥生だ、何の用だ？』

ワ 「ナンテコトハ無イ、礼ヲ言イニ来ダケダ、感謝スル」

そう言つてワ級は深々と頭を下げた、下手な人間より礼儀正しいな、やっぱ軍人か

弥 『何、当然のことをしたまでさ、早く立ち去つた方がいい、あきつ丸が来る前にな』

ワ 「分カツタ、恩ニキル」

そうしてワ級は足早に帰つていった、すると入れ替わる様にあきつ丸が風呂から上がってきた

頭から湯気が出る以外はいつものあきつ丸だった、ずっとその服なんだ

弥 『風呂上がりでもその服なんだな…、あきつ丸』

あ 「肌着以外持つて来て無かつたんであります…」

弥 『他の奴らに借りてくれば良いじゃんか、咲夜さんとかさ』

あ 「……!!?、その手がありましたか、行つて来るであります!」

そうしてあきつ丸は走つて行つた、あの子馬鹿なのかしら

弥 『先寝てよ…』

俺の独り言は空虚へと消え去つた、今日は精神の部屋に入れるかな

……

…

精神の部屋は広いらしい、今日は端っこに出てしまった、遠くからコレットが走って来るのが見えるな

目の前に来た頃には完全に息が上がっていた

弥 『はい吸って、吸って、もう一回吸って、頑張つて吸って』

コ 「殺す気かあ!!?、なんでずつと吸ってるのよ!」

弥 『チツ』

コ 「ねえ何?、今の舌打ち何?、殴るわよ?」

弥 『はいはい悪うございました』

適当な返答をしていたら、思い切り殴られた、最近酷くないか?

コ 「まず、私がどれだけ寂しい思いしていたか分かる?」

弥 『まあ、それについては悪いとは思ってる、ごめん』

コ 「その上、私は凄く気を使ってるのよ?、例えば貴方が起きてる時に話し掛けなかつたり」

コレットは少し泣きそうになっていた、そこまでは思わなかつたな

弥 『悪かつたって、泣かないでくれ、な?』

コ 「泣いてないわよ！」

その頃にはもう涙は頬を伝っていた、あれ？、俺らお別れじゃないよ？

しばらくして落ち着いたのかいつものニヤニヤした表情に戻っていた、なんなんだか

弥 『そうそう、俺が起きてる時にも話しかけて良いからな、元々独り言を良く言うからな』

コ 「本当!?、なら遠慮なく」

そのままずつと話をしていた、意外な一面が見えましたね

異変の始まりと酒呑み妖怪

人里周辺で赤い化け物が現れたらしい、瞳は光を放ち、血に染まった様な赤だそうだ
霊 「あんたは何か知らないの？」

弥 『生憎、まあ面白そうだから付いて行くよ』

ウチのMARCHに似た吠え方をするらしい、つまりは車つて事だ

霊 「そう、じゃあ準備してきなさい」

弥 『了解、すぐ戻って来る』

……

……

部屋に戻り準備をしていると、あきつ丸に話し掛けられた

あ 「どこかに行くんでありますか？」

弥 『ああ、人里に行つて来るよ』

あ 「自分も行きたいであります！」

弥 『うーん…、今日は無理かなあ…』

するとあきつ丸はあからさまに残念そうな表情をした

あ 「何故でありますか？」

弥 『今日は妖怪退治なんだ、死なれちゃ困る』

あ 「自分じゃ…、力不足なんでありますか？」

少し眼を潤ませて寂しそうに聞いてきた、そりやずるいんじゃないかな

弥 『…、分かった、俺の負けだ、連れて行こう、だけど無理はしない様に』

あ 「本当でありますか！、了解であります」

弥 『後これ渡しとく、弾こつちに変えときな』

あ 「分かりましたが、なんか特別な物なんでありますか？」

弥 『俺が前使ってた対妖怪弾だよ、普通の弾じゃ奴ら倒せないし』

そんな話をしている間に準備が終わった、あきつ丸は既に終わらせていたらしい、付い

て来る気満々じゃん…

弥 『それじゃ出動しますかね』

あ 「了解であります！」

しばらくして俺達は出発した、外に出ると霊夢は不機嫌になっていた

…

…

人里の周りを車で回っているが、赤い妖怪は中々見つからない

霊 「やっぱりデマだったのかしらね」

弥 『そうかもねえ、で、何で車に貴女が乗ってるんです?』

霊 「樂する事に越した事はないでしょ?」

弥 『はあ…、そうだね』

助手席の霊夢は窓枠に肘をつけてそう言った、飛べよ

…

…

しばらく人里付近を周っていたが対象は現れなかった

日が暮れて来た頃霊夢が口を開いた、凄いい眠そうですね、私もです

霊 「今日の所は撤収しましょう、夜で妖怪も凶暴になって来た頃だし」

霊 「それに、この頃宴会が多いのよ、ついでと言ってはなんだけど付いて来てくれな

い?」

弥 『ほうほう、良いね、俺も丁度酒が呑みたい頃だったんだ』

霊 「決まりね、あきつ丸は?」

あ 「弥生殿居る処に自分あり、であります」

弥 『つまりは来るって事だ』

霊 「それじゃ神社に向かいますよう、着くまでは警戒を怠らないように」

そう言つた靈夢は早々に寝てしまった、言い出しつぺなのに：

……

：

神社に着くとツンとしたアルコールの匂いがした、もう酔いそうだ

人がいつもより多く中にはもう酔い潰れている者も居た、いつもより酷くないか？

靈 「もう何日もこの様子よ、途中で後片付け諦めたわ」

弥 『お察しします』

靈 「それじゃあ行きましようか」

靈夢は溜息をつきながら車から出て行つた、俺達も行くかな

シートを倒しあきつ丸を出す、それにしても3ドアつて不便だなあ

あ 「にしても人が多いでありますなあ」

弥 『そうだな、ここまで多いと気持ち悪い』

あ 「まあ、否定はしないであります」

酔つ払いの中にはレミリアやフランもいた、出来上がってますね

面倒臭い奴らに見つからない様に神社の縁側に座つた、これで落ち着いて吞めるな

あ 「さあ、今日は吞むでありますぞお！」

あ 「弥生殿もであります、拒否権は無でありますよ？」

弥 『言われなくても、もちろん付き合うよ』

あ 「良かったです、ささ、お猪口を出して下さい？」

猪口を出すとあきつ丸は酒を注いでくれた、気が効くね

弥 『徳利を貸して、俺も注ぐとしよう』

あきつ丸に注いでやるとそれを一気に飲み干した、これは本当に呑む気です

あ 「弥生殿、全然呑んでないでありますな、酔えないでありますぞ？」

弥 『俺はゆつくり呑みたいのよ、元々あんまり酔わないし』

あ 「自分もでありますよ、勝負するでありますか？」

弥 『面白い、負けないからな』

そこからあきつ丸と俺の呑み比べが始まった、つくづく何をしてるんだ俺は

……

…

あ 「まああ呑めるてありますよお〜」

弥 『待て待てもうやめとけて』

もうそこら中に俺達が呑んだ一升瓶が散乱していた、あきつ丸は酔いが回っているが

まだ呑む気のようにだ

にしても人間の頃より呑めるようになってい、死んだからか蓬莱人だからかは分か

らない

あ 「まだまだあ…、クウ……」

弥 『ちよつとあきつ丸？、寝ちまったか…』

隣に一升瓶片手に寝てしまったあきつ丸がいる状態だ、なんじやこりや

弥 『まあ好きに呑むとするか…、で貴女誰？』

？ 「ありやりや、ばれちゃった？」

？ 「私は伊吹萃香、見ての通り鬼さね」

萃香の言う通り大きな角が頭に生えている、古い木みたいな感じだな

弥 『純粋な鬼も居るんですねえ、私は弥生、しがない蓬莱人です』

萃 「へえ、んでその腰に着けてるのはなんだい？」

弥 『飛び道具の一種ですよ、多分貴女には効かないかと』

萃 「そりやなんでだい？」

弥 『今装填しているのが妖怪弾なんですよ、桁違いに強い鬼には効かないかなって』

萃 「やってみなきや分らないよ？」

弥 『何より今私はお酒を楽しんでいるんで、人様に攻撃する気は無いです』

萃 「変な奴だねえ、まあ私も攻撃しに来たわけじゃ無いから良いんだけどさ」

そうして萃香はあきつ丸とは反対側に座った、鬼と話すことになろうとはな

弥 『ここに人を集めているのは貴女ですか？』

萃 「そう、面白い巫女がいるって話を聞いてね、だけど思いの外鈍感みただけど」
弥 『まあ確かに私でも分かるぐらいですからね』

萃 「そうだよねえ、他にも金髪の魔女二人と銀髪のメイドと剣士が気付いたぐらいだし」

萃 「と言うかあの巫女以外気付いてるよ、あれで巫女が勤まるのかねえ」

弥 『まあ、確かに不安ですよね』

萃 「まったくだ、にしてもあんた面白いね、気に入ったよ」

弥 『お気に召した様で何よりです』

萃 「まあ私はこの辺で失礼するよ、また明日会おうね」

萃 「そうやって萃香は霧香になって消えた、俺一言も明日来るって言ってないけど…」

萃 「その後あきつ丸が寝ている隣で俺も転がる事にした、これで寝ちまったら体痛くなるな」

ゲトロイトの悪魔

あ 「うう…頭痛いであります」

弥 『だからやめとけって言ったのに…』

紅魔館の自室にてあきつ丸が起きた、昨日の影響で二日酔いになった様だ

弥 『ほい、水飲んどきな』

あ 「申し訳無いであります」

あきつ丸は体を半分起こしながら水を飲んだ、幻想郷には薬局無いからなあ

弥 『俺は夜また宴会に行くけど…、あきつ丸留守番してる?』

あ 「…いえ、行くでありますよ」

弥 『お、おう、分かった、時間になったら起こすわ』

あ 「お願いであります…」

そう言つてあきつ丸は眠りに落ちた、さてと、出掛けるかな

昨日の妖怪の噂が気になる、なんか引つかかるんだよなあ

…

…

武装を固めて車の元に行くと、何故やら萃香が居た、不法侵入ですよ貴女
萃 「どこかに行くのかい？」

弥 『ええ、人里で噂の妖怪を探しに』

萃 「へえ、私も付いて行こうかねえ」

萃 「ちよつと、露骨に嫌な顔しないでよ」

弥 『まあ良いですよ、車に乗って下さい』

そう言つてMARCHの方に指を指すと、萃香は車の近くまで行つて唸つていた

そして何を思つたかルーフの上に乗つた、もうこのまま行こうかな

俺が運転席に乗り込むと慌てた様にルーフから飛び降り、恥ずかしそうに助手席に着いた

弥 『……………、フツ』

萃 「笑わないでよ、誰にだつて間違ひはあるじゃん」

そうして萃香は瓢箪の酒を呑んでいた、さすが鬼ですね

セルを回すとエンジンが目覚め辺りに咆哮が響いた、外ではこんなうるさくなかつた
んだけだな

萃 「中々喧しい物なんだねえ、車つてのはこんな物なの？」

弥 『これでも静かな方ですよ、それはそうと異変は？』

萃 「そつちもやってるから安心して良いよ」

弥 『異変の首謀者が隣に居るだけで安心出来無いですよ』

萃 「ハハッ、違うない」

萃 「にしても相方のあの子は？」

弥 『二日酔いで家で寝てます』

萃 「まだまだだねえ、あの程度でそれじゃ」

弥 『鬼の貴女に勝てる人は中々居ないと思いますよ』

萃 「それもそうだねえ、酒要るかい？」

弥 『今は遠慮しときます、後で貰いますね』

萃 「そう、欲しければ言って」

……

…

しばらく走っていると後ろから別のV8サウンドが近付いて来た、奴だ

赤のボディカラーの丸目四灯で昼間なのにハイビームで煽って来る

O/DをONにしアクセルを床まで踏み込む、すると奴は一瞬離れまた張り付いた
 そして在ろう事かバンパーを突いて来た、奴は完全に敵意を剥き出しにしている
 少しバランスを崩し車体を揺らす様に立て直し、きつい右コーナーを抜けた

コーナーを脱出する頃には奴は少し離れていた、しかしすぐに取り返されるだろう
 奴は外に聴こえる程大きな音で音楽を掛けていた、∴Paint It Black
 k、を

あいつ元の持ち主が死んだのか？、だからって八つ当たりされても困るぜ
 萃 「私がボコろうか？」

弥 『いえ、そろそろ巻くので』

ハンドルをきり魔法の森に車体を跳ねさせながら入り込んだ

こちらはコンパクトな日本車、ましてその中でも小さいMARCHだ、エアロを付けたとはいえ…

対してあちらは大柄なアメ車、入り組んだ森の中を通ることは不可能だ

木の間をすり抜ける毎に4つの光は遠ざかり、やがて消えて行った

ふと隣を見ると、喧嘩が出来ず不貞腐れた小さな鬼が瓢箪を煽っていた

∴∴∴

∴

紅魔館に戻る途中で萃香を降ろし、紅魔館に戻った

MARCHのリアバンパーを見ると思い切り割れていた、思いの外激しかったんだな
 傷付いたバンパーを撫でて居るとあきつ丸が出て来た

あ 「酷いであります！、置いて行くなんて…つてそのバンパー如何したんでありますか？」

弥 『例の妖怪に突かれた、あいつ…、次は無いからな』

あ 「例の妖怪でありますか？」

弥 『そうだ、奴は58年型プリマス、確か250馬力オーバーじゃなかったか？』

あ 「ほう、それでバンパーがそんな事になったんでありますか…」

あ 「で、なんで置いて行っただんでありますか？」

あきつ丸はお怒りの様で、死んだ魚の目をしてらっしやる、なんてこった

弥 『ま、まあそう怒りなさんな、お前が寝てからすぐ萃香が来たんだ、起こしたら悪いなと思っただよ』

あ 「そうでありますか、なら今度はちゃんと起こすでありますよ？」

何故かあきつ丸は凄みながらそう言った、凄まれても困るんですけど…

弥 『ハイハイ、分かりましたよ』

あ 「よし、なら良いであります」

あきつ丸との話が終わった頃、空間が裂けゆかりが出て来た、毎回それビックリするんだよなあ

紫 「外界への扉が出来たから、案内するわ」

そう紫が言つてすぐ、俺達はスキマに落とされた、隣であきつ丸が叫んでいた

……

…

足にちよつとした衝撃が伝わった、付いた様だ

あ「し、死ぬかと思つたでありますよう」

そう言うあきつ丸はその場でしゃがんでいた、そりや誰でもそうなるよな

紫「さて、ハハハ」

そう言つて紫が指を指したのは、ガレージ付きの廃屋だった、これのどこ？

紫「この車庫の扉を開けると…、外界に行けるわ」

車庫の奥は向こうの景色が揺らめく様に見える、峠の様だった

弥『向こう側に行くともう戻れないとかは…？』

紫「安心して良いわ、その様な事は無いから」

紫「じゃ、私はこれで」

弥『ありがとうございました』

スキ弥に戻る紫に手を振りながら礼を言うと、彼女微笑みながら帰つて行つた直ぐにでも行つてみたいが、今日は予定がある、明日にお預けだな

しばらく待っているとミアが迎えに来てくれた、本気が効く子だな

あ 「やっぱり人が乗ってないと怖いものでありますな」

俺は頷きながら車に乗り込み神社に向かった、その頃にはリアバンパーは直っていた

異変の終結

神社に着くと霊夢と萃香が絶賛戦闘中だった、だと思つたよ

あきつ丸はすぐに酒を取りに行った、今日も呑むんだねあの子

適当な場所に座り待っていると近くで大きな破裂音がし、隣に砂煙が舞った

俺が頭に疑問符を浮かべていると、砂煙の中からカメラを持った少女が出て来た

? 「いやいや、スクープの香りがしますねえ、鬼と博麗の巫女が戦ってるなんて」

あ、新聞記者だ、離れるとしましょう、話しかけられたく無いし

ソーツと離れて行く途中、あろうことか小枝を踏み抜いた

すると彼女はこちらに振り向き、ニッコリと笑った、営業スマイルですかね?

? 「貴方はまさか、弥生さんですか!?!」

弥 『え、あ、はい、その通りですが…』

? 「私、清く正しい射命丸文です!、新聞の取材させて頂けないでしょうか?」

彼女は懐から名刺を出し、こちらに渡して来た、こつちの世界にも名刺あるんだな

弥 『良いですけど…、今はあちらを撮るべきでは?』

そうやって俺は霊夢達の方を指差した、あつちがメインイベントだしね

文 「そうですね!、また今度」

そうして文は飛び去って行つた、まさに嵐のようだな

……

…

彼女が去つてすぐあきつ丸が戻つて来た、台車に酒を一杯に乗せて、どつから持つて来たその台車

あ 「お酒持つて来たでありますよー、誰かと会いました?」

疑うかの様にあきつ丸はそう聞いて来た

弥 『ああ、新聞記者が来たよ、名刺もらつた』

先ほど貰つた名刺を渡すと、あきつ丸は親の仇の様に睨んでいた、怖いっスよ

あ 「取材、でありますか?」

弥 『多分そういう事、正直怠い』

あ 「良い事でありますなあ、ついに新聞デビューでありますか」

弥 『それは皮肉か?、まあ良い、呑み始めようか』

あ 「そうでありますな、今日は無理しないようにしなきゃ…」

……

…

萃香達の戦いが終わり、いよいよ宴会が盛り上がりつつ来た、そろそろ撤収かなあ

しばらくの間あきつ丸と呑んでると、遠くから萃香が歩いて来た、ほぼ無傷じゃんか
萃 「ねえねえ、あきつ丸借りて良いかい？」

弥 『ええ、特に問題無いですよ』

俺がそう言うとききつ丸は腕を引かれて行った、生きて帰って来いよー

あ 「はあ…、言つて来るでありますよ」

弥 『行つてらっしゃい、待つてるよ』

あきつ丸の目は覚えているとでも言いたげだった、後が怖いですねえ

そうして俺は一人になった、まあゆっくり呑んでますかね

…

…

一人でブーツと呑んでいると、コレットが話し掛けて来た、珍しいな

コ 「あらあら、女の子達が居なくなっちゃったわね？」

弥 『仕方ないだろ、せつかくだし話そうか』

コ 「そうねえ、あ、そうそう、この前侵入者が来た時にもらった名刺あつたでしょ？」

弥 『ああ、これの事か？』

懐を漁り連絡先の書いてあるメモを取り出す、良く見るとこれ二つ折りなんだ

紙を開き中を読むと、あきつ丸についてだった

(行方不明の揚陸艦あきつ丸について知っていましたら、是非ご一報下さい)

コ 「これはどういう事なのかしら?」

コレットはいつもより低いトーンでそう言った、これはつまり…?

弥 『……酔いが醒めたぜ、これで辻褄が合うじゃないか』

コ 「どういう事?」

弥 『あいつらはあきつ丸を探しに来た捜索部隊だ、それがあきつ丸と同じルートで

(ここに来たんだろう)』

弥 『何より日本海軍と書いてある、そう考えるのが妥当だ』

コ 「そうだけど…、確か仲悪かったよね?、日本陸軍と海軍」

弥 『それどころじゃ無いだろ、一人船が居なくなっただから』

弥 『もちろんあきつ丸と離れる気は無いがな』

コ 「じゃあ、どうするの?」

弥 『とりあえず行くしか無いだろ、折角ゲートが出来たんだから』

コ 「そうするにしてもご一報って、ここに電話あったかしら

弥 『最悪紫さんにまた頼むよ、今度埋め合わせしなきゃな…』

コ 「あ、誰か来たわ、それじゃ」

そうしてコレットの声は聞こえなくなった、その頃足音が近づいて来ていた

魔 「よう、久し振り！」

弥 『ああ、魔理沙か、久し振りだな』

魔 「今日はあきつ丸居ないのか？、姿が見えないぜ」

弥 『あいつは萃香に連れて行かれました、可哀想に』

魔 「ああ…、こりや帰って来る頃には出来上がってるな」

弥 『うわあ…、それはそうとあきつ丸に用だったのか？』

魔 「いいや全く、取り敢えず確認しただけだ、折角だし一緒に呑もうぜ」

弥 『そう来ると思った、つまみ有るか？』

魔 「ああ、貰うぜ、何があるんだ？」

弥 『スルメとかビーフジャーキーとか？』

魔 「ほう、じゃあスルメをくれ」

弥 『ほいよ、にしてもどういふ風の吹き回しだ？、いつも霊夢達と呑んでるだろ』

魔 「なに、単なる気紛れさ、たまには良いだろ？」

そう言つて魔理沙は焼酎を煽っていた、飲み過ぎんなよ

魔理沙が来て直ぐに霊夢がやってきた、すっかり酔い潰れたあきつ丸を連れて

弥 『まあ、そうだな…お？、霊夢とあきつ丸が来たぞ』

隣を見ると魔理沙は少し機嫌が悪そうになっていた、どした？

魔 「…ツチ、折角良いとこだったのに」

霊 「何良く分かんない事言ってるのよ、どうでも良いから早く手伝って」

魔 「はいはい分かりましたよ、空気が読めねえな全く」

そう言つて魔理沙はあきつ丸を長椅子の上に寝かせた、まあ安らかな寝顔

霊 「萃香が調子乗つて吞ませたせいでこうなつたわ、どうするの弥生？」

弥 『後で車に乗せておこう、後は放置で良いんじゃないか？』

魔 「起きてない事を良い事に酷い事言つてんな」

弥 『そうか？、まあそんな事で怒る奴でも無いだろ』

弥 『まあ取り敢えず、続きを始めようぜ』

俺がそう言つと、魔理沙が盃を掲げた

魔 「それじゃあ…、乾杯！」

それを皮切りに四人（一名撃沈）の宴会も始まった、その後人数が増え大騒ぎになったのは別の話

外界の異変

寒い寒い島にて

宴会が終わり2日程経った頃、満を持して外界に出る事にした

レミリアに説明したり、先方に電話したり、準備には時間が掛かった

そして今はゲートの前に居て、何故やら同伴人にフランが居る、幻想郷から出て大丈夫なのかね？

弥 『…紫さん、フラン出て大丈夫なんですか？』

紫 「1ヶ月ぐらいなら全然余裕よ、それ以上はちよつとマズいけど」

弥 『そうですか、にしてもフラン、レミリアに言ってきたか？』

フ 「もちろん！、凄く嫌そうに了承してくれたわ！」

弥 『そうか…、お土産買って来なきやな』

俺がそう言った頃、遠くからレミリアが飛んで来た、手間が省けたなレ 「フラン、弥生、あきつ丸、気をつけて行ってくるのよ」

少し息を乱しながらレミリアはそう言った、そんな急いで来たの？

弥 『分かりました』

俺はそう言うのと車に乗り込みセルを回す、するとエンジンは目覚め咆哮を上げた
弥 『それじゃあ、行つてきます！』

そう言うのと俺は窓を閉めギアをDレンジに入れ、アクセルを踏んだ

窓越しに廃屋を見るとガレージのシャッターが開き、外界への扉が開いた

そこを突き抜ける様に俺達はゲートを走り抜けた

バックミラー越しに後ろを見ると、レミリア達が手を振っていた

……

……

上手く通り抜けた様で皆怪我一つ無く外界に着いた……が、車体が凍りつきエンジンが
止まってしまった

あ 「どうするんですか？」

弥 『溶けるまで待つ！』

ドアを開け外に出ると潮の匂いがした、近くに海があるのか？

シートを倒しフランを出してやると、興味深そうに周りを見回していた

フ 「ココが外界なの？、全く実感が無いなあ」

フ 「その上変な匂いするし」

弥 『これは潮の香りだね、俺もそんな好きな匂いじゃない』

あ 「そうでありますか？、自分は好きでありますか」

あきつ丸は好きらしい、人の好みは良く分らない、そう思いフランと冷たい目であきつ丸を見ていた

あ 「なんでありますかその目は」

弥 『いや、人の好みは分らないなあって』

フ 「そうそう、分かんないなあって」

あ 「ムウ、腑に落ちないであります…」

そう言つてあきつ丸はボンネットにもたれかかった、そこ凍つてるぞ

あ 「ヒヤッ！、冷たいであります！」

弥 『あの子馬鹿なのかね』

フ 「ね」

あ 「聞こえてるでありますぞ」

そう言つてあきつ丸はこちらに近づいて来た、黒いオーラを纏いながら

少し逃げようかと考えた矢先、上空から爆音が聞こえて来た、何かね？

空を見上げるとそこには 現役を引退したはずの 零戦が飛んでいた、それも編隊を組んで

弥 『あきつ丸、アレどこのだ？』

あ 「あれは海軍機でありますな、撃ち落としたい所であります」

弥 『今はやめてくれよ?、こっちに有るの手持ち武器ばかりだからな』

あ 「冗談であります、そこまで馬鹿じゃないんでありますよ」

弥 『フツ、あ、MARCHが溶けたな、鎮守府とやらに向かおうか』

そう言つて俺は助手席側のドアを開けた、先にフランが後ろに乗り、助手席にあきつ

丸が収まった

俺も運転席に座りセルを回す、一、三回回すとやつとエンジンが掛かった

弥 『さて、確か鎮守府は山の麓だったよな?』

ア 「確かそうであります」

弥 『じゃあ向かおう』

そう言い俺は油圧サスで車高を下げ、峠を下る事にした

……

……

外界に着いて数分、俺は道の悪さに四苦八苦していた

道幅が狭くその上、左右数センチは枯葉で使えなかつた

左の後の右は車体が振られ、アンダーが出そうな所をタックインで振じ伏せる

それが数回続き長いストレートに入った頃、あきつ丸が話し掛けてきた

あ 「いつもより真剣でありますな、笑みが消えてる」

弥 『初めての道だし、人乗せてるからバランスが崩れて』

あ 「大変でありますな」

あきつ丸が話し終わってすぐ、キツイヘアピンが待っていた

ブレーキングしギアを2に入れ、ハンドルを切りながらサイドを引く

車体は鮮やかに横を向きヘアピンを抜けて行った、この道走り辛い

また長いストレートに入った、ほんと読み辛いこの道

あ 「にしても、この道酷いでありますな、ガタガタで車体が跳ねまくってる」

弥 『ああ、しばらく誰も走ってないんだろう…うおお』

大きな起伏で車体が跳ね上がり、宙に浮き上がった

コン弥何秒で路面に着地し、車内に大きな衝撃が走った

着地し直ぐにまたヘアピンがあり、体制を立て直す暇もなく思い切りアンダーが出た

ダセエ、と内心思いつつ隣を見ると、顔面蒼白なあきつ丸が居た

弥 『ど、どした？』

あ 「超驚いたであります…」

弥 『だろぅね…、俺も驚いたもん』

そう言っつて周りを見ると大きな建物があり、門には（単冠湾鎮守府）と書いてあった、

やつと着いたか

見た所車庫も駐車場も無い様なので、何故やらジムニーが停めてある近くに停めておいた

あ「ああ、やつと着いたんでありますね」

弥『超疲れた、主に最後ので』

フ「楽しかった！、前言つてたジェットコースターつてあんな感じ？」

弥『そうそう、あんな感じ』

そう言いつつ大きな扉を叩くと、ギギギと音を立てて開いた

中には髪の毛長い眼鏡の女性が居て、深々と頭を下げている、しかしその雰囲気は寒気を感じる物がある

？「貴方達が提督が言っていた客人ですか？、私は大淀です」

弥『多分…、私は弥生、こっちがフラン、あきつ丸です』

大「やつぱり、それでは応接間にご案内します、付いてきてください」

弥『分かりました』

そうして俺達は応接間に通された、紅魔館程では無いが広いなここ

大「ここでお待ち下さい、それでは」

そう言い大淀さんは何処かに行ってしまった、ハンガーとか無いかな

結局弥ントを掛けるところは無く、椅子の背もたれに掛ける事にした、皺になりそう
あ 「ハンガーも無いんでありますな、流石海軍」

弥 『こりや皺になるな、あとフランは座つてなさい』

フ 「はーい」

応接間は広く寒い、暖炉にもしばらく火が入ってない様で薪もない、寒くい

仕方がないのでしばらく待つ事にした、こりや提督が来る頃には凍死してるんじゃないか？

その娘、狂暴につき

単冠湾鎮守府に来て三時間は経った、半ば軟禁の様なものだ

暖炉には薪がなく、だからと言つて魔法なんぞ使えば大問題になりかねない

あ 「流石海軍、鬼畜でありますなあ！」

弥 『ああ、パトラツシユ、俺はもう疲れたよ』

フ 「ちよつとー！、弥生い、死んじやダメよー！」

そんな漫才の様な事をしていないとやっていられない程寒い、馬鹿なんじやないかね
そんな気力も無くなり、ブーツとしていると、扉が叩かれた、やつとか

空 「遅れてすいませんね、こちらです」

こちらのことなど露知らず、アホみたいな笑顔で提督、もとい空がきた

渋々空に着いて行くと、何やら執務室と呼ばれる部屋に連れて行かれた、俺必要無く
ね？

三つの椅子が用意されており、向かいには大きな机と高価そうな椅子が置いてある
その高価そうな椅子に空は偉そうに座っていた、腹立つ

空 「それで、どこであきつ丸を見つけたんですか？」

弥 『紅魔館の敷地内ですよ』

空 「あの館の？」

弥 『ええ、それも雨の日に、庭で』

空 「ええ……」

……

：

弥 『それじゃ、また後で』

空 「また後で〜」

俺と空の話も終わり、空が言っていた明石なる少女にカーナビゲーションシステムを作って頂く事にした

な
俺が欲しいのは最早ナビと言うより車載コンピュータなんだけどな、作って貰えるか

尚、あきつ丸はまだ話があるらしくフランと共に部屋に残っている

そんな事を考えながら鎮守府を歩き回っていると、様々な女性にすれ違った

一人は悪態をつきながら、又一人はビクビクと怯えながら、又々一人はそそくさと走り去る様に

少なくとも話し掛ける事は出来そう無い、それもそうか、見知らぬ男が歩き回ってる

んだもんな

ましてここは軍事基地、このぐらい神経質になつても不思議じゃないか

どうすつかな、と考えていると背後から声を掛けられた

？ 「ちよつとお、そのの貴方々」

少し薄ら寒い物を感じ振り返ると、そこには濃い紫の髪をして、薙刀を持った女性が

居た

？ 「そこで何してるのかしら〜？」

そう言いつつ彼女はこちらに歩を進めて来た、こりやマズイ感じ？

弥 『ええ？、ああ、まあ、そのお』

？ 「まあ良いわあ、軍人だろうと民間人だろうとここで始末を付けるから〜」

そう言つて彼女は下から上に薙ぎ払う様に薙刀を振つた、咄嗟に右足から短刀を取り

出し上へ受け流す

弥 『何なんですかいきなり、危ないじゃ無いですか』

？ 「今のを防ぐなんて中々やるわね〜、血が滾つてきたわ〜」

オウ、これはマジでヤバいんじゃないかい？、殺気が強くなつて来たし

？ 「行くわよ、楽しませてね〜」

甘つたるい声に似合わない程えげつない攻撃を繰り広げる彼女の口元は、三日月の様

に歪んでいた

こちらは短刀に対してあちらは薙刀、リーチが長くあつちが完全に有利だ、距離が取れればな…

？ 「動きが遅くなってきたわよ〜」

そう言った彼女の放った突きは、俺の肩を貫いていた、まして右肩である、もう防げないな

薙刀はすぐに引き抜かれたが、短刀を取り落としてしまった

弥 『いぎツツ!!?、痛いじゃ無いですか…』

？ 「そんな事を言ってるのかしらね〜」

彼女の言う通り、肩の神経が切れたのか、肩から先が動かなくなっていた、チエツク
メイトか…

？ 「終わりよ、死になさい」

彼女は先に引き抜いた薙刀で俺を首元から斜めに斬り捨てた

？ 「冥土の土産に教えてあげる、私は龍田って言うのよ

—

それを聞き終えてすぐ、俺の意識は途絶えた、冥土の土産って…

…
…

：
 コ 「久々に死んだ感想はどう？」

コレットはニヤニヤしていた、俺が横になって居るのを見下ろす様にこちらを見てい
 る

弥 『非常に不愉快です、にしても強かった』

コ 「そうだけど、貴方短刀だったんだから五分五分つて所じゃない？」

弥 『それは無いね、あっち超余裕だったじゃん』

コ 「そうかねえ、で何ですぐ戻らないの？」

弥 『今戻ったらまた殺られるかなって』

コ 「なら大丈夫よ、いま大勢人が来てるから」

弥 『ん？、逆にマズくね？、ここ外界だし』

コ 「!!？、そうね早く戻って！」

コレットはそう言つて半ば強引に俺を追い出した、最近扱いが雑になつて来たな

……

：

あ 「ううツ…、弥生殿……」

生き返つて目を開けると、フランとあきつ丸以外は目を見開いていた、あきつ丸は泣

いている様だ

周りからは（化け物）やら（怪物）と小さな声で囁いているのが分かった
やっぱり外の人間なんてこんな物か、余程そっちの方が化け物だよ

あ「ああ……？、弥生殿!!？」

そう言つてあきつ丸はくっ付いて来た、取り敢えず頭を撫でておく、何かをまだ言つ
てるが聞き取れない

その状態で周りを見ると、俺を殺した龍田とやらが居た、痛いんですけど

龍「あらあらあら〜」

俺を殺した張本人はバツが悪そうに笑っている、誰のせいだと思つているんですか
ねえ？

弥『ああそうですねえ、私は化け物ですよ、悪かったですね』

少し大きな声でそう言うと、大多数がたじろぎ、悲鳴をあげる者もいた

弥『…部屋に戻ろう、フラン、あきつ丸』

あ「了解…であります……うぐつ」

フ「はーい！」

フランは元気だね

……

：
応接間に戻る途中の通路でも、痛い視線は変わらなかつた、やつぱ来るんじやなかつたな

部屋に戻り、椅子に座つて頬杖をついた、柄にも無くシヨックを受けてしまったからだ

人間は死んでこそ人間、そう昔聞いたことがある、じやあ死なない俺は何？

妖怪にもなれず、だからつて人間でも無く、その間の出来損ないじや無いか、そう考えた

そうやつて答えの無い考えを巡らせていると、後ろから足音が近づいて来た、あきつ丸か？

そしてあきつ丸が後ろから覆い被さる様に抱き付いてきた、どした？

あ 「どうしたんでありますか、まさかさっきのを気にしてるんですか？」

弥 『ん？、いや、何でも無い』

あ 「そうは思えないであります、弥生殿は弥生殿でありますよ」

弥 『うん、そうだな、ありがとな』

あ 「それ程でも」

そう言つてあきつ丸は微笑んだ、まあ可愛らしい

フ 「うーん、砂糖吐きそう」

フランは意味不明な事を言っていた、砂糖ガブ飲みしたの？

鎮守府での暮らし

真夜中である、あきつ丸や他の奴らも寝静まった、峠に行くしかなからう

MARCHはヒルクライムには向かない、何方かと言えばダウンヒル向きだ、車体が軽いからな

そう言う言い訳を考えながら峠の山頂に着いた、にしても暗いな、電気は通ってない様だ

良く見れば昔はあつたと思われる茶屋や、動かない自販機などがあり、哀愁を感じる車の外に出てフェンダーに寄りかかり、ポケットしていると、やはりコレットが話し掛けて来た

コ 「寂れてるわね」

弥 『麓にあんな物騒な奴等がいて、まして孤島だろ？、仕方ないさ』

コ 「それもそうね」

弥 『単冠湾なんて中々聞かない僻地だぜ？、俺も親があんな仕事してなきや知らなかったと思うわ』

コ 「親御さんは何やってるの？」

弥 『知ってるくせに、俺からは言わないからな』

コ 「ちえつ、つまらないなあ」

よくよく考えれば暗い中車のヘッドライトだけ付けて、一人で喋ってるやばい奴だなこりや化け物と言われても仕方ないかも知れん、変える気は無いけど

弥 『さて、戻りますか』

コ 「本当にこれだけのために来たのね、私は引つ込むわ」

そんな会話をしつつ車に乗り込んだ、さて、行きますかね

アクセルを踏み込みエンジンに鞭を入ると、MARCHは唸りを上げ飛び出した、S R 20にして正解だったな

直角コーナーに差し掛かりブレーキを踏む、するとリアの荷重が抜け滑り出し、鮮やかにコーナーを抜けた

毎回こうだったら良いのにな、と思いつながら俺はアクセルを開けた、にしても道が悪

い コースも終盤に差し掛かり、例のジャンピングスポットが近くなつて来た

あそこで如何に跳ばないかが鍵だ、あそこで跳んだら確実にアンダーが出るからな

そんな事を考えているうちに、問題のスポットに着き、俺はアクセルを抜き緩やかに

減速した

それでは不足だった様で車体が跳ね、運が悪く左前輪から着地した、今嫌な音したんですけれど

すぐに左前輪の接地感がなくなり、壁に突き刺さりそうになった、サスが壊れたか？
ひとまずスピードを30kmに下げ、車体に無駄なダメージが入らない様鎮守府に戻った、最悪だ

……

…

鎮守府の駐車場に車を止め、トランクの中のジャッキを取り出した、油圧ジャッキが欲しいです

車体を上げようと四苦八苦していると後ろから話しかけられた、化け物に話し掛ける物好きは誰かな？

？ 「よう、知らねえエキゾーストが聞こえたと思つたら、最近話題の客人じゃねえか」

そう言う彼女は、頭に4本の棒の様な物を付け、露出度が比較的高い服を着ていた
弥 『ちよいとばかりサスが逝かれた様で、用が無いなら失せて下さい』

？ 「おいおい、人が心配してやってんのにそりゃ無いだろ、にしても不思議な車だな」

弥 『どこがです?、エア口付けてる以外は他のMARCHと同じですよ』

? 「あんまり私を舐めんなよ?、排気音で大体は分かるぜ、エンジン積み換えてるだろそれ」

弥 『よく分かりましたね、SR20DEに積み換えてるんです』

? 「で、手伝ってやろうか?」

弥 『そうですね…、ジャッキとウマってあります?』

? 「確か提督の車庫に…、探して来るわ」

そう言っただけで彼女は走って行った、中には良い人もいるって事か

車体のある程度上げ、ホイールを外すと…、特に問題は無かった、何故?

ボンネットを開け、サスのマウント部やらボルトやらを見たが全く問題が無かった

俺がうんうん唸っていると後ろからガラガラと言う台車の音がして、さっきの女性が現れた

? 「分かったか?」

弥 『全然分かんないです、後はスフィア類しか…』

? 「スフィア?、シトロエンみたいな油圧サスじゃあるまいし…、まさかな?」

弥 『そのまさかです、だけど試験的に付けてたからスフィアが露出してるとすよね…』

? 「絶対それじゃねえか、なんか思い切り衝撃を与えたりしたのか？」

弥 『あそこの峠道が悪いでしょう？』

? 「ああ、確かにな」

弥 『それで車体が思い切り跳ねたんですよ、その時から接地感が無くなりましたし』

? 「それだな、んで、どうするんだ？」

弥 『保留、ですかね、修理のしようが無いので』

? 「んー、私が軍の奴らに口利きしてやろうか？」

弥 『いえ、お気持ちだけで』

俺の車勝手に直るしな、まあ引かれるから言わないが

? 「ふーん、そうか、気が変わったら言ってくれ」

弥 『分かりました、んで、貴女の名前は？』

? 「ん？、ああ、摩耶ってんだ、よろしくな」

弥 『ほう、私は弥生、女の子みたいな名前ですよね』

摩 「3月ってか、中々良い名前だぜ？」

弥 『なら良かった、よくイジられるんで』

摩 「まあ…、なんつーか、ドンマイ」

摩 「それじゃあな！、また会おうぜ」

そう言つて彼女は行つてしまった、柄にも無く良く喋つたものだ、家族の話とか

……

…

廊下を意味も無く歩いていると中々広い様だ、その上なんだこの部屋の量、嫌になるわ

ましてほぼ同じ様な廊下で迷いそうだ、てか迷つた、ここはどこですか？

手元の懐中時計を見ると朝飯の時間はゆうに過ぎていた、寝とけば良かったかな

少し不安になりながら歩いていると、龍田が部屋から出て来た、出来る事なら会いたく無かつた

龍 「あら、こんな所まで何しに来たの？」

弥 『…道に、迷つたんです』

龍 「間抜けねえ、「ん？、誰だこいつ」あ、天龍ちゃん」

部屋から顔を出した娘は天龍と言うらしい、強そうな名前

天 「何しに来たんだ？、喧嘩売つてんなら買うぜ？」

天龍はこちらを睨みながらそう言つた、目が泳いどるが

弥 『その言葉、そのままお返ししますよ』

天 「アア？、あんま調子に乗るなよ？」

そう言つて天龍は壁を殴ると、壁には亀裂が入りクレーターが出来た、馬鹿力だ、背筋が凍るぜ

弥 『次は脅しですか、ガキじゃあるまいし…』

天 「んだとテメエ！」

遂に天龍は殴り掛かつて来た、大振りだな

左側に避けそのまま体を捻り、後ろ蹴りを放つ、蹴りは天龍の腹部に命中した
奇妙な声を上げながら天竜は吹き飛んで行き、ビクビクと痙攣していた

龍 「…後で話があるわよ」

弥 『ごめんなさい』

取り敢えず天龍を医務室まで運ぶ事になった、女子には手を上げないって決めてんだ
がな

鎮守府での暮らし。2日目

医務室である、雰囲気はそのまま保健室で、入り浸って居た俺としては居心地が良い流石にベッドの隣で見ている訳にもいかないのです、龍田と並んで長机を囲んでいた軍医さんに淹れてもらった紅茶を啜りながら待つっていると、龍田が口を開いた

龍 「にしても、この前はごめんなさいねえ」

弥 『あれは私にも非がありますよ、あ、起きたみたいですよ』

天龍は何か呻きながら起き上がった、少し落ち着いたら謝らないとな

龍田は天龍に駆け寄って何かを話していた、俺は部屋に帰りたい

しばらくあちらで話した後、天龍こっちに來てテーブルに座った、気まずい：

気にせず紅茶を飲んでいると何故か天龍は俺の顔を覗き込んでくる、なんか付いてる

？

弥 『なんですか？』

天 「あつ、ああ、なんでもねえ…」

天龍はすぐに目を逸らし、テーブルのチョコを食べていた、変なの

その頃軍医さんがテレビを点け、ニュースを見ていた、内容は他愛もない国内の事件

などだったか

《アメリカ国防総省がFederal Bioterrorism Commissionを設立》という気になる物もあった

しばらく重苦しい空気が漂い、天龍が口を開いた

天「その…、さつきは悪かったな、殴り掛かっちゃって」

弥『私こそ、蹴りを喰らわせてしまいましたし…』

そうしてまた沈黙が続いた、俺も彼女も謝るのが苦手な様だ、全く不甲斐ない

重苦しい雰囲気の中、扉が勢いよく開かれ、あきつ丸が鼻息荒く立っていた、どうした？

あ「全く弥生殿！、何処にいるかと思えばこんな処に！」

弥『紅茶貰ってました、道に迷っちゃってな』

あ「全く…、部屋に戻りますよ、話があります」

弥『ん、分かった』

俺は立ち上がって扉に近付いた、後ろを振り向くと天龍は状況が飲み込めない様で

啞然としている

弥『それじゃ、失礼します』

あきつ丸に腕を引かれながら医務室を後にした、少し名残惜しい

……

…

部屋に戻ると椅子に座らされ、向かいにあきつ丸が座った、真面目な話かな？

あ 「弥生殿、この度陸軍に帰らせて頂く事になったであります」

弥 『そうか、寂しくなるな』

あ 「何を言ってるんですか？、弥生殿も行くんでありますよ」

当然、と言いたげな表情であきつ丸はそう言った、ちよつと腹立つな

弥 『え？、言っておくが俺は船、飛行機は酔っちゃまうからな？』

あ 「関係無いであります、陸軍省からの命令でありますから」

弥 『……、お前たまに強引だよな、仕方無い、行けば良いんだろ行けば』

あ 「弥生殿は物分かりが良くて好きでありますよ」

弥 『他の奴らにそれ言うなよ、勘違いされるぜ？』

あ 「弥生殿なら勘違いしないでありますよ？、それにあまり間違いで無いとい

うか……」

あきつ丸は小声で何かを言った、何故か頬を赤らめながら

弥 『なんか言ったか？』

あ 「ああ、何でも無いでありますよ、気にしないで欲しいであります」

弥 『そうか…、にしても陸軍省か…』

あ 「どうしたんでありますか？、何か不利益でも？」

弥 『……、俺には妹がいてな、確か陸軍に居たはずなんだよ』

脳裏によぎる妹の顔、常時ハイライトオフの死んだ目をした妹の顔、最早トラウマだよ

あ 「なら挨拶に行きましよう、その雰囲気だと何年も会ってないんでありますな？」

弥 『めんどくさい奴なんだよなあ、会いたくないなあ』

あ 「子供みたいな事言っでないで行くんでありますよ」

にしても喉が渴いた、確か自販機があるって言っでたな、馬鹿提督が

弥 『分かったよ、それはそうとなんか飲むか？、買っでくるけど』

あ 「じゃあ緑茶が欲しいであります」

弥 『了解、買っでくるよ』

そう言っで俺は部屋を出た、休憩所っでどこだっでたかな

……

……

休憩所は外にあり、煙草を吸う人が居るのか吸い殻入れがある、壁の方には自販機が

数台並んでいた

その近くにはテーブルやイス、ベンチなんかもあり中々整備されている様だ
何より見所なのは海が良く見える事だ、海に入るのは嫌いだが見るのは好きなんだよ
な

椅子に座りばへーっとしてしていると、扉が開き誰かが入って来た、霊夢みたいなオフ
シヨルダーだな

？ 「アレ？、提督かと思ったら違う人ネー」

そう言つて彼女は自販機で紅茶を買つた、にしても海外の人なのか？、片言だが

？ 「相席良いデスカー？」

弥 『あ、どうぞ』

彼女は俺の向かい側に座つた、こうなるならベンチにすれば良かったぜ

？ 「ワタシ金剛ネー、What's your name？」

弥 『ああ、弥生つて名前です、ただの庶民ですよ』

金 「family nameは？」

弥 『中島弥生、中島ですよ、弥生つて普通女の子に付けません？』

金 「良い名前じゃないデスカー！」

弥 『そう言つて貰えて良かったですよ』

弥 『んじゃ、私は帰りますね』

金 「good by!」

か そう言つて彼女大きく手を振っていた、俺の名前褒めた人初めてかもな、あ、二人目

……

……

部屋に戻るとあきつ丸はすっかり眠りこけていた、涎たらしてますよ

フ 「これで本当に軍人なのかな？」

フランは呆れたようにそう言つた、確かに現役 of 軍人とは思えない寝顔だった

弥 『折角だ、悪戯しておこう』

フ 「そうだね、でも何するの？」

弥 『まあ見てなさい』

そう言つて俺は懐からマジックを出し、あきつ丸の方を向いた

取り敢えずおでこに肉つて書いておいた、肌が白いから目立つな

フ 「フフ、明日怒られるよ？」

弥 『ツフフ、それは明日考えればいいさ、明日は早い、早く寝ましょう？』

フ 「そうね、まあ私は夜行性だから寝ないけどね」

フランはそう言つて戯けて見せた、可愛いな

明日は早い、寝るとしよう、そう思い俺は机に突っ伏し眠りに落ちた、昨日寝てないからな

東京　　あきつ丸返却大作戦

上京

朝は暇だ、フランが起きてる訳でも無くあきつ丸はすつかりの寝坊助さんだし折角だし部屋にあったティーパックで紅茶を淹れておいた、俺は使いの者か？

窓も無い様な部屋だが暖炉さえ火がつけば中々居心地が良い

朝の優雅なティータイムを過ごしているとききつ丸が起きて来た、ヨロヨロとフラつきながら

あ 「おはようございますう、弥生殿お」

弥 『おはよう、お茶なら入れてあるぞ』

あ 「ああ、ありがとうございます」

あきつ丸は礼を言つて俺の向かいに座つた、昨日書いた文字まだ残つてるんだけど

あ 「ん、美味しいでありますな…、どうしたんでありますか？、ニヤニヤして」

弥 『ん？、ああ、いやなんでも無い』

あ 「？、まあ良いでありますよな？、ここを出て東京行くの」

弥 『確か、ね』

あ 「つまりは飛行機であります、弥生殿の苦手な」

弥 『思い出させるなよ…』

そんな会話をしているとフランも起きて来た、服がはだけてますよ

フ 「…おはよお、みんな早いねえ、ふあ〜」

欠伸をしながらフランもテーブルを囲んだ、陽射しの入らないこの部屋は吸血鬼には最適の様だ

フ 「そういえばさ、飛行機ってどんな感じなの？」

弥 『地獄の様』

あ 「それは弥生殿だけであります、基本的には乗り心地の良い物でありますよ」

あ 「まあ重力に逆らうのは間違いだと思いますが…」

フ 「へえ〜、楽しみ〜」

弥 『と言うかフランは飛べるだろ、あれとそんな変わらないと思うぞ』

フ 「まあ、乗って見てから考えるよ」

弥 『乗るの確定かよ…』

あ 「残念でありますなあ、弥生殿」

そう言ったあきつ丸の顔はニヤケていた、こればかりは腹立つ

弥 『後で鏡見ておけよ、今お前凄い面白い』

あきつ丸はそう言うのと懐から鏡を出した

あ 「そんな訳…、あつ」

…

…

3人で空の元に出向いた、話によると今日出発らしい、早く言えばよな

そして今滑走路に居る、飛行機乗りたくねえな、輸送機らしいが

まして操縦は空が行うらしい、最早不安要素しかない

空 「あれ？、車は持って行かないんですか？」

弥 『ああ、持って行って良いんですか』

俺はそう聞いて指笛を吹くと、遠くから排気音が聞こえ角からMARCHが顔を出し

た

ミアが大きな犬の様にすり寄って来るのだが、ドアミラーがゴンゴン当たってすげえ

痛い

腕に痣を作りながら周りを見回すと空や加賀さんが目を丸くしていた、まあそりやそ

うか

一通りミアは甘え終わったのか輸送機の貨物室に収まった、心なしか雰囲気満足気

だ

加 「なんですか今のは？」

弥 『気にしないのが得策ですよ』

加 「そうですか…」

加 「それじゃあ、乗って下さい？」

加賀さんは満面の笑みでそう言った、全くこちらの気も知らないで

嫌々機体へ乗り込むと中は予想通り質素で、シートに関してはハンモックの様に布を張っただけのものだ

俺が一番端の席に座ると、隣にはいつも通りあきつ丸、その隣にはフランと並んだ

あ 「弥生殿、どれだけ飛行機嫌なんですか…」

弥 『ん、どうして分かった？』

あ 「この世の終わりみたいな顔してるでありますよ」

弥 『まあ、あながち間違いじゃないしな』

フ 「楽しみ〜」

3人でそんな話をしてしていると、機内アナウンスが流れた、飛び立つそうの間延びした空の腹立つ声が機内に響き、直ぐに体にGが掛かった

その後の事は想像に任せるが、一つだけ言っておく、とても気持ち悪い

…

：
色々ゴタゴタがあつたが横須賀に着いた、ここからは車で移動だ、尚空はジムニーで別移動である

既に日が暮れ首都高は走り屋達で一杯だろう、久し振りに出没しようかな

そう思い今は大黒PAに居る、ちよつと休憩つて事だ

あ 「弥生殿く、何飲みますかく」

弥 『あ、コーラでよろしく』

あ 「はい、コーラであります」

弥 『ありがとう…、つてこれおしるコーラじゃんかよ！』

あ 「あ、間違えたであります」

弥 『あきつ丸…これ飲める？』

あ 「いいえ…、フラン殿に任せましょう」

弥 『そうすつか、まあ今寝てるし後でいいいだろ』

あ 「そうでありますな、そろそろ出発しましょう、間に合わなくなつてしまふでありますよ」

弥 『だな、そろそろ行くか』

そうして俺達はMARCHに乗り込み、PAを出た

……

…

しばらく首都高を流しているとあきつ丸が話し掛けて来た

あ 「陸軍省に帰ったら、もしかしたら一緒に帰ってこれないかもしれないであります」

弥 『やっぱり数ヶ月行方不明だったら、聞き取り調査もあるだろうしな』

あ 「それに、多分身体検査もありましょうし、少なくとも1、2ヶ月間は…」

弥 『そうか、寂しくなるな』

あ 「その代わり、戻って来た暁には強くなっていると期待していて下さい！」

弥 『はあ、良く分からないが期待しておくよ』

あ 「あ、ここで高速を降りて下さい」

弥 『ん、ああ、分かったよ』

そう言われ下道に降りた、にしてもさつきから付けられてる気がする、気のせいかな？
交差点をいくつ通過しようが、あきつ丸の言っている裏道を通ったりしても同じライ
トが付いて来ている

黒い日産 Figaro、純正カラーでは無いがあまり珍しくも無い、俺が知っている
個体でない事を祈ろう

そんな事を考えていると陸軍省についた、デカイ建物だなー

駐車場のゲートにはゴツイ軍人が2人おり、物々しい雰囲気が漂っている

その二人がこちらを見据えると、こちらに手招きしている、早くこつちに来いと言うことか

軍 「あなたが弥生さんですか？」

弥 『ええ、あきつ丸を連れて来ました』

軍 「もうなんて言えば良いか、とても感謝しています、ありがとうございます！」

軍 「我ら陸軍の宝であるあきつ丸を……」

そう言つて軍人の2人は大粒の涙を零していた、余程大事にされてたんだな

あ 「中々恥ずかしいものでありますな、弥生殿、行きましょう」

あきつ丸は照れ臭そうに微笑んだ、いつも真つ白な顔が珍しく赤くなっている

駐車場のゲートが開き中に案内された、クラウンやらプレジデントの中にMARCHは中々場違い感がある

高級車に囲まれたミアは自分を強く見せたいのか車高を下げている、張り合わんでも

陸軍省より

駐車場から中に入るとホールが広がっていた、役所には見えない程至る所に装飾が散りばめられている

色々部署がある様で憲兵团とかなんちゃら対策室など、無知な俺には分からないものばかりだ

にしてもやはりあきつ丸は陸軍では有名人の様だ、アイドルを見る様な目で皆が見ている

あ 「恥ずかしい物がありますな、ここまで注目されると」

弥 『ふーん、そうなんだ』

あ 「どうしたんですか？、よそよそしい」

弥 『ん？、ああ、なんでもない、考え事してた』

あ 「隣にこんな可愛い女の子が居るのにですか？」

そう言っであきつ丸は誇らしげな表情をした、自分で言わないの

弥 『はいはい、そうですね、貴女は可愛いですよ』

俺がそう言うにあきつ丸の顔は何故か真っ赤になった、そう言うのに耐性が無いんで

すかね

あ 「そう言う事を真顔で言わないで欲しいであります…」

あきつ丸はそう言つて両手で顔を覆つてしまった、歩いてるんだから前見なさいよ
その後案の定あきつ丸は柱にぶつかった、物凄い音したけど大丈夫かね

…

…

結局俺とあきつ丸は応接間に通された、フランは日がダメなので別室の日の入らない
部屋に居る

単冠湾とは違いここには窓があり明るい雰囲気だ、普通はこうあるべきだよな

そうして今はあきつ丸が別部屋で質問を受けている、つまり俺は暇つて事だ

仕方ない、本でも読むか、そう思つた時ドアが叩かれた

その叩き方は尋常じゃ無く、最早一種の狂気を感じる程だった

ドアを開けると黒いマントにペストマスクを着けた娘が居た

？ 「久し振りですね、逢いたかったですよ、お兄様」

そう言つて娘はマスクを外した、我が妹フィガ口であつた

弥 『久し振り、俺は会いたく無かつたよ』

フ 「いつもの様に辛辣ですね、まあ良いです、お兄様には色々聞きたい事があります

が……」

ファイガロはほほ瞬きもせず、ただひたすらこちらを見据えている

フ 「あきつ丸とどの様な関係で？、場合によつては消えて貰うのですが」

その瞬間ファイガロの背後に黒い靄の様な物が見えた、負のオーラつて奴ですか？

弥 『なんて事は無い、ただの友人だよ』

フ 「そうですか、命拾いましたね、あきつ丸さん」

弥 『何を物騒な事を…、いつもより素直だな、どうしてだ？』

フ 「お兄様は嘘を付くと目が泳ぎます、それを見るんですよ」

フ 「お兄様は私に嘘はつけません、私はお兄様の全てを知っているんですよ」

弥 『そうかい、気をつけよ…』

フ 「そう言いつつ何も改善しないのでしよう？」

弥 『もちろん、面倒だからな』

弥 『つて事で出掛けて来る、それじゃ』

フ 「御一緒します」

弥 『するな、ここで待つてなさい』

そう言つて俺部屋を離れた、絶対付いてくる気がするな

まあ良い、廊下を歩きながら昔のことを思い出した、ファイガロが昔起した問題につい

て

昔、まあ小学から中学位だ、自負するのもしかと思いが俺はある程度モテた、大半性格に難が有ったが

しかし何故か俺に告った者は次の日から学校に来なくなつた、それも何人も

最初の方は偶然だと思つたが余りに数が多すぎる、学校でも噂になつた位だからな

そんな日く付きの俺はイジメの対象になるのに時間はかからなかつた、今時余り無い校舎裏つて奴だ

まして一人二人なら余裕だが多勢に無勢過ぎた、十人以上は無いだろ：

それが二、三日続いたがある日パツタリと止まつた、正直嬉しかつたな

その時思い出した、愚痴は全てフィガロにしか言つて無い、親に言うのは格好付かなかつたからな

うちは余り親が居なくて俺が洗濯していた、その日フィガロの制服には赤い沁みが多数付着していた

その後聞いた話ではそいつらは全員病院送りになつていたそうだ、それが昔の話
フ「どうしたんですか、考えている姿も愛しいですね」

さらつとマスクを付け直し、フィガロは俺の隣を歩いていて

弥『ちよくちよくそう言う事言うのやめなさい』

弥 『昔の事思い出してた、セーラー服洗うの大変だったなって』

フ 「思い出す所が違う気がしますけど…、別に私に任せてくれても良かったんですよ？」

弥 『腐つても兄だしな、それぐらいやらなきゃ示しがつかん』

フ 「なら姉様達に…、あの人達は駄目ですね」

弥 『不器用過ぎて服破りそうでもないな』

フ 「ええ…、着きましたよ」

意外と廊下が長かったが駐車場に着いた、良く考えたら何でフィガロ付いて来てんの？

弥 『よくよく考えたらなんでお前付いてきてんの？』

フ 「お兄様が行く所に私有りですよ」

フィガロは真顔でそう言った、何言ってるの

弥 『意味が分からん、折角だから今日泊まるホテルまで案内してくれ』

フ 「ラブホですか？、流石に物事には順序があるって言うか、その〜」

頬を染めながらフィガロはド直球の下ネタを挟んで来た、そんな子に育てた覚えは無いぞ

弥 『違うわ、陸軍省に泊まるスペース無いだろ、ホテルに泊まってくれって言われた

んだよ』

フ 「ああ、それなら私の家に泊まれば良いんじゃない？」

弥 『お前の家二人泊まれる？、出来れば日の入らない部屋』

フ 「その辺ならご安心ください、いつでもお兄様と同棲出来る様準備してあります」

弥 『全く…、1週間はお世話になるわ』

そうしてフィガロの家に案内してもらった、後でフランも連れて来ないとな

妹宅にて

結局フィガロの家で1日過ごした、この年頃にしては珍しく家がデカイ事から軍人は儲かると言う事を再認識させられ正直腹が立っている

外見はもろ洋館で内装は紅魔館を地味にした様なイメージだ、まあそれでも派手だが壁には盾やら劔やらが架かっていて物々しい雰囲気を放っている、この内装はどうなの？

フィガロの部屋に入ると机の上には色々乗っていた、タイプライターやら蠟燭立て等

が
その中には日記も混ざっていた、あいつ日記書いているんだな

ページを捲ると陸軍の行事やらあきつ丸搜索の進展、北方海域でのレーダーの誤作動など

業務的な事が書かれていた、大半が分かりません

そんな中3日前の事が書かれたページに差し掛かった、前半部分はあきつ丸についてだが

後半は全て俺の事で（お兄様に近づく女共は皆殺し）的な事書いてある

まあ想定どうりだ、しかしまた物騒な事考えてるな

弥 『……………、逃げるか』

景気付けにそう眩き日記を置いた

扉を開け部屋を出ると、後ろからチャキリと金属がぶつかる音が響いた

そして直ぐ足音が近づいて来てすぐ背後で止まった

フ 「どこに行かれるのですか?、お兄様」

俺が動けないでいると左肩に顎を乗せて来た、右側のこめかみには銃口だが

弥 『……………』

フ 「何故いつも答えてくれないんですか、また私を置いてどこかへ行ってしまうん

ですか」

フ 「許しませんよ、2度と私から離れられないようにしてあげますから」

首元にチクリと痛みが走ると俺の意識は朦朧とし、間も無く闇に墮ちた

……………

…

目が醒めると牢屋と言うか、檻のような所に入れられており

モーゼルや短剣、懐中時計に至るまで金属製の物は全て取り上げられていた、ブーツ

以外は

フ 「目が醒めましたか、その居心地はどうですか？」

弥 『…良い訳無いだろ』

フ 「フフ、すぐに慣れますよ」

フ 「それじゃ仕事に行つて来るので、そこで良い子にしていして下さい」

フ そう言つてフィガロは外に出て行つてしまった、出ないとキツイな、ここ狭い

フ 「檻から出ようとしたらお仕置きですからね」

扉の隙間から顔を出したフィガロに念押しされた、足掻くだけ無駄か

取り敢えず檻をガタガタしていたが、ピクともしないしどうしようもない、泣けるぜ

…

…

取り敢えず横になって待つていると、30分位でフィガロが戻つて来た

ブーツからデリンジャーを取り出しこめかみに当てる、流石にブーツまで見なかった

か

フ 「お兄様、良い子にしましたか…！」

フィガロがこちらを見ると、顔を白くして焦りだした

弥 『ここから出せ、じゃなきゃ俺はここで死ぬ』

フ 「その銃どこから？、全て取り上げたはず！」

弥 『今度はブーツまで調べるんだな、毎回お前は詰めが甘いんだよ』

フ 「…死ぬ度胸なんて無いでしょう、早く銃を渡して下さい」

弥 『それはどうかな…?』

そう言つて俺は撃鉄を起こした、ハツタリじゃない事を示さねばな

数秒の睨み合いの末、ファイガロは諦めた様にこう言つた

フ 「はあ、仕方ありません、出すからその銃を仕舞つて下さい」

そうして牢の扉が開いた、満を辞して外に出れるわけだ

弥 『お前に会うたび俺はどこかに閉じ込められるんだよ』

フ 「お兄様が逃げない様にですよ、すぐ逃げようとはしますから、貴方は」

ファイガロは呆れた様にそう言つた、俺は囚人じゃ無いんだから良いだろ別に

弥 『俺は自由が好きなの、だから軍人にならなかつたんだから』

フ 「そうでしたね、外を出歩く事を認めましょう…」

フ 「ただ条件があります、私以外の女に近付かないで下さい、じやなきや…」

そう言つてファイガロはこちらにルガーを向け微笑みそして引き金を引いた

弾は頬を掠め壁にめり込んだ、殺す気かよ

…

…

フィガロに連れられまた陸軍省に來た、あきつ丸はどうしてるかなあ

数ヶ月ずっと一緒に居たからか少し気になって居る、まあ死にはしないだろうが

あきつ丸の時と同じ様にフィガロが隣に居ると注目を集める、あきつ丸の時と違う気がするが

それもそのはず、隣に居るフィガロの服装はフード付きのマントにペストマスクだからだ

そう言う俺も黒のロングコートではあるが隣のインパクト強過ぎだろ、俺が陰に隠れてるんですけど

フ 「どうしたんですか、考え込んで」

弥 『いや、お前ファクション個性的過ぎないか?』

フ 「日に焼けたく無いんですよ」

ペストマスクを外しながらフィガロはそう言った、何処と無く不機嫌な様だ

弥 『そう言う物なの?、よく分からんわ』

フ 「お兄様は良いですよね、日に焼けなくて」

フィガロの言い方は少し恨めしそうだった、兄妹でここまで体質違うのは何故だろう

?

弥 『健康的に見えて良いよなお前、病的って言われるぞ俺』

俺がそう言うのとペストマスクを着け直し、スタスタと先に行ってしまった

弥 『ちよつと待つ…、行つちまったよあいつ…』

一人取り残された俺は最早為す術なく、近くにあつたベンチに座つた

暫く座つて辺りを見渡して居ると…、あきつ丸が一杯居る、少し顔の造形が違うがこれが噂のドツペルゲンガーかなあ、一箇所に集まり過ぎだけだな

まあいつか、そう思い自販機で買ったコーラを飲みながらポーツとして居た

陸軍の走り屋

ベンチに座ってる間昔の事を思い出して居た、フィガロがああなった原因だ

その頃はまだ今の様に目が死んでおらず、また変な事も言わない年頃の普通の女子高生だった

特にこれといった弱点も無く成績優秀、人当たりも良い完璧超人だった、昔はな

その頃俺はマルハワ学園に行く事になっていた、うちは代々あそこに行く事になっていたからだ

あそこの奴等エリート意識高かったなあ、ムカつく奴も沢山居た

海外にあるマルハワに行くと言う事は日本に居ないことを意味する、つまりフィガロには会えない

俺は意識して無かったがそれがショックだったのか口調、行動がおかしくなり始めた
遂には親と喧嘩し自室に閉じ籠ってしまい、説得したが遂に俺が発つ日まで出てくる
ことは無かった

翌年にはマルハワに来るから良いと思って居たが、来る事はなく親に聞くとベネット
に行ったと聞かされた

楽しいスクールライフを満喫し卒業、日本に帰るとゆつたりとした一年を過ごした
今思えばあれは嵐の前の静けさだったのかも知れない：

ファイガロが帰って来ると今の様に目が死んでおり口調も敬語に変わっていた、何処と
無く余所余所しい感じ

しばらくすると何故か夜に部屋に忍び込んでいる事があった、酷い日には布団に入っ
て居たり

部屋に隠してあつた薄い本が灰になって机の上に置いてあつた時は笑つた、失笑であ
る

その後も風呂に入つて来ようとしたり、人の部屋のベッドで先に寝ていたり奇妙な行
動が目立つた

一年程そんな生活をして居ると、職場で彼女が出来た、赤毛の可愛い子でした

一ヶ月ほど付き合つて居るとファイガロがあの子は誰だと聞いて来た、何で知つてるの
かは未だに分からん

彼女だと言うとブツブツと何かを言いながら何処かに行つてしまった、その時はまだ
気にも止めて無かつた

それから赤毛の彼女は疲れたご様子だった、目元に隈を作つてたり髪が少しボサボサ
になつていたり

聞くと夜中に家のインターホンを連打して来たり、家のポストに死んだ鼠と手紙が入って居たり

手紙の内容は今の彼氏と別れなければお前を殺すと言ったものだった、過激ですよね
その後一カ月程で彼女は引越してしまい、関係は自然に消えて行つた

親のコネが偉大な為監視カメラのデータを手に入れる事が出来た、そこには知り合いが写って居た

我が妹フィガロである、特徴的なゴスロリファッション、ペストマスクでそれが分かつた

それが発端、忌々しい昔の話だ

フ 「お兄様、こんな所で何してるんですか、探しましたよ」

弥 『お前が置いてったんだろ、迷子になりそうだから待機してた』

フ 「大声で呼んでくれれば迎えに行つたのに」

弥 『俺は迷子の小学生か、ダサいから嫌です』

その後フィガロは仕事に行き、俺はフィガロの家に帰る事にした

……

……

地下駐車場に戻り見学がてら停まつてる車を見ていた、軍の金持ち共はどんなの乗っ

てんだ？

と、言う事で見えていくと大半はクラウンやプレジデント、BMWが停まっていた、高級車エ：

珍しい所だとザガートが有ったり、結局高級車じゃねえか

そんなこんなで愛車の元に戻ると白いスク水の女の子が興味津々に見て居た

弥 『俺の車になんかご用ですか？』

？ 「ああ、いや…、ここまで改造されたの見た事なくて…」

？ 「ごめんなさい！」

そう言つて彼女は走つて行つてしまった、にしても何でスク水なんだ？、近くに海やらプール無いぞ？

まあ良い、車に乗り込みセルを回すとエンジンが掛かりエキゾーストノートが地下駐に響いた

ギアをDに入れ駐車場から出ると背後から別のエキゾーストが聞こえた、特徴的な空冷式のサウンドだ

バックミラーを覗くと背後にはまん丸なヘッドライトが見え、ロービームでくっ付いてくる

ライトの間隔的に古い軽だな、フロントテ辺りか？

しばらく走って居たがずっと付いてくる、少し遊んでやるか、丁度峠だし

O/DをONにしエンジンに鞭を入れた、それに答える様にエンジンは唸り車体を引つ張って行く

すると後ろの軽は離れて行き、バックミラーから消えた

しかしコーナーを抜ける度に車間は縮まっていった、軽いんだな後ろの

しかし後ろの車を見て居ると気づく事がある、それはアンダーが顕著に出て居る事だ
古いFF車に有りがちなアクセルONでドアンダーと言った感じ、だからドリフトしてんのか

こちらもアンダーを消すためドリフトやタックインを多用し走っている、いつも走り方だ

そんな調子で下っていくと峠を抜けてしまった、遊び過ぎちまったみたいだな

そのまま近くのコンビニには居るとそのまま軽も入って来た、ホンダZか、軽い訳だ
運転席を見るとさつきMARUCHを見て居たスク水の子だ、そのまま出て来るなよ
そのまま車の中にいると窓が叩かれた、スク水の子だ

弥 『どうして付いて来たんです?』

? 「ああ、その、まだ名前を聞いてなくて…」

弥 『私の?、弥生って名前です、女の子みたいな名前ですよね』

弥 『貴女は?』

? 「ああ、私はまるゆって言います…」

? 「それじゃ!」

そう言つてまるゆは乙に乗り込み、走つて行つてしまった、嵐の様な子だな…
その後フィガロに他の女の匂いがすると問い詰められたのはまた別のお話

休日

外界に来て1週間、軍の堅苦しい調査にも慣れてきた

今日は祝日らしく一部を除き軍人は全ておやすみらしい

って事であきつ丸と神奈川の中古車屋に居る、車を探すらしい

弥 『何が欲しいんだ?』

あ 「うーん、小さい車ですかね」

弥 『資金は?』

あ 「我が陸軍が出してくれるんでありますよ」

弥 『太っ腹だねえ』

あ 「そうでありますなあ、流石であります」

そんな話をしていると店の人が出て来た

店 「何をお探ですか?」

弥 『小型車を、この子が乗るんです』

そう言う店の人少しあきつ丸を見ると、こつちだと歩き出した

店 「これなんてどうですか?」

そう言っ出て出されたのは赤いアルトだった、所々錆が浮き色褪せが酷い物でいかに雑に扱われたが分かる

あ 「チェンジで！」

店 「分かりました」

店員さんはまた歩き始めた、次なる小型車の元へ

次に紹介されたのは白いスターレットだった、走り屋の物だったのかエアロが付いている

あ 「良いんですが、日産派なんでありますよ、自分」

店 「なら良いものがありますよ」

そう言っ店員さんは店の奥の方を指差した

そこにあつたのはK10、奇しくも俺のMARCHの先代に当たる車で、

前にあきつ丸と話したMARCH turboだった、黒いボディは埃を被つて薄汚いが錆などは無かつた

車内を覗くと相応の劣化はあるがシートなどは破れていなかった、尚マニュアル車な様だ

店 「前の店主が大事にしてた物なんですが…、まあもう乗る人も居ないので」

あ 「…ボンネット開けて見ても？」

店 「どうぞ」

あきつ丸が前ヒンジのボンネットを開けるとそこには…

MA10ETではなくMA9ERTが鎮座していた

MARCH super turbo用のエンジンで、スーパーチャージャーとターボを付けたツインチャージエンジンだ

あ 「驚いたであります」

弥 『考える事は皆同じって事か』

店 「前の店主さんはsuper turboのエアロが嫌いで、わざわざturbo用のエアロとインテリアに積み替えたんですよ」

弥 『ほほう、中々こだわりが強い人だったんですね』

店 「ええ…、これにしますか？」

あ 「はい！、これが良いです、これ下さいッ！」

あきつ丸は凄いいい気味にそう言った、店員さん困ってるよ

店 「分かりました、では店内で書類を…」

そうやってあきつ丸と店員さんは店に入って行った、そろそろ幻想郷に帰らなきやな

…

…

あきつ丸を家に送り、フィガロの家に帰って来た、鍵を開けると中にはニコニコしたフィガロが待っていた

フ 「お帰りなさい、お兄様♪」

弥 『た、ただいま』

フィガロの後ろには黒いオーラが出ており、無言の圧力を感じる

フ 「どこに行つて来たんですか？」

弥 『中古車屋さんに』

フ 「誰と？」

弥 『あきつ丸と』

俺がそう言うのとフィガロの笑顔が消え真顔になり、オーラが更に強くなった

フ 「私出掛けてきます、やらなきやいけない事ができました」

弥 『待て待て待て待て行くな行くな』

俺がフィガロの肩を掴むと何故邪魔をするんだって顔をしていた、ヤバい気しかしな
いもん…

弥 『あの、その、ああ！、久しぶりにフィガロの手料理が食べたいなって思ったんだ
けど…ダメか？』

フ 「そう言う事なら早く言つて下さいよ！、準備してきまーす♪」

そう言つてフィガロは台所に走つて行つた、セーフ！

……

…

頼んでしまったので手伝いに行くと、テーブルに座つて待つていてくれと言われキツチンから追い出された

仕方がないので暫くブーツとしてしていると洋館の家には似合わない和食が出てきた、なんとアンバランス

フ 「出来ました！、召し上がれ」

弥 『ありがと、いただきます』

ご飯に味噌汁、アジの塩焼きに卵と漬物と見本の様なもので、器が洋風なだけあつてまたミスマツチだ

弥 『…美味しいな』

フ 「腕によりをかけて作りましたから、お口に合つて何よりです」

気付けばフィガロもすぐ隣で同じ食べていた、まだ夕飯食つてなかつたんだな
弥 『お前さ、もしかしてまだ夕食食べてなかつたのか？』

フ 「ええ、お兄様と食べたかつたので」

弥 『まあ、なんだ、すまない』

俺がそう謝るとフィガロはびっくりした様な顔でこちらを見ていた

フ 「お兄様が謝るなんて珍しい」

弥 『俺は何だと思われてるんだ、悪い事したと思ったんだよ』

フ 「フフツ、そうですか」

そう言つてフィガロは微笑んだ、我が妹ながら可愛いな

弥 『口にご飯粒付いてるぞ』

フ 「え?、どこですか?」

弥 『ハイハイ』

俺はフィガロの頬に付いたご飯粒を自らの口に放り込み、自分の飯を掻き込んだ

……

…

歯を磨き寝間着に着替え寝る準備を済ませた、風呂が一番大変だったぜ

自室に戻りベッドをめくるとフィガロが隠れており抱き付かれた、やめなさいって

フ 「今日ぐらいは一緒に寝て下さい、今日は寂しかったですよ?」

弥 『分かったから離してくれ、これじゃ寝れないだろう』

そう言うのと渋々ながら離してくれた、仕方ないから一緒に寝てやるよ

布団に転がり掛け布団をかけた、背中にはフィガロがくっ付いている

フ 「…昔、お兄様が留学に行った時を憶えていますか？」

弥 『ああ、お前が引き籠もっちゃった時のことだろ？』

フ 「ええ、あの時私は凄く寂しかった、いつも遊んでくれていたお兄様が居なくなつてしまうんですから」

フ 「寂しくて寂しくてどうしてか考えた時、私気付いたんです、貴方、お兄様が好きだつて」

弥 『そうか、悪い事したな…』

フ 「だから…」

フ 「今度は置いて行かないで、お兄ちゃん」

呪われたネツクレス

今日は聞き取り調査も無い為午前中は暇だ

フィガロ、あきつ丸共にお仕事に行ってるから話し相手いないし

と、言う事で俺は今海辺にいる、案外遠くてもう日も沈みそうだが

コ 「一日棒に振るったわね」

弥 『たまにはこんな日もあつて良いだろ、海綺麗だし』

コ 「貴方海嫌いじゃなかった？」

弥 『入るのが嫌いなんだよ、ベタつく感じが、あと匂いな』

コ 「そう…、にしても人が居ないわね」

弥 『あれじゃないか？、深海棲艦が云々つて話、まあここ昔から封鎖されてたけど』

コ 「二つの意味で駄目じゃない！」

弥 『まあ良いじゃん、別に死ぬ訳じゃないし』

そんな話をしつつMARCHのボンネットに寄り掛かって海を見ていると目の前で
波紋が生まれた

今の天候は晴れで風も無く、波紋は生まれない筈なんだけどな

波紋は次第に大きくなり、海から少女が出て来た

弥 『…』

? 「…」

見た目はボンネットを被りフリルスカーートを履いている、肌はワ級の様に血の気のな
い白い肌だ

? 「貴方カラワ級ノ匂イガスルワ…?」

不審気に彼女はそう言い顔を近付けて来た、スンスンと鼻を鳴らし匂いを嗅いでる様
だ

? 「ヤツパリ…、ドウイウコト…ツ!」

弥 『グツ、カハツ…!』

こいつ…!、いきなり首をツ!

? 『死ニタクナイナラ理由ヲ聞カセテクレルカシラ?、ワ級チャンノ匂イガスルノ
カ』

彼女はいきなり手を離し、俺を地面に落とした

弥 『ゲホツケホツ…、長くなりますよ、説明するのは…』

? 「早くシナサイ、殺サレタクナイナラ…、ネ?」

…

：

？ 「ソウイウコトダツタノネ…、総力ヲ上ゲテ搜索シテモ見ツカラナイハズダワ」

弥 『なので当分は帰って来ないかと』

？ 「ソウ、ダケド貴方ノ話ヲ全テ信ジタ訳ジヤナイワ、貴方ガ助カリタイダケカモシレナイシ」

？ 「ツテ事デコレヲ肌身離サズ持ツテイナサイ」

そう言つて首に付けられたのはネックレスの様なもので、飾りが黒い玉に人間の歯がついた様な物だった

弥 『手放そうとすると？』

？ 「私ガ直々ニ殺シニ行クシ、ソレモ自爆スルワ」

？ 「ソレニソノネックレスハ通信機ノ代ワリニナツテイルワ、タ弥ニ通信スルカラ答エルヨウニ」

弥 『はあ…、観念しろつて事ですか』

？ 「ソウヨ、ソレジャソロソロヤバイカラ帰ルワネ」

弥 『さよなら〜』

？ 「全クモウ…、ソウイエバ弥ダ名乗ツテナカッタワネ」

？ 「私ハ離島棲鬼、ヨロシクネ」

そう言って彼女、離島棲鬼は海に沈んで行った

その頃は沈んでおり辺りは暗くなっていた、仕方ない、そう割り切り車で家に帰る事にした

……

：

（翌日）

弥 『あー変な夢見た！、深海棲艦に首絞められた上に変なネックレス付けられる夢

！、どんな夢だよ』

離 「何ヲ言ツテルノカシラ、アレハ現実ヨ」

朝から気分がだだ下がりである、首のネックレス趣味悪いし

離 「マア、コンナ感じデ貴方ノ発言ハ全テコツチニ筒拔ケダカラ、余計ナ事ハ言ワナ

イ方ガ身ノ為ヨ」

弥 『プライバシーは何処へ？』

離 「空虚ヘト消エ去ツタワ」

弥 『変態なんですネ分かります』

離 「爆破サレタイノカシラ」

魔 『すいません、あ、人が来るんで黙ってて下さい』

部屋の扉が開きフィガロが入って来た、断りを入れなさい

フ 「誰と話してたんですか？」

弥 『音読をしました』

そう言つて俺は手元の本をフィガロに見せた、すつごい疑つてる顔してる

フィガロはしばらくこちらを睨んだ後、呆れたように目を逸らした

フ 「まあいいです、ご飯出来たんで早く降りてきて下さい」

フィガロはそう告げると部屋から出て行つてしまった、何時もなら問い詰めて来るのに珍しい

弥 『…もう良いですよ』

離 「ソウ？、気ニナツタンダケド彼女トハドウイウ関係？」

弥 『兄妹です、決してリア充ではありません』

離 「ソウ、命拾イシタワネ」

そんな半ば口喧嘩の様な会話を繰り広げ、下の階に降りた

……

……

フィガロはもうテーブルに座っていて俺が来るのを待っていた様だ

今日の朝食はパンにベーコンエッグと見本の様だった

フ 「そろそろ帰つてしまふんですか？」

弥 『一ヶ月以内に帰らないとマズイんだよ、フランが病気でさ』
取り敢えずフランを病気にしといて煙に巻こう

フ 「どんな？」

弥 『分からないから困つてる、瘴氣的なもんじゃ無いか』

フ 「仕方ない…、船を手配してあるので明日それで帰りましょう、もちろん私も付いて行きます」

フ 「まあ、単冠湾の空提督と加賀も乗るんですけどね」

嫌そうにフィガロはそう言った、まあ俺も好ましく無いが

弥 『家どうするんだ、だいぶ長く留守にする事になるぜ？』

フ 「信頼出来るまるゆに貸しますよ、部屋無くて困つてみたいだし」

弥 『そうか、そう言えばあきつ丸は置いて行くのか？』

フ 「検査の結果艀装にガタが来てたり、その他メンテナンスが有るから多分置いて行くかと」

フ 「て言うか私には心配した事無いのにあの子にはするんですね、私はこんなに想つてるのに」

そう言うフィガロの後ろには黒いオーラが出ていた、怖いし

弥 『そう言うことじゃ無いし、気になっただけだし』

フ 「まあいいです、私はそろそろ仕事に行きますけど、付いて来ますか？」

弥 『家に居ても暇だし行くわ、支度してくる』

そうして今日も一日が始まった、その後フィガロに陸軍の軍服を着せられたのは別の

話

幻想に還し者

帰郷

朝起きると、そこは暗闇だった

弥 『ん…、ああ、朝か…』

なんて事はない、俺は寝相があまり良く無いからうつ伏せになっているだけだ
体を腕立ての要領で持ち上げ起き上が…、なんと起き上がれません、腰から下が動か
んのです

それに腰の辺りが心なしか重い、誰か乗ってんなこれ

弥 『ちよ、フィガロ、退きなさい』

フ 「ん…、あと一年待つて下さいい…、Z Z Z Z …」

弥 『一年は長えよ！、つて言うかお前重くなつたな』

俺がそう言った瞬間、腰に巻き付いていた腕に力がこもり始めた

弥 『ちよつと、痛い、痛いって』

フ 「お兄様ア…、言つて良い事と悪い事がありますよ？、まして女子に」

弥 『本当の事を…痛ッ！、ゴメンで、許してくれ』

フ 「ったく、そう言う事言うからデリカシー無いって言われるんですよ」

そう言うとフィガロは腕を解いてくれた、ってかなくて俺の部屋で寝てるんだよ
人の部屋で勝手に寝てる奴にデリカシー云々言われたくないわ

フ 「それはお兄様の寝顔を見にですよ」

なんで分かった、俺は妖怪サトラレなのか？、まあ妖怪は合ってるな

弥 『お前にデリカシー云々言われたく無いわ、人の寝顔見に来る奴に』

フ 「それとこれとは話が別ですよ」

弥 『ったく、そうかよ』

弥 『そろそろフランを迎えに行こう、間に合わなくなる』

そんな話をしているうちに時計は午前8時を回り、単冠湾への船の時間が近づいて来ていた

弥 『えっ、お前付いてこないの!?!?』

フ 「付いて行きたいんですけど、今日中に書類終わらせないと幻想郷までついて行けないので」

弥 『あつ、そっちには付いてくるんだ』

……

…

フランを迎えにあきつ丸の家に来た、マンシヨンなんだな

ファイガロによるとあきつ丸の部屋番号は166、って事は一階?、何のためのマンシヨンだよ

インターホンに部屋番号を入れるとやる気のないあきつ丸の声が聞こえて来た

あ 「誰方でありますかあ?」

弥 『俺だよ、弥生だ』

あ 「へえッ?、ま、弥生殿!?、何をしに来たんでありますか?」

弥 『ファイガロから連絡来てなかったか、フランを迎えに来た、今日幻想郷に帰るからな』

あ 「あつ…、そうでありましたな、今開けるんで上がって来て下さい」

あきつ丸がそう言うのと入口の自動ドアが開いた、にしても高価そうなマンシヨンだなエレベーターを待っていると離島が話し掛けてきた、無視すると首が締まるのはどうにかして欲しい

離 「調子ハドウカシラ?」

弥 『今から幻想郷に帰るところです、久しぶりだから楽しみですよ』

離 「ソウ、マア楽シンデクルト良イワ」

離 「モチロン、アノ事忘レナイデネ、ジャ、マタコンド」

弥 『あ、はい』

そうしているうちにエレベーターが下がって来た、意外と遅かったな

あきつ丸に会うのは久しぶりだ、ちよつと緊張すんな

柄にも無く高鳴る鼓動を抑えながらインターホンを鳴らすと

ドタドタと足音を響かせながら普段着のあきつ丸が出て来た、ダサTに身を包んだあ

きつ丸が

ホットパンツはまだ似合うから良いがなんだその（脱走常習犯）って書いてあるシャ

ツは

あ 「弥生殿、久しぶりであります！」

あ 「ささ、上がって上がって」

そう言いつつあきつ丸は俺の腕を引つ張って行き、リビングのテーブルに座らせた

周りを見回すと中々綺麗な部屋で年頃の女子といった様子、可愛らしく所々パステル

カラーを入れている

可愛らしい部屋だなあ、所々銃とか手榴弾が転がってる以外は

弥 『意外と可愛らしい部屋なんだな』

あ 「意外ってなんでありますかあ！、まあ、褒め言葉として受け取っておきます」

あ 「お茶淹れたんでありますよ、どうぞ」

弥 『ん、ありがとな』

あ 「まだ出発まで時間があるんでしよう？、少し喋りましょうよ」

弥 『そうだな、まあ時間には余裕がある』

あ 「出発は何時頃で？」

弥 『確かお昼頃かな、1時とか』

あ 「ほう、なら時間がありますな」

弥 『そうだな』

あ 「…」

弥 『…』

正直、話す内容が無い、あきつ丸もその様で気まずい沈黙が流れている

弥 『車の調子は、どうだ？』

あ 「悪くないですね、トルクもあるし曲がりやすい」

弥 『そうか』

マジかあきつ丸、あの車フロントへビーでアンダーが酷いのに

弥 『これからなんかパーツ付けんの？』

あ 「エンケイのRPO1でも」

弥 『ふーん、他には？』

あ 「今の所無いですかね、中身に今の所不満は無いですし」

あ 「エアロはターボ用のフオグランブ一体のバンパーで理想的ですし」

弥 『つまりは満足なんだな』

あ 「そういう事であります」

弥 『…』

あ 『…』

またもや沈黙が流れている、その上さつきと違い俺にはもう話の種が無い

あきつ丸も話の種を探す為か俺の事を舐めるように見ている、そして視線は胸元に止

まった

あ 「そのネットワークスはなんでありますか？」

弥 『ん？、貰い物』

あ 「正直に言つて良いですか？」

弥 『どうぞ』

あ 「その、趣味があまりよろしく無いと言うか…」

弥 『俺もそう思う』

離 「本人ノ前デ失礼ジャナイカシラ！」

あ 『…』

弥 『…』

正直今、俺は離島が馬鹿なんじゃないかと思ってる、ほら、あきつ丸の目付きが鋭くなつたじゃん

弥 『離島さん…』

離 「ん？、何カシラ、当然ノ事ヲ言ツタダケヨ？」

弥 『はあ…、もう私からは何も言いません、あきつ丸に自分で説明して下さい』

離 「ア…、ヤツチャツタZ E ☆」

弥 『やつちやつたZ E ☆、じゃないでしょう!!?』

離 島棲鬼と漫才の様な掛け合いをしていると、あきつ丸が呆れた様にこちらを見ていた

あ 「弥生殿は人外に良く好かれますなあ」

弥 『心配するとか無いわけ?』

あ 「特に、幻想郷ではしよっちゆうでありましたし」

離 「何ノ話?、気ニナルノダケド」

だ そうして俺達は船の出航時間まで時間を潰す事にした、今からでも船に乗るのが憂鬱

帰郷・船上にて

現在俺はあきつ丸と別れ単冠湾行きの船に乗っている…、フィガロと共にあきつ丸も一緒に行きたかったらしいが、艀装の修理やら強化などで外界に残らなければならぬらしい

そして俺は…、絶賛船酔い中である、これだから乗りたくねえんだよ…

フ 「大丈夫ですか？、お兄様」

弥 『俺の事は良いからフラン見ておいてくれ、どこ行くか分からん』

フ 「仕方ありませんね、了解です」

そう言つてフィガロは小走りでフランの元に向かつて行った

にしても綺麗な船だな、フェリーとは思えない、乗つてる人間もなんか富裕層っぽいし

やはり深海棲艦が出て来てから船旅は富裕層しか出来ない金のかかる物になったのかな

そんな事を考えていると首元のネックレスがガチガチと音を立てて口を動かした

これは何を意味しているんですか？、お腹が減ったんですかね

そう思い近くにあったサラダのレタスを口に近づけて見ると、レタスに嚙り付いたしぼらくあげて見ると3枚ほどで見向きもしなくなつた、ワガママな奴ばかりだな俺の近くは

コ 「誰がワガママですつて？」

弥 『誰も貴女とは言つてません、にしても久しぶりだな』

コ 「切り出すタイミングが無かつただけよ、人の目が気になるし」

弥 『じゃあなんで周りに人が多い今なんだよ』

コ 「貴女の知り合いが居ない時つて事よ」

弥 『そうかい、で、なんか話があるのか？』

コ 「ん？、あるわけないじゃない」

弥 『…』

コ 「久しぶりに話が出来たかっただけよ、それじゃまた」

そう言つてコレットは引つ込んだ、何なのあの胸平さん

コ 「後で覚えとけよ」

弥 『口に出して無いじゃないですかやだー』

コ 「それでも聞こえるのよ！、今日は寝れないと思ひなさい」

弥 『その言い方は語弊が生まれると思ひます』

コ 「まあ良いわ、それじゃ」

そう言つて今度こそコレットは引つ込んだ、夜が怖いねえ

しばらくの間船酔いに耐えていると首元のキモいから声が響いた、周りがうるさくて良かったぜ

離 「ダイブ騒ガシイケド、モウ船ニ乗ッタノカシラ？」

弥 『ええ、船酔いしやすいんで地獄の様ですよ』

離 「ヘエ、才気ノ毒ネ、ソノ割りニ元氣ソウダケド？」

弥 『酔い止め飲んでるんですよ、それでも気持ち悪いって事です』

離 「ソー、可哀想ニ」

弥 『つて言うかこのネックレス物食べるんですね』

離 「口付イテルンダカラ当たり前ジヤナイ」

弥 『ネックレスは普通物を食べません』

離 「ネックレス型ノ生物ダモノ」

弥 『はいはい、私の負けですよ、で、何の用ですか』

離 「エ？、特二用ハ無イワヨ」

離 「ソレジヤアネ」

そう言つて離島は通信を切つた、離島棲鬼との通信途絶！、本当みんな自分勝手だな

全く

そう不平不満を漏らしながらも、少し楽しいと思っっている自分が居た

……

：

このまま2日ぐらいは船に揺られると思うと気が滅入って来た

元々陸上の生き物である人間が空飛ぼうとか海を移動しようとか考えるのが間違いないんだよ

まあ良い、日も沈んで来たし自室に戻るとしよう、そう思い廊下を進んだ

道中には単冠湾の馬鹿提督とか焼鳥製造機の面々が居り、中々痛烈な視線を送って来る

海軍の人間で良い奴だなと思ったの龍田と天龍、後摩耶と金剛さんくらいじゃないか？

あとは俺の事化け物を見る目だしな、あながち間違いないし否定はしないが

地獄の様な回廊を抜けるとフランとファイガロが待つ部屋に着いた、まあまあな感じ？

部屋に入ると既にフランは寝ており、ファイガロが部屋の机で仕事をしていた

書類は1m程あり1日でその量やるの？、ってレベルの厚みがあった

ファイガロはこちらに気がつくど仕事の手を止め、ハイライトの無い目を細め微笑んだ

フ 「おかえりなさい、お兄様♡」

弥 『お、おう』

フ 「浮かない様子ですが大丈夫ですか？」

弥 『船酔いして調子が悪いだけだ、なんて事は無い』

弥 『ちよつと寝る事にするよ、後はよろしくな』

フ 「お任せ下さい、お兄様の頼みとあらば喜んで♪」

弥 『そんじやおやすみ』

俺は寝る間近こう思った、フィガロあいつ今日テンション高くな…？

…

…

久々の精神の部屋、"Wei・er Raum"、なんて言うか本当久々だな

そんな風に半ば感傷に浸っていると遠くから走って来る音が聞こえる

そちらに振り向くととても素晴らしいフォームで飛び蹴りを繰り返しているコレツトがいた

咄嗟にバク転を決め攻撃を避けると俺のいたところにはクレーターが出来ていた

コ 「チツ…、仕留め損ねたか…」

弥 『ちよつとコレツトさん!??、何物騒な事言ってるの!??』

コ 「うるさい！、死に晒せやゴルア！」

弥 『ああ、ムネタイラー 国務長官と呼ばれた事を気にしておられるんですね分かり
ます』

コ 「絶対許さんぞ弥生！」

そう言いコレットはこちらに全速力で走って来た、その表情はまるで般若の様：

危機迫るものを感じ反対側に逃げると右手に炎の刀の様な物を携えたコレットが先
回りしていた

これは一体どう言う事ですか？、なぜ貴女が目の前にいるのに後ろから足音が聞こえ
るんですか？

俺はそんな事を思いながら2人のコレットにボコにされた、2人掛りは勘弁してつ
かあさい…

帰郷・単冠湾

船に揺られ早2日、深海棲艦のせいかな洒落にならない程船の進みが遅かった

しかしそれも今日まで、何故なら今船は単冠湾の港に着いたからだ、長かった…

もう車は船から降ろしてあるし、荷物なら車に全て積んである

フィガロは自分の車に荷物が積みきれなかったのか大半が俺の車に積んである

Figaroのトランクは狭い…、想像以上だったわ

まあMARCHと比べるとは酷だったか、オープントップクーペだし

にしても加賀さんが乗って来たEP82はなんだろう、トムスのフルエアロのあれ

排気音からしてあまりチューンされてないようだが

なんて言うか…、俺のMARCHとキャラ被らないか？、コンパクトカーでフルエア

ロって

そんな事を考えているとフィガロが話し掛けて来た、ペストマスクのせいで表情が分

からん

フ 「どうしたのですか？、またまた考え込んで」

弥 『いや、何でも無い』

フ 「そうですねか…、そういうえば今から行く幻想郷ってどんな所ですか？」

弥 『化物と、妖怪と、悪魔がいる所だな』

俺がこう言うといガ口は意味が分からないとばかりに肩を竦めた

弥 『話によると神様もいるらしい』

フ 「神話とかのお話ですか？」

弥 『まあ行ってみれば分かるよ』

フ 「はあ、まあお兄様が気に入るんだから悪い所では無いのでしようね」

弥 『鎮守府の玄関で立ち話もなんだ、中に入るとしよう』

フ 「そうですね」

俺らはこうして鎮守府に入った、大淀はいつも通り敵対心丸出した

大 「また会いましたね」

弥 『嬉しい限りです』

俺がそう言うとい大淀は苦虫を噛み潰したような表情をした、流石に傷つくぜ

フ 「お兄様、こいつは？」

弥 『ただの知り合い、まあ嫌われているようだがね』

フ 「そうですねか…、大淀と言いましたね貴女、早く私達部屋に連れて行きなさい」

大 「偉そうに…、こちらです」

そう言つて大淀は嫌々俺達を案内した、まあ俺は知つてるんだけど

……

…

まあ知つてはいたが例の窓の無い部屋に連れて行かれた、本当あり得ない

部屋に入るとファイガロはペストマスクを外した、目が死んでいるのはいつも通り

弥ントやらペストマスクやら何世紀の人なのか分からないファッシュンだが

何故か似合っているのは顔が整っているからだろうか、自分の妹を褒めるのも癪だな
ましてまントの下はゴシックロリータ、ほんと貴女いつの人なの？

…何処と無く離島棲姫に似ている気がする、性格も似てるんじゃないか？、多分

フ 「本当今日はお兄様良く考え込んで、どうしたんですか？」

弥 『何でも無いさ、にしてもお前その服似合うな』

俺が柄にも無く褒めてやると、ファイガロは頬を染めこう言つた

フ 「お兄様に褒めて頂き、光栄です」

弥 『そりや良かったよ、にしてもこの部屋暗いな』

フ 「そうですね、まあ窓も無いし仕方ないでしょう」

弥 『ま、フランは寝てるしこのくらいの明るさが良いのかな』

そう言い俺はベットのうえでまるで猫の様に丸まっているフランの頭を撫でた

ふとフィガロの顔を見ると…、味わい深い顔をしてらっしやる、どう言う感情？

フ 「お兄様ってさも当然の様にそう言う事しますよね、…羨ましい」

弥 『お前にもたまにしてるぜ？、お前が先に寝てる時』

フ 「そうなんです、気付きませんでした」

そういつてるフィガロの顔はニヤニヤしていた、表情がコロコロ変わるなあ

…

…

それから数時間、わがままな妹氏は腹が減ったと宣ってきた

だから俺は今車に向かっているわけだ、なんか食う物積んであつた筈…

という訳で車に着いた、リアゲートを開け中を漁っていると背後に気配を感じた

？ 「あら、美味しそうな香りがしますね」

声をする方を見るとそこには加賀さんの色違いがいた、髪型も違うなあ

？ 「少し貰えませんか？」

弥 『ど、どうぞ…』

そう言つて俺がトランクのスルメをあげると千切りもせず黙々と食べていた

大きなスルメをものの数分で食べ終わつた彼女は自販機のお茶で一息つくくと、口を開

いた

？ 「それで貴方は誰なんですか？」

まさかの俺を知らない様だ、俺が忘れてたわけじゃなかったんだな

弥 『誰かも分からないのに食べ物を強請って来たんですか？！』

？ 「ええ、おながが減って居たので」

弥 『そうですか…、私は弥生です、この鎮守府で噂になっているのでは？』

弥 『化け物として』

？ 「あの龍田さんに斬られたって話のですか？」

弥 『その通りです、その化け物は私です』

？ 「噂には聞いていましたが…、中々優しい人なんですね」

弥 『うえ？』

そう聞いて俺は面食らった、初対面の人に褒められれば誰だって驚く

？ 「初対面の私に食べ物に分けてくれるんですから」

弥 『そ、そうですか…』

？ 「そう言えば自己紹介がまだでしたね、私は赤城、加賀さんから噂は聞いていまし

た」

加賀さん…、噂話するタイプには見えないのに、意外

赤 「加賀さんが言うにはそれ程悪い人では無い良かったので話し掛けてみまし

た」

赤 「加賀さんの読みは合っていましたね」

弥 『それは良かった』

俺は皮肉めいてそう言った、すると赤城は少し悲しそうに笑った

赤 「…昔の摩耶に似てますね、直ぐに心を閉ざす所が」

赤城がそう言った頃ハイヒール特有の足音がした、フィガロだな

フ 「お兄様一体いつまで…、その女誰ですか…？」

フィガロは黒いオーラを纏い近づいて来た、一歩間違えればまた監禁されそうだな
その後フィガロへの説明に数時間かかったのはまた別の話

とある日常

夜、隣で寝ているフィガロを起こさない様ベッドを這い出た

俺がベッドから出るとフィガロはウンウンと唸り、寝返りを打って眠り続けている
駐車場とは名ばかりの空き地に置いてある愛車は、俺に気づいたのかエンジンを掛け
てくれた

運転席に乗り込んだ頃、提督のジムニーでギチギチのガレージから摩耶が出てきた

摩 「お？、久々だな、MARCH治ったのか」

弥 『お久しぶりです、スフィアも格納して万全な状態ですよ』

摩 「へえ、なんか他にしたい事ってあるのか？」

弥 『そりやもちろん、車載PCとかボルトオンターボとか』

摩 「まだ馬力上げるのか？、車載PCってどう言う事だ？」

弥 『車にパソコン載ってたらカッコ良くないですか？』

俺がそう言うと摩耶は呆れたようにこう言った

摩 「まあ分からんでも無いけどよ、技術的に出来んのか？」

弥 『分かりませんが、アップルのG3とか言う小さいのもあるぐらいですから』

摩 「ああ、まあそういう事に詳しい知り合い一人居るわ、会ってみるか？」

弥 『私はここでは嫌われています、会っても無駄だと…』

摩 「そいつ頭の中科学やら開発だとかしかなから大丈夫だと思うぜ？」

摩 「まあまあ、行ってみようぜ」

そういつた摩耶は俺の背中を押して来た、こっちの話を聞いてくれよ…

弥 『ちよつと！、押さないで下さいよ！』

摩 「いいからいいから」

俺の話は聞かれない様だ、なんか俺の周り強引な人多いな

…

…

摩耶に連れられ来たのは不思議な研究所の様な所、化学薬品の匂いがキツイ

その真ん中で何故か溶接しているピンク色の髪をした女の子、これが知り合い？

摩 「よう明石、客だぜ」

明 「一体どういう風の吹き回しなんですか…、貴方は巷で噂の？」

弥 『如何にも、私が噂の不死の怪物です』

明 「いやー一度会って見たかったですよ！、噂になる割には地味な外見ですね」

人の子と見るや否やこの言い様、失礼な事だ

弥 『…、摩耶さん、私って地味ですか？』

摩 「こいつズレてるんだ、気にすんな」

明 「で、何の用なんですか？」

摩 「こいつが車載PCが欲しいんだと、お前も前似たような事言つてたから来て見た」

明 「ほう！、中々面白い話じゃないですか！、で、何に積むんですか？」

弥 『MARCHですけど』

明 「車種を言われても分かりませんよ、取り敢えず現物を見にいきましょう」

そう言われた俺は愛車の元に明石を連れて行つた、なんかちよつと不安なんだけど…

明石をMARCHの元に連れて行くと、開口一番にこう言われた

明 「小さい車ですねえ、PCの本体は何処に積みましようか」

そう言われたのが気に食わなかったのか、ミアはエンジンを掛けスロットルをふかした

明 「ひゃー！、…弥生さんなんかしましたか？」

そんな睨まんでも、後でミアはお説教だな

弥 『見ての通りなんもしてないっすよ』

摩 「その車たまに勝手にエンジン掛かるんだよ、どつかの配線ショートしてるん

じゃ無いかな？」

犯人はミアだが…、悪魔なんてこっちの世界じゃ信用されないからな

摩 「中々車高低いし、ホイールアーチ内の配線がさ」

弥 『かも知れないですね、まだ配線上にあげてないんで』

摩耶とその話をしている時、明石はMARCHのあらゆるところを観察して居た

摩 「まあいいや、それで明石、出来そうか？」

明 「出来なくは無いですね！、本体はトランクに乗せてやれば良いですし」

明 「まだ試験段階の液晶タッチパネルにすればキーボードとかマウスも要らないです」

明 「ただ問題は後付け感が凄い物になってしまおうでしょう、メーターフードがもう少し長ければ…」

MARCHのメーターフードは楕円形に近い、確かに液晶パネルは付けにくいだろ…
弥 『後付け感があるのはかつこ悪いですよね…』

早くも車載パソコン計画は暗礁に乗り上げた、カツコ悪かったら意味ないからな

弥 『…』

明 『…』

摩 『…』

摩 「!、コペル ボニート用のを使おう、あれなら長さが足りるはずだ」

沈黙を破った摩耶は、姉妹車のインパネを候補に出した、確かに使えるかも

弥 『そうですね!、だけどどこから持ってきます?』

摩 「私が手配してやるよ、その手の知り合いが多いからな、私は」

知り合いにいるのなら話が早い、お願いしよう

弥 『よろしくお願いしますね』

明 「じゃあこの車、しばらく預かりますね!」

そういった明石は俺の車に乗って何処かへ行ってしまった

せつかく走りに行こうと思ったのに、俺は溜息をつきながらまた部屋に戻った

……

……

部屋に戻るとフィガロはベッドに座っており、少し寝惚けているのかフラフラしている

弥 『オイオイ、大丈夫か?』

フ 「ああ…、お兄様ですか!」

弥 『寝癖がひでえな、そこに座りな、治してやるよ』

フ 「お願いします!」

フィガロを化粧台の前に座らせ髪に櫛を通す、するとさつきまでの寝癖が嘘の様に治った

ここまで素直な髪質なのは羨ましいな、俺も中々サラサラだと思うが

フ 「久々ですね、お兄様に髪をとかして貰うのは」

弥 『最近はお前と一緒に居なかったから当然だろう？、まあ俺が留学とかしてたせいだが』

フ 「あの時の寂しさと言ったら…、何度も言ってますがもう私を置いていかないで下さいね」

鏡に映ったフィガロの顔は寂しげだった、悪い事しちまったな…

弥 『分かった、もう二度と置いて行かない』

フ 「約束ですよ、破ったら承知しませんから…」

そう言ったフィガロの表情は薄く笑っていた、その表情は寒気を感じるものだった

とある日常 2

特に何も無い日が数日ある、今日も何も無い予定だ

車が帰って来ないから全然走りにも行けないし、Figaro借りてまで走りに行く
気ないし

そこら辺歩き回っても視線が不愉快だから必然的に部屋に引き籠もる事になってる
っていうか夜中しか外に出ないから最近陽の光見てないんだけど…、まあいつもと変
わらんね

フランはこつちで出来た友達と遊び行っちゃったし、まあ楽しそうで何よりだよ

そういうばフランがこつちじゃ能力が使えないって愚痴ってたな、俺は使えるのに不
思議

この部屋にある本も全部読んじゃったし、流石に暇って訳だ

弥 『なあフィガロ、暇なんだけど』

フ 「最近それしか言っていないですね、遊んであげたい所ですが仕事を終わらせな
きゃなので」

弥 『風呂でしかこの部屋から出てない、後お手洗い』

フ 「知らないです」

そう言つてフィガロは仕事に戻つてしまった、肝心な時に構つてくれない娘ですこと
 と言う事で部屋から出て来た、MARCHの進行状況を見に行こう

そう思い廊下を歩いてると紙人形が落ちていた、だいたい2、3枚
 なんじやこりやと思ひ拾ひ上げてみるが特に不思議な事は無かつた

誰か陰陽師でも居るのか?、それじや俺は祓われる側に居るな

? 「ちよいちよいちよい、そこの君い、それウチのなんやけどー」

後ろを振り向くと赤い服にサンバイザーをつけた少女が居た、関西の人?

弥 『ん?、ああ、ごめんなきいね』

俺は謝つてその紙人形を返した、すると彼女は俺の顔を覗き込んで来、そして首を傾
 げた

? 「君、誰?」

弥 『弥生つて名前です』

? 「…ああ!、あのあきつ丸の隣に居た人やな!」

? 「そういえばあきつ丸は?」

弥 『今は陸軍省でメンテナンス中ですね、改装するとか何とか』

? 「ふーん、そうなんやな」

弥 『それはそうと貴女は誰?』

? 「ああ、自己紹介がまだやったか、ウチは龍驤や、よろしゅうな!」

弥 『ええ、よろしくお願ひしますね』

フレンドリーな人だなあ、やっぱり関西の人?

……

…

龍驤と話していると中々楽しいげな人と言う事が分かった、ノリも良い

ただ所々遠い目をしていたのが気になる、ここの鎮守府は過去に闇のある人が集まるらしいし言う事だろう

まあ過去を聞くのなんて野暮つてなもんだし聞かないでおこう

龍 「それでさ、元々何処に行くつもりだったん?」

弥 『明石さんに車を預けていまして、進行状況を見に行こうかなと』

龍 「じゃあウチもついて行ってええか?」

弥 『どうぞ?、そんな楽しい物でもないと思いますがね』

俺がそう言うのと龍驤は俺の手を引きながらこう言った

龍 「早く行こう!、時は金なりや!」

そう言った彼女はグイグイと俺は引っ張って行った、元気な子だね

龍驤に手を引かれ来たのは工房の様な部屋、その真ん中には内装をすつかり外された
MARCHが置いてある

車内を覗き込むと内装が外された車内にはコードが張り巡らされており、收拾がつく
のか疑問な程の量になっている

龍 「凄いやな、なにをしようとしてるんや?」

弥 『パソコン積もうとしてるんですよ、私もここまでは思いませんでしたが…』

龍 「パソコンなあ、あんまウチそう言うの分からへんわ」

弥 『メカ音痴でらっしやるんですか?』

龍 「そんなもんや、あ、明石来たで!」

うの そう言うのと龍驤は明石の元に走って行った、明石さんバーナー持って来たけど何に使

明 「あ、弥生さん、車ならまだまだ出来ませんよ?、色々発注してる所です」

弥 『あ、はい、分かりました』

明 「PC本体はG3ベースの物で良いですか?、嫌なら他の物もありますけど」

弥 『それで良いです、元々その予定でしたから』

明 「じゃあそれで行きますね!、もうちよつと待って下さい!」

弥 『費用はどうしましょう?、いくらぐらいになる予定ですか?』

明 「その心配はしなくて良いですよ、提督に請求しますから」

ああ、可哀想な提督、あいつならいっか

弥 『じゃあよろしくお願いしますね』

そう言つてMARCHの方に戻つて行くと龍驤がボンネットを開けていた、何見てんの？

弥 『気になる事でもありました？』

龍 「いや、外見がゴツイからエンジンもかと思つたんや、中身も中々ゴツイの積んでんやな」

龍 「ウチは摩耶と同期なんや、あいつ口を開くと車の話やからな」

龍 「嫌でも覚えるっつーの！、まあ、悪い奴やないから仲良くしてやってや」

弥 『ええ、こつちで車の話出来るのあきつ丸と摩耶さんだけですから』

龍 「ウチも聞いてやるで？、聞いて欲しければやけど」

弥 『ふふつ、ありがとうございますね』

そんな会話をしながら、俺たちは工房を後にした

……

……

龍 「それはそうと敬語辞めてくれない？、堅苦しいんやけど」

弥 『言っておきますけど私とても口が悪いですよ？、だから敬語なんです』

龍 「かまへんかまへん！、ウチの周り口悪いのばっかりやから」

弥 『そうですか…、これで良いか？』

龍 「うん、肩の力が抜けたわ！」

弥 『そっか、そりや良かったよ』

恐らく信用できる人がまた増えた、まあ人間不信な訳じゃないんだけどな

とある日常。 3

又々一週間ほど過ぎた、車の方は今日で完成らしいがどうも不具合が治らないらしい
なんでも奇妙なデータが削除出来ないらしく、今それをなんとかしたいらしい

未使用のパソコンにデータなんか入ってるのか?、インテルぐらいしか入って無さそ
うだがな

にしてもどんな感じになるんだろうか、楽しみだ

そんな事を考えていると首の変なのに通信が入った、またあの人か

離 「久シブリ、元氣シテタカシラ?」

弥 『今元氣をなくしました、お久しぶりです』

離 「ヒドイワネエ、マア良イワ、早速本題ニウツルワネ、今貴方ドコニ居ル?」

弥 『鎮守府です』

離 「ソウヨネ、私達ノコト話テナイワヨネ?」

弥 『もちろん、て言うかずつと貴女聞いてるでしょ?』

離 「ソウダケド、上ガウルサクテネ」

弥 『そつちにも上司がいるんですね、お気の毒様』

弥 『どちらかって言うところの会話聞かれた方がマズイのでは?』

離 「大丈夫、センサーニ反応ハ無イワ」

弥 『これセンサー付いてるんですか!?!?』

離 「エエ、知らナカツタノ?」

弥 『言われてないですもの』

離 「ア、人ガ来ルワ、ソレ ज्या」

弥 『ええ、それじゃ』

離島棲姫との通信が終わってすぐ、部屋には龍田と天龍が入って来た、ノックくらいしなさいよ

天 「よう、なんとなく来たぜ」

弥 『来なくて良いぜ、なんか飲むか?、買ってくるけど』

天 「いや、先に俺らが買ってきたから大丈夫だ、お前の分もあるぞ?」

弥 『気が効くな、紅茶あるか?、じゃなきやコーラ』

龍 「ごめんなさいねえ、コーラしかないわあ」

弥 『じゃあ戴けますかな』

龍田は手に持ったレジ袋からコーラを取り出した、残念ながらZEROだけど

弥 『ありがとな、んで、何の用さ』

龍 「なんとなく来ただけよお？、まあ迷惑なら帰るけど」

弥 『そういう訳じゃないさ、まあ用が無いならそれでも良いよ』

天 「なら良かった、じゃあ遠慮無く居座らせ貰うぜ」

……

……

弥 『別に良いとは言ったけど、いつまで居るつもりだよ？』

今時刻は夕方の5時、朝の11時からずっと居るんだけど

フィガロの奴は提督と話があるとか何とか、帰って来たたらうるさいぞ絶対

天 「今日は特に任務とかもねえからずっと居られるぜ」

龍 「天龍ちゃんと同じく」

弥 『今私は暗に帰れと言ったんですが……』

天 「こんな可愛い女の子2人に帰れってか？、嫌だね」

龍 「天龍ちゃんと同じく」

弥 『龍田さんそれしか言っていないですね、あと可愛いつて自分で言わない』

そんな話をしているのがノックされた、扉を開くとそこには摩耶と龍驤が居た、レジ

袋持って

龍 「うーい、来たでー！」

摩 「先客がいるみたいだけどな、よう天龍、龍田」

龍 「あらく？、貴女達弥生と知り合いだっただの？」

龍 「この前たまたま会うてなあ、それで知り合いになったと言うわけや」

摩 「私も似たようなもんだ、まあ私はだいたい前だけだな」

龍 「私は知っての通り弥生を斬り付けちやつたのよお、あの時はごめんなさいねえ」

天 「俺は喧嘩吹っ掛けてみたんだけどよ、普通にやられちまつたつて訳」

弥 『やーい天龍ダサい』

天 「うるせえな！、そういうお前は龍田にやられたじゃねえか！」

龍 「うふふ、仲良いわねえ」

そんなこんなでしばらくは部屋がごった返していた、その後大淀さんに注意されたのは別の話

……

：

しばらくして天龍、龍田は帰り龍驤と摩耶が残った、散々騒いだから騒ぎ疲れたご様

子

龍 「そうそう、明石曰くMARCH出来上がったらしいで」

弥 『見に行こうぜ』

摩 「そう言うと思ったわ、行くか」

明石の工房に行くくとすつかり内装が取り付けられたMARCHが置いてあり、車内では明石が新設されたディスプレイと睨めっこしていた

明 「やっぱり消えない…、あ、来ましたか」

明 「謎の消えないデータがあるんですが…、それ以外は完成しました！」

弥 『ありがとうございます、そのデータになんかデメリットはありませんか？』

明 「無いですけどなんというか不気味で、消しても消しても復活して来るんですよ」
弥 『確かに不気味ですが…、何でしょうね』

俺がそう言った瞬間MARCHのエンジンが掛かった、今日もミアは悪戯つ子です

明 「この車…、私が作業してる時もたまたまエンジンが掛かるんですよ、配線を見てもおかしな所は無いの…」

弥 『不思議ですね…』

明 「まあ、データが消えないのとエンジンが勝手に掛かる以外は良好ですよ！、もう引き取りますか？」

弥 『そうですね、ありがとうございます』

明 「たまにこの工房に来て下さいね！、まだβ版だからバグるかも知れないですし

！」

弥 『じゃあ摩耶さん、龍驤、戻りましょう』

俺がそう言うのと二人は頷きMARCHの車内に入って行った

弥 『乗るんですか？』

龍 「もちろんや、ウチ達を歩きで帰せるつもりだったんか？」

弥 『いやそういう訳では…、分かりました』

摩 「ついでに峠でお前の走り見せてくれよ」

俺は頷くと運転席に乗り込んだ、後部座席に龍驤、隣に摩耶と言うなんとも言えない状態で峠に赴く事になった

か 忌まわしきあの峠、走る毎になにかしら壊れて来たが今回は無事に終わるんだろう

羊の皮を被った狼

この峠はあまり全長が長くはないが高低差が激しく、ヘアピンやS字コーナーが多い。その上道の状態も悪くたださえ狭い道がさらに狭くなっている。

左右1mは枯葉や砂で滑り易く、夜は気付かなかったが路肩には側溝がある、溝走りが出来そうだ。

イメージは埼玉の正丸峠と群馬の榛名山を足して二で割った様な感じだな。

勾配は第一いろは坂に近いものがある、お陰でSR20であっても登るのがキツイ。龍「流石に3人乗っていると馬力的にキツイんか？」

弥『150馬力もあれば十分だと思っただけだな、上りは苦手』

摩「車重が軽いから下りは暴力的な走りになりそうだけだな」

弥『フロントヘビーだからそこまでじゃないと思うが、まああきつ丸に散々文句言われたけど』

弥「さて、頂上に着いたぜ」

峠の頂上に着くと前と変わらなず寂れていたが、1台車が止まっていた。

トヨタSTARLET EP82、提督が買って来たセカンドカーと聞いた、まあ加

賀さんが良く使っているらしいが

EP82の車内には加賀さんが眠っており、起こすのは憚られる、何でこんな所で？

龍 「お、提督んとこのSTARLETやん、K11のライバルやな」

弥 『あの車の中身よるな、並みのエンジンなら負ける気がしないね』

摩 「おい弥生、あれ見ろよ…」

俺は摩耶にそう言われSTARLETの方を見ると…、加賀さんがこつちを睨んでい
るんですけど

口の動きから察するに…「頭にきました」とな？、頭に来られましたも

加賀さんはそう言うのとセルを回しエンジンに火を入れた、ブローオフバルブの作動音
が度々する事からターボ車なのだろう

MARCHの後ろにくっ付くとパッシングして早く行けと急かしてくる、MARCH
だからって舐めてかかっているのかしら

摩 「加賀って中々好戦的なんだなあ…、で、やんのか？」

弥 『もちろん、MARCHがSTARLETに負ける訳には行かない』

K11 MARCH vs EP82 STARLET、コンパクトカー同士の戦
いの火蓋が切って落とされた

…
…
…

：

走り始めて数分、思っていたより加賀さんが上手くて驚いている

グリップ走行の基本は全て出来ている、本当に初心者か？

それに俺の走り方を見てタックインも習得した様だ、そろそろ引き離さないとまずいな

左にキツイコーナーに差し掛かりブレーキを踏んだ、同時にギアを2ndに入れフロントに荷重を掛ける

次に右にハンドルを切り空かさず左に切る、俗に言うフェイントモーションだ

ノーズが左を向いたらサイドブレーキを小刻みに引きリアタイヤを滑らせアンダーを殺す

コーナーの出口に鼻先が向いたらギアをDに戻しアクセルを踏み込めばコーナを脱出する事になる

しかしここは峠、サーキットの様に休めるようなストレートも無くすぐに次のヘアピンがやってくる

車体を左に振りすぐさま右に切りアクセルを抜く、タックインの力に任せコーナを抜けて行く

そんなヘアピンを3つ抜ける頃には既にコツを掴んだ加賀の車はまたリアガラスに

張り付いていた

ふと助手席を盗み見ると摩耶が顔を白くしており、バックミラー越しの龍驤は青くなっていた

まあいいや、そう思い焦点をリアガラスに向けると付かず離れず後ろにくつついて来ている

峠には法則性があり基本的にはヘアピンの後にはストレートが待っている

しかしここは心が休まらないふにやふにやした左右のクラंकがある

遠心力で地面から剥がされそうになる車体をブレーキングやタックインでなんとか地面に押し付けまたヘアピンが近付いて来た、アレやつてみるか

アクセルを早いうちに抜いてエンジンブレーキをかけ、内側の縁石にぶつける勢いでハンドルを切る

片方のタイヤが下に落ちる感覚を感じすぐさまアクセルを踏み込んだ

すると通常では有り得ないジェットコースターの様な気持ちの悪いコーナリングを見せた

コーナーの出口でハンドルを左に切り側溝から引つ張り出した

ふとメーターを見るとコーナー脱出時のスピードが+20kmぐらいだ、素晴らしいバックミラーから加賀さんのSTARLETはもう消えている

見えなくなったSTARLETのブローオフバルブの作動音がひときわ甲高く峠に響き渡り、バトルの終了をこちらに知らせて来ていた

……

…

麓に降りて来る頃には摩耶は元氣を取り戻していた、龍驤は未だ青白い

摩 「久々に怖え運転だったな…、何回かバンパー擦ってたし」

弥 『そんなに怖かったか？』

摩 「怖ええよ！、龍驤が酔っちまうぐらいにな！」

摩 「てか龍驤大丈夫かよ？」

龍 「まだ気分は戻らへん、ウプツ…、気持ち悪い……」

弥 『あと少しで鎮守府に着くからそれまで待つてくれ』

程なく鎮守府の駐車場に車を止め、龍驤を外に出した

龍驤はフラフラと鎮守府の扉に歩いて行った

摩 「見てらんないぜ…、私も行ってくる、じゃあな！」

外に出ていった龍驤を介抱する為摩耶も外に出て行ったからぼっちになってしまったのだった

幻想郷 〱 永夜異変

永夜異変の始まり

フ 「おはようございます、お兄様」

朝起きると目の前にフィガロが居た、顔近えよ

昨日は加賀さんと走ってあの後すぐに寝たんだつたな、やる事無かつたしにしても良く寝たんだな、夕方ぐらいに寝たのに翌朝つて…

フ 「早く布団から出て下さい、今日出発でしょう？」

弥 『ん？、ああ、そうだったな』

弥 『フランは準備出来てるか？』

フ 「今駆逐艦に挨拶に行ってます」

弥 『子供つてすぐに仲良くなるよな』

フ 「そうですね、まあ例外も居ますが…」

弥 『幼い頃のお前な、ずっと俺にくっついて来やがって』

フ 「あの頃からお兄様が好きだったんですよ」

弥 『はいはい、それはそうとお前は準備出来たのか？』

フ 「全て車の中に」

弥 『じゃあ行こうか』

幻想郷に帰る為、知り合いに挨拶に行く事にした

……

：

挨拶を終わらせよいよ帰る事にした、今は車で峠を上がっている、時刻は午前11時だ

広場に着きガレージを開けると中は歪んだ景色が広がっている

フ 「話には聞いていましたが…、これはどうなっているんですか？」

弥 『知らない、時空を歪ませてるんじゃないか？』

フ 「どうやって？」

弥 『知らない』

フ 「…大丈夫なんですか？」

弥 『多分』

フ 「不安なんですけど…」

弥 『大丈夫だと思うんだけどなあ、こつちに来れたし、なあフラン？』

フ 「大丈夫だよ！、多分…」

弥 『ただここ通ると車体が凍り付くから気をつける様に、幌開けると多分死ぬな』

フ 「どう言う事なんですかそれ、後フランは多分つて付けるのやめて」

弥 『まあとりあえず行きましよう』

俺はそう言つて車に乗り込んだ、フランは助手席である

バックミラー越しにファイガロを見ると幌が閉まつてるかしきりに確認した後車に乗り込んだ

二台連なる様にゲートを潜ると三度のソニックブームの破裂音がしフロントシールドが凍り付き、

エンジンが急速に冷やされたためエンジンが止まった

直ぐにギアをNに入れつつブレーキを掛け停車した、やっぱり凍り付いたか

フランにアイコンタクトして頷いた後、満を辞してドアを開ける事にした、心無しか外が暗い

バリバリと氷が割れる音がしドアが開いた、空を見ると夜の空である…?、意味が分からない

取り敢えずファイガロの元に行きドアノブに手を掛けた

弥 『つつめてえええ!!?』

フ 「何!、大丈夫!!?」

弥 『取り敢えず大丈夫だ…、手が冷たくなった』

俺が冷たさに手を痛めているとパキパキと氷が割れフィガロが出て来た

フ 「お兄様！、大丈夫ですか?!？」

弥 『手が痛い…、カイロ持っていない?』

フ 「残念ながら…、私が温めましょうか?」

弥 『やめとく…、それより空が暗いのが問題さね』

フ 「そのうえあの月偽物だよ、妖力を感じないし」

弥 『ちよつと何言ってるのか分からない』

フ 「今超イラツときた!、て言うか分からないの?」

弥 『妖怪じゃないんで、何も分かりません』

フ 「そ、取り敢えず紅魔館に帰りましょ?、お姉様達に聞くのが一番早いわ」

フランはそう言つて一足先に氷が溶けかけているMARCHに乗り込んだ

フ 「だいたい分かりましたが、紅魔館つて何処ですか?」

弥 『今から行くから付いて来てくれ、エンジン掛かるか?』

フ 「エンジンならG C 13に換装してあるんで大丈夫でしょう、多分」

弥 『何を根拠に言ってるか分からないけど…、まあ付いて来てくれ』

フ 「心配しなくてもどこまでも付いて行くつもりです」

弥 『そうかい…、好きにしてくれ』

ファイガ口と別れ車に乗り込んだ、セルを2、3回回すとエンジンが掛かりフロアが揺れ出した

ハザードをつけ合図を後ろに送ると後ろから2回パッシングして来た、出発だ

…

…

2台連なつて走っているとカバックミラーに空飛ぶ魔法使いが現れた、魔理沙か並走して来た魔理沙は窓を下げると合図を送つて来た、なんだなんだ

パワーウインドのボタンを押し窓を下げる、少し氷が残っているのか動きが悪い

魔 「よう！、おかえりだぜ！」

弥 『ん、ただいま』

魔 「見れば分かると思うが今異変解決中だ！、どんな異変が知りたいだろ？」

弥 『もちろん、どんな異変だ？』

魔 「夜が終わらない！」

弥 『は？』

魔 「夜が終わらないんだよ！、月も偽物らしい！」

魔 「今は迷いの竹林に行く事になってる！、あつちで霊夢達とも合流する予定だ！」

魔 「お前も来るだろ？」

弥 『了解！、しばらくしたら合流する！』

魔 「分かった！、早く来ないと解決しちゃうからな！」

そう言つて魔理沙は人里方面に飛んで行つた、あつちに迷いの竹林があるのね
紅魔館に帰ると珍しく美鈴が起きていた、まあ異変の最中だからか

紅 「ああ、弥生さん！、お久しぶりです！」

紅 「それに妹様！、外界はどうでした？」

フ 「楽しかったよ！、友達も出来たし！」

紅 「それは何よりです！、それはそうと後ろの車は何ですか？、弥生さん」

弥 『俺の妹です、愛想が悪いですがご勘弁を』

紅 「妹さん居たんですね、それじゃあ中にお入り下さい」

美鈴がそう言うのと、大層大きな門が音を立てて開いた、久々の紅魔館だ

蓬萊人との戦い

レミリアの部屋に行き帰ってきた事を知らせ、直ぐに迷いの竹林に行く事にした。そして今はフィガロと移動中である、あきつ丸みたいな賑やかしが居ないと淋しいもんだ。

弥 『で、ミア、喋れるんだろ?』

俺がそう言うのとインパネの液晶に少女が映った、デフォルトされた二頭身のキャラみたいなのが

ミ 「あれ、バレちゃった☒」

弥 『消えないデータって聞いた時から気付いてた』

ミ 「うーん、ビツクリさせよう思ってたのに、ざんねーん」

ミ 「まあ取り敢えず改めて自己紹介しとくね、僕はミア、悪魔さ」

ミ 「ああ、別に君は自己紹介しなくて良いよ、もう何回も聞いているから」

ミアは呆れた様にそう言った、まああきつ丸との会話で嫌という程聞いているからだろうな

弥 『ん、分かった』

弥 『それはそうと、ここら辺一帯の地図を表示出来るか?』

ミ 「もちろん!、悪魔に不可能は無い……!」

程なくしてモニターに地図が表示された、地区の名も表示されており分かりやすいふむふむ、後1キロ程走ると着く様だ

……

…

竹林に着き車を止めた、周りを見回すが何も無い、それどころか人里が無くなっていく始末である

えーつと…、ん?、意味が分からないよ俺には

俺がこつちに居ない間になんかあったのか?、何?、移転?

この疑問を共有する相手も今は居ない、フィガロは一足先に竹林に入って行つたしそれとも妖怪に襲われて壊滅したか?、それにしても綺麗にまっさら過ぎるか

? 「よう、人里が無くつてビックリしたのか?、お前」

いきなり背後から声を掛けられた俺は、腰に付けたホルスターからC96を取り出し相手に向けた

そこには白い髪に大きなリボン、赤いモンペの娘が居た

? 「お前らが紅魔館からやって来たのは知っている、精々人里の人間を襲うつもり

だったんだろ?」

? 「それに私にそんな物向けたって無駄だ、私は死なない」

弥 『お生憎様ですね、これは対妖怪弾です、当たり所にもよりますが鬼ですら一撃で死ぬ計算ですよ』

弥 『それに、私達紅魔館の面々はそんな低俗な事はしません』

? 「どうだかな、私が信用出来る妖怪は一人だけだ」

? 「生憎だがそれでも私は死なない、死ねない体だからな」

弥 『それが本当か試してみますか?』

? 「その瞬間お前は焼け死ぬ事になるぞ?」

弥 『私は死ぬ事が無いですよ、死ねない体ですから』

俺がそう言うのと彼女は少しうろたえ、そしてニヤリと笑った

? 「それが嘘でお前が死んでも、私は責任取らないからな!」

彼女はそう叫び、彼女の体から炎が上がった、戦いの始まりだ
彼女はその後舞い上がり、俺の周りに火の玉を撃ち出して来た
俺も二、三発撃ち込み直ぐに近くにあった小屋に隠れ今に至る
? 「早く出て来いよ!、愉しめないじゃないか」

遮蔽物から少し顔を出すと上空にはまるで火の鳥の様に羽ばたく彼女が見えた、どう

にかして叩き落とさなければ

物陰から9 m 弾を撃ち込むが纏っている火によって溶かされ、かすり傷すら与えられてない

？ 「お前が来ないならこっちから行くぞ？」

完全にあちらは油断している、無理もないな

俺は腰につけた手榴弾に手を掛け、ピンを抜いた

遮蔽物から身体を半分出し相手方に投げ物陰に隠れた、程なく凄まじい轟音と光が彼女を襲った

周囲を覆っていた熱気が弱くなり、炎特有の橙色の光が消えた

？ 「アアアアア！！？、くそッ何も見えねえエエ！！？」

ドサツ、と重たい物が落ちる様な音がした、そちらに足を向けると目を押さえのたうち回る先の少女がいた

弥 『さつきまでの余裕はどこに行きました？、無様ですね』

弥 『降参しますか？』

？ 「クソッ！、誰がお前なんか！！？」

のたうち回りながらも未だこちらに敵意を向けるか、仕方がない

弥 『残念です、Gute Baye』

のたうち回る彼女の頭に標準を合わせ、引き金を引いた

……

…

しかしスキマが開き弾丸は中に吸い込まれて来た

周りを見回すと紫と霊夢が半ば怯えた様な顔をしていた

霊 「あんた、人を殺そうってのはどう言う見よ?」

弥 『彼女が攻撃して来たから仕返した、ただそれだけの事です』

弥 『ましてやこの人は蓬萊人、死んだところで直ぐに生き返りますし』

霊 「御託は良いから、取り敢えずそいつに案内して貰わないと黒幕に辿り着けない

のよ」

紫 「それじゃ妹紅、早く連れてってくれるかしら?」

そう言った紫は俺の足元に転がっていた妹紅に手を貸して立ち上がらせた

妹 「…ああ、分かったよ」

紫 「それじゃあ行きましょう」

そう言って俺たちは竹林に入って行った

……

…

中に入つて行く道中、妹紅と呼ばれた少女に話し掛けられた

妹 「…なあ」

弥 『何ですか?』

妹 「ああ、お前は何処で蓬莱の薬を手に入れた?」

弥 『私の能力は作る程度の能力、後は説明しなくても分かりますね?』

妹 「何でお前はわざわざこの生地獄に足を踏み入れた?」

弥 『一度こちらの世界に来る時死んだからです、その時の恐怖に耐えられなかったんですよ』

俺がそう言うのと前を歩いていた霊夢と紫が振り向いた

紫 「その話、詳しく聞かせてくれない?」

弥 『今はまだ嫌です、私の中ではまだトラウマですから』

弥 『滅びし町の記憶…、まだ思い出したく無いんです』

妹 「そうか…、悪かったな」

しばらく沈黙が続き、和風の館に着いた、ここに黒幕がいるのか

周りには魔理沙やアリス、咲夜がいた、これだけ人がいれば力負けする事も無いだろう

永夜異変 ㄱ 永遠亭内部

館の周りには魔理沙やら咲夜などがおり、張り詰めた緊迫感を放っている

魔理沙がいつにも無く不敵な笑みを浮かべ、レミリアの隣で咲夜はキリリと凜とした
雰囲気を放って居る

一足先に竹林に入って行ったファイガ口は竹に寄りかかり妖夢と話して居る、妖夢少し
怯えてんぞ

恐らく幻想郷代表者の霊夢と紫を待つて居たのだろう、珍しく協調性があるな

紫 「待たせたわね、行きましようか」

魔 「つたく、珍しく霊夢達遅かったなあ？」

弥 「こいつが余計な事してたのよ」

そう言った霊夢は俺を指差した、自ずと皆はこちらを見てくる

そして皆やれやれと言った様子で首を振った、何だよ、なんかイラつとするんだけど

魔 「まあ取り敢えず揃ったな、行くとしようぜ！」

？ 「あんまり勝手に決めないでくれないかしら？、こつちにも都合があるのよ」

皆が一斉に振り向くと、ブレザーにうさ耳という奇抜なファッションの女性が居た

目は紅く輝き、能力持ちである事を暗示している

弥 『貴女も能力持ちですか…』

俺はそう言つて目を紅く光らせた、向こうと違い俺は古い電球の様に揺らいでいるが

？ 「貴方まさか…、月の民ツ!?？」

弥 『何を言っているのか分かりませんが…、邪魔をするなら排除しますよ』

？ 「私達を連れ戻しに来たの？、それとも…、まあ良いわ、ここで倒すツ！」

俺は腰からC96を、あちらは手を拳銃の形にした、まあこちらの人達は弾幕か

しかし予期せぬ形で対戦は中止された、割り込む形で妖夢が入つて来たのだ

魂 「ここは私が、貴方は妹さんについて行つてあげて下さい」

魂 「あの人はまだこちらに慣れてない、さあ早く！」

んー、そこまで大ごとじゃないよ？、そこまであいつ弱く無いし

フ 「さあ、お兄様早く！」

フィガロは俺の手を引き館に上がり込んだ、まあ妖夢に任せれば何とかなるだろう

…

…

フ 「こっちはあまり平和では無い様ですね」

弥 『それでも無いぞ、偶々今日異変だっただけで』

話しながら廊下を歩いているが、先に入った魔理沙とかの気配が感じられない中は薄暗くフラッシュライトを左手に持ち銃を構えながら進んで行った外見からは想像出来ない程中は広く、未だ手掛かりは掴めていない

フ 「…おかしくないですか?、外観からはあり得ないほど広いですよ」

弥 『今俺は狐に化かされた気分だよ』

そうして終わりの見えない廊下を歩いていると、コレットが話しかけて来た

コ 「お久しぶり、今良いかしら」

弥 『どうした、久しぶりじゃ無いか』

コ 「私達の能力の研究してたのよ、面白い事に気付いたわ」

弥 『と、言うとは?』

コ 「私達の能力は作る力、形の無いものも作れるの」

弥 『つまりは?』

コ 「能力をコピーする事が出来るのよ!!?」

弥 『ん?、コピー?』

弥 『コピーのみ?』

コ 「ええ、それもその能力を使っている時を見るしか無いわ」

コ 「だけど便利でしょ?」

弥 『多分な、今度適当な人の能力コピーして使ってみよ』

そうしてコレットは引っ込んで行った、結局報告だったのね

……

：

コレットに言われた能力の応用について考えていると、ファイガロに話し掛けられた

フ 「何をブツブツ言ってるんですか？」

弥 『？、何でも無い』

フ 「そうですか…、あ、なんか突き当たりましたよ」

ファイガロから目を離し前を見ると襖があり、開けて下さいと言わんばかりの隙間がある

隙間から覗いてみると銀髪で特徴的な服を着た女子がおり、そっぽを向いている

襖をそつと開け銃を向けつつ近づくと、彼女はあらぬ方向を向きながら口を開いた

？ 「貴方が噂の殿方？」

弥 『いつ噂になったのか知りませんが…、貴女がこの異変の首謀者ですか？』

回転椅子に座った彼女はクルリとこちらを向いた、幻想郷の人って容姿端麗ね

？ 「そうかも知れないし、そうじゃ無いかも知れない、真相は自分の手で手に入れる

ものよ？」

弥 『そうですね、まあ知った事では無いですし、私はあくまで傍観者として来ただけですから』

？ 「そう、野次馬って事ね、なら銃を下ろしてくれませんか？」

フ 「下ろす理由が見当たらないんですが、下ろした瞬間に貴女が襲ってくるかも知れないですし」

？ 「逆に言えば襲う理由が無いわ、野次馬を襲う理由は無いでしょう？」

しばらく双方は均衡状態になり、やがてフィガロが銃を下ろした

俺も銃をホルスターに収め、戦闘状態を解いた

部屋の中は病院の診察室の様になっており、薬品棚の中にはペニシリン等薬もあるにしてもこっちにペニシリンあるんだな、てつきり気合いと根性で治すのかと思ってたわ

レントゲン写真の様な物もあるが外界と同じメカニズムかは分からない

人里の開発ぶりから時代的には江戸時代位の水準だが、整理された棚の中の薬品や医療器具の水準は現代医学と同じぐらい進歩しているようだ、メスの刃が綺麗だしな

？ 「その椅子に座ってくれるかしら」

弥 『はい、フィガロ、後ろから覆い被さらないで』

椅子に座った俺の頭に後ろから顎を乗せるような形でフィガロは覆い被さってきた

フ 「椅子は一つしか無いんですよ？、お兄様が先に座った以上こうしないと楽に話が聞けません」

弥 『そうかい…、もう何も言わぬ』

？ 「いちやいちやしてる所悪いんだけど、話をして良いかしら？」

弥 『すいません…、どうぞ』

そうして彼女の異変を起こした理由の説明が始まった、なんか話長そうだな

永夜異変の終わり、新生活の始まり

あの後直ぐに霊夢達が来て今は弾幕ごっこして居る、丁度話について行けなくなった所だったし好都合だ

さすが学者と言った所で話が長かった、お陰様で話の半分しか覚えてない
だけどフィガロは興味津々に聞いて居たな、昔から成績優秀なだけある

そして今フィガロは魔理沙に詰め寄っているのだった、発端は魔理沙が俺に話し掛けた事にある

フ 「貴女はお兄様の何なんですか?、殺しますよ?、え?」

魔 「え、いや、ちよつと落ち着けよ、な?」

フ 「落ち着けですって?、私の愛しいお兄様に変な虫が着いたら困るんですよ」

魔 「いや、ただの友達だって、だから落ち着いてくれ」

フ 「そうですか?、変な真似したら貴女の命はないですから、分かりましたね?」

見てられないな、そう思い俺は魔理沙に助け船を出してやる事にした

弥 『まあ、フィガロ、その辺にしといてやってくれ、で、何の用だ?、魔理沙』

魔 「いや?、そのフィガロ?、とか言う奴とはどう言う関係なのかと思つてな、まあ、

大体分かったが」

弥 『お前の予想どおり俺の妹だ、中島フィガロって言うんだ』

魔 「凄いな前だなおい、お前と違って横文字だし」

弥 『俺の名前は父親が、他は母親が付けたんだ、母がドイツって言う外国の人間だから横文字なのさ』

魔 「へえ、外界は親の人種で名前が種類が変わるのか、洋風か和風に」

フ 「話は終わりました？、ならお兄様、行きましよう？」

弥 『ん、じゃあ魔理沙、また今度』

魔 「ん、ああ、じゃあな！」

い
 そう言って俺たちは部屋を離れた、最早この異変は解決したと同じ、居ても意味はな

そう思い俺は紅魔館に帰る事にした、久々にゆっくりと眠れそうだ

……

……

車に戻りエンジンを掛け、サイドブレーキを戻した、後ろには妹の Figaro が付いて来ている

二台連なり走っているとV型8気筒の重い音が何処からともなく聞こえて来た

しばらくスローダウンして様子を見るとF i g a r oの後ろに丸目四灯のヘッドライトが見えた

しかし前回とは違い音楽も流して居なければ追突もして来ない、しばらく待つてみるするとウインカーを点灯させF i g a r oを抜いた後M A R C Hに並んで来た

しばし待つてみる、特に襲つてくる様子も無く只々並走してくる、意味が分からない
弥 『なあミア、隣のf u r y何がしたいんだ?』

ミ 「うーん、彼女は君に着いて行きたいんだつてさ、身寄りが無いんだつて」
弥 『知らないし、どつちかと言えばレミアアに言うべきだろそれ』

ミ 「なにになに?、ああ、美鈴に門前払い食らったんだつて」
弥 『あいつ車相手に勝つたの?!?、すげえなおい』

ミ 「で、ついに行つて良いのかしら?、だつてさ」
弥 『勝手にすれば、つて言つておいて』

ミ 「りよーかい」
そう言うつとf u r yはフィガロの後ろに戻つた、やっぱボディサイズデカイな、派手

な色と相まつて目立つ

ミ 「あんまりそう言う事考えない方が良いよ、悪魔は人の心が読めるんだから」

ミ 「まして相手は車とはいえ女の子だよ?、体がデカイつて言われるのは傷付くと

思うし」

弥 『そんな能力あるん？、そんな事で傷付くん？』

俺がそう言うのと、後ろの f u r y がパッシングして来た、分かるんですねごめんなさい

弥 『そう言えば彼女の名前は？』

ミ 「クリステインだつてさ」

弥 『へえ〜』

ミ 「無関心すぎるでしょ…」

そんな話をしつつ紅魔館を目指して走り続けた、空を見上げると異変現場から紅魔館に帰るレミリアと咲夜さんが見えた、空の方がやはり速いのか…

…

…

しばらく御世辞にも整備されているとは言い難い道をひた走り、紅魔館に着いた
 どうやら悪魔同士なら話を通じる様だ、クリステインは満を辞してレミリアに接触
 する事が出来た

しばらくその様子を見て居たがさっぱり分からない、まあ良いか

そして今俺は自室に居てC96の分解をしているのだが…、ファイガロがくっついてき

てウザい

椅子に座っている俺に覆い被さる様に抱き付き、肩から顔を覗かせて居る様な感じ言わずもがな胸が当たるのだが…、ちっさい、体を昔から鍛えて居た影響かしらねそのおかげで身長もちっさいし、確かどっちかは大きくなるんだつたよな？

まあその事を言うところのまま首絞められるし、お口チャックの方針でどうぞフ「バレてますよお兄様、胸小さいと思つてますよね？」

弥『何言つてんのか分からない、と言うか自覚あるのかよ』

フ「プロレスゴツコしまししようお兄様、チョークスリーパーとかどうです？」

弥『やるわけ…ぐええええええ!!?』

細い腕が首に巻き付き締め上げてきた、その細さからは想像出来ない程力が強い

フ「反省しました？、女子にそういう事言うところ言う目に遭うんです」

フ「まあ、私以外の女とこんな話したら許しませんけどね」

そう言つてフィガロは更に腕に力を込めた、いや、これ以上はいけない！

弥『分かった、分かったから!!?、ギブ、ギブアツプ!!?』

俺がそう言うのとフィガロは技を解いてくれた、まだ抱き付いたままだがな

フ「よし、分かったなら良いのです、あ、ちなみに、お兄様と同室で良いんですか？」

弥『ああ、多分そうなるな、あきつ丸の時もそうだったし』

フ 「は？」

弥 『ん？』

フ 「あきつ丸もお兄様と同じ部屋に居たんですか？」

ファイガロの顔に影が出来た、それに伴い後ろに黒いオーラが：

弥 『あ』

フ 「お兄様」

弥 『はい』

フ 「詳しく聞かせてくれますよね？」

弥 『はい…』

ファイガロは和かに笑ってそう言った、その後修羅場になったのは言うまでも無い

向日葵畑の恐怖

幻想郷に戻って来て1日経った頃、咲夜さんから手紙を手渡された

差出人は幽香、思い出せば週一で来いと言われている物を3週間はすっぽかしている
ヤバイのは火を見るよりも明らかだ、手紙を見ても中々過激な事が書いてある

向日葵畑の近くでエンジン音を立てようものなら再起不能になる位ブチのめされそ
うだ

だけどこれ以上引き延ばせばそれこそ消し炭になるだろう、まあ生き返るが

ああ、八方塞がりとは正にこの事、今すぐ行って召されるか、先延ばしで消し炭にな
るか

しばらく悩んだ俺は…、召される事にした、さあ死に行きましょう

玄関から出て車に乗り込み、向日葵畑に向かい車を走らせた

…

…

フィガロには置き手紙を残し向日葵畑に着いた、周りを見回したが幽香らしき人影は
いなかっただ

しばらく探した後、今日は居ないのだろうという答えに至り家路につこうとMARRC
Hのドアを開けたその時

肩に手を置かれた、影は見覚えのある日傘を差しており俺は冷や汗ダラダラである

幽 「久しぶりねえ、人との約束をすっぽかして何処に行っていたのかしらあ?」

肩に置かれた手に力が入り、肩に食い込んで行く、とても痛い金縛りの様に体が動かない

幽 「私あまり我慢強くないのよ、出来れば早く理由を教えて欲しいわねえ?」

蛇に睨まれた蛙とはこの事を言うのだろう、これは一回死ぬぐらいじゃ済まないんじゃないかなあ?

弥 『話が長くなりますが…、如何致しましょう…?』

幽 「…良いわ、中で話しましょう?、ウフフ…」

幽香はそう言つて家の中に入って行つた、正直逃げちまいたいです

幽 「早く来なさい?、私の気が変わらないうちにね?」

逃げたら逃げたで死ぬなこれ、さて、怖いけど行きましょう

古の大戦で桜花に乗る人間はこんな気分だったのかしら、そう思う程の絶望感だ
座り心地の良いソファに座っていると言うのにくつろぐことが出来ない

その恐怖の種になっている幽香は自分の焼いたクッキーに舌鼓を打っている、幸せそ

うで何よりです

しかしこの人はお菓子作りが上手だ、きつと料理も美味しいのだろう、きつと

その事を褒めるといつも照れ臭そうに肩を叩いてくる、可愛らしい、威力は可愛くないが

幽 「ねえ、今日のお菓子は美味しくないのかしら？、全然食べてくれないけど…」

打って変わって先程のオーラは無くなり、悲しそうなトーンでそう聞いて来た

弥 『いえ…、そう言う事では無いんですが…』

幽 「そう、なら良いわ」

言い方こそ冷たいが、嬉しそうにニヤニヤしている、こういう所は女の子なんだなあ

幽 「で、何で最近来なかったのかしらあ？」

さつきまでの和やかなムードは空虚へと消え去り、緊迫とした空気が張り詰めていた

弥 『ちよつと外界に…行って来たんです』

幽 「連絡も無しに？」

弥 『…忘れてたんです』

正直にそう言うのと幽香はにつこりと笑った、もうそれはにつこりと、とつても恐ろし

い

だって目元に影が掛かっているんですよ、黒い靄が後ろにかかっているし

幽 「忘れてた、ですって…?」

幽 「一生忘れられない様にしてやろうかしらあ?」

弥 『すんませんでした』

良く考えたら何故俺は怒られてるんだろ?、別に俺が何処かに行こうと俺の勝手じゃんか

まあそんな事言えば消し炭になるだろうからお口チャックだけど

幽 「はあ…、まあ私がとやかく言う事でも無いわね、一緒に住んでるわけでもないし」

幽香は寂しそうな顔でそう言った、さっきまでの殺気は何処いった?

弥 『あれ、もしや寂しかったんですかあ?』

幽 「あ、あ、!?!」

ここにあったわ、何処から出たんだその声は

弥 『ごめんなさい』

幽 「とにかく!、今度出かけるときは連絡しなさいよ」

弥 『分かりました』

その後は何時もの和やかなムードに戻っていた

幽香と和やかなティータイムを楽しんでいると、外からけたたましいエキゾーストが

響いた

今や聞き慣れたCG13の排気音、フィガロの奴やつぱり来たか

窓の外を見ると砂煙を上げながらこちらに走ってくるフィガロが見えた、片手にはルガーを持って

フ 「お兄様、こんな所にいましたか！」

扉を勢いよく開けると、開口一番そんな事を宣った

幽 「この子誰？、弥生」

弥 『…私の妹です』

幽 「ああ、御愁傷様」

幽香はそう言うときッチンの方に消えて行った、確かにその気持ちは分かるけど俺を一人にしないで欲しい

そんな幽香に入れ替わるように椅子に座ったフィガロは、いつも通り生気のない目で俺を見据えている

毎回見るたびに思うが何でそんなに目にハイライトが無いんだ？、ドライアイなの？そんな事を考えているとフィガロが口を開いた

フ 「前にも言ったはずですが、出かける時は言ってくれと」

弥 『だから置き手紙したんでしょ？、わざわざ紙に書いて』

フ 「口で言つて下さいよ！」

弥 『お前絶対付いてくるじゃん！』

フ 「それはお兄様が心配で！」

弥 『俺はもう大人です！、わざわざついてこなくて良い！』

俺がそう言うのとフィガロはプルプルと震え出し、消え入るような声でこう言つた

フ 「私は…、お兄様が心配で…」

フィガロはそう言うのと泣き出してしまった、そういえば昔つから泣き虫だったなあ

弥 『ああ、ごめん、悪かつたつて、泣き止んでくれ、な？』

フ 「うう…、お兄様あ…」

するとフィガロは腰に抱きついてきた、なんか超恥ずい

俺が周りを見回すとさつきキツチンに消えて行つた幽香が影からこちらを見ていて、

ニヤニヤしていた

ちよつとイラツとしたのは言うまでも無いだろう、しかし面と向かつてそんな事を言えは殺殺だろう

幽 「仲良いわね、流石兄妹と言つた所かしら」

最後に幽香が言つたそのセリフ、それが妙に心に残つたのだつた

人里にて

異変が終わって早2日、早いものだ

今日の夜宴会があり、そこでフィガロと皆を合わせる予定

んで、当のフィガロは……、何かを言いたそうにこちらを見ている

フ 「お兄様」

弥 『何?』

フ 「そういえばここに来る時和菓子屋が有るって言っていましたよね?」

弥 『あるよ、だから?』

フ 「行きたいんです、食べたいんです!」

弥 『そう、今から行く?』

フ 「え、あ、はい!」

と言う事で、人里に行く事になった

……

……

フ 「遠くないですか?」

弥 『歩いて…来るの…初めてなんだよね…』

フ 「バテ過ぎじゃないですか？、お兄様」

さて、車を使わず歩いて来て見たが…、息も絶え絶えである

いやね、車で来ると買い過ぎちゃうと思つて歩いて来たんだけど、遠い

尚、現役軍人フィガロ氏は未だ未だ元気である、元々体力あるしね

流石中学マラソン第一位！、ちなみに俺は後ろから二番目、スプリンターなんだよ、俺
咲夜も人里によく出入りしてるから高を括つてたけどさ…

良く良く考えたら同じ人間でも咲夜は飛べるじゃない、歩いてないじゃない

フ 「行き着くんですか？、私が負ぶって行きましようか？」

弥 『やだ…、車呼ぶことにするわ…』

フ 「ですね」

結局俺は、指笛でミアを呼ぶ事にした、結局意味ないじゃん

…

…

さて、満を辞して人里に着いたわけだが…、浮いてる

フィガロの服装が浮き過ぎてるんだよ、ゴスロリつて

周りの人間達は基本的に着物やら半被やらを着ており、宛ら祭りの会場の様だ

ただえさえ俺が洋服で浮いてるってのに…、二人で浮きまくって空でも飛んじやうんじやないですかねえ？

フ 「なんかくだらない事考えてませんか？」

弥 『いや？、ああ、着いたぞ』

そんな事を話していたら、甘味処に着いた

何時もの威勢の良いおっちゃんが挨拶してくれた、会釈で返しておく

どうやら書き入れ時の様で店員の皆さんはてんでこ舞いである、あ、一人転けた

良く良く考えればこいつと二人で出掛けるのは久しぶりだ

昔、前の彼女がこいつの嫌がらせで引越した時から半ば縁を切った様なものだった

からな

正直、まだ許してはいない、ただ今はこいつの兄として振る舞うだけだ

何より、今上手く行っている関係を壊す気は毛頭無いつて事だ

フ 「お兄様？、どうされました？」

弥 『ん、何でも無えよ』

店の長椅子に座り少し待つと女の店員がやって来た、まあいつも通りだな

しかし俺の顔を見た後フィガロを見た店員さんは頭に疑問符を浮かべていた

店 「ご注文は何ですか？」

弥 『みたらし団子2本にずんだ餅2つ』

店 「かしこまりました」

そう言つて店員さんは店の奥に消えた、何を疑問に思つたんだ？

フ 「ここ、前に誰かと来たんですか？」

弥 『ああ、あきつ丸と一回か二回な』

フ 「ああ、だからですかあ……」

弥 『ん？』

フ 「あの店員、お兄様の顔を覚えてたんですね、あの年頃は色恋沙汰に敏感ですか

ら

弥 『ふーん、そっか』

その後一時間程人里をブラつくことにした、久々だしな

……

……

貸本屋に入り立ち読みをしているとふと隣から声をかけられた

文 「あつ、弥生さん！、取材良いですか？」

それは何時ぞやの新聞記者、射命丸文だった

弥 『いいですけど…、何を知りたいんですか？』

文 「例えば何故幻想郷に来たのかとか、外来人の目には幻想郷はどう映っているか、とかですね」

弥 『長くなりそうですねえ…、今度紅魔館に来てもらえますか？』

文 「いえいえ、お時間は取らせませんから！」

そんな話を文していると奥の本棚にいたファイガロが出て来た、ドス黒い闇を纏いながら

フ 「…お兄様、その女誰ですか…？」

それを見た文も流石に狼狽えた様でこちらに怪訝な眼差しで見て来た

文 「…あの人は？」

弥 『私の妹のファイガロです…』

それを聞いた文は怪訝な眼差しから一転して目をキラキラ輝かせた、まあ取材対象が増えたからな

文 「ああ、でも今は落ち着いて取材出来そうにありませんね…、それでは弥生さん、また！」

そう言つて文は空に飛び去ってしまった、全く嵐の様だ事

弥 『ふう…』

フ 「お・兄・様・?」

背後から寒気のある様な声で話し掛けられ、振り返るとそこには…

類い稀に見る程の満面の笑みを浮かべたフィガロが居た、いつにも増してオーラが黒い…

弥 『ま、まあ、落ち着きましよう?、フィガロさん』

フ 「何を言ってるんですか?、お兄様、私は今驚く程冷静ですよ!」

フ 「さて、お兄様、車に戻ってお話しましょう?」

弥 『はい…』

こうしてまた俺はフィガロの誤解を長時間かけて解く羽目になったのだった

…

…

無事に誤解を解いた頃には陽も暮れていた、このまま宴会の会場に向かうかな

そう思い博麗神社に向かっている、今日は早めに帰ろう、手伝いは今日は気分が乗らないしな

フ 「宴会ってどんな感じですか?、私達が知ってる宴会ですよ?」

弥 『ああ、基本的にはな』

フ 「と言うと?」

弥 『みんなが飲む量が有り得ないって事以外は普通』

弥 『偶に戯れあいでも地面にクレーターが出来ると以外は普通』

フ 「先が思いやられます…」

そんな会話をしながら会場に向かった、ふと窓の外を見ると月をバックに魔女のシルエツトが浮かび上がって居た

忘却と酒乱

さて、爽やかな朝だが今俺の頭の上には疑問符が浮かびまくりである

それは何故かつて？、宴会に向かった筈なのに自室のベッドで寝ているからですか
えつと…、昨日俺は人里に行つて、夜になったから宴会に向かつて……？

博麗神社に着いてからの記憶が無い、どうしたっけか

それはそうと珍しく今日はフィガロが部屋に居ない、まあ楽でいいな
考えてても始まらないと言う事で、俺は部屋の外に出る事にした

……

……

弥 『あ、おはよ』

フ 「ん、お、おはよう」

フ 「わ、私今から用事あるから、じゃね」

弥 『ん、ああ、じゃあね』

弥 『おはよ』

レ 「ん、ああ、おはよう」

レ 「今から私仕事あるから、ご機嫌よう」

弥 『ん、ああ、じゃ』

……

：

やけに皆さん余所余所しいな、それどころか避けられてねえか俺？

俺昨日何したんだろ、記憶に無いから怖いんだけど

そしてフィガロの奴どこ行つたんだ、全然居ないんだけど

もしかしてあいつなんか酔つた勢いでなんか言つたのか？

それとも俺か？、なんか俺言つたのか？、記憶に無いぜおい

弥 『なあコレット、昨日の事覚えてないか？』

コ 「生憎私も記憶無いのよ、あの酒強過ぎでしょ……」

弥 『ああ、やつぱり俺酔つて記憶なくしたんだな……』

まあとりあえず図書室に行くか、フィガロを探すとしよう

……

：

相変わらず広い図書室だ、フィガロはここか？

弥 『小悪魔よ、フィガロここにるか？』

小 「え？、ああ、見掛けませんでしたよ」

弥 『ああ、そう、俺昨日なんかした？』

小 「えつ、覚えてないんですか？、あんな事魔理沙さんにしたのに」

弥 『え、あんな事って何さ』

小 「ふふ、秘密です〜♪」

そう言つて小悪魔はスキップしながら何処かへ行つてしまつた

大胆な事つて何？、なんか超えてはいけない一線でも越えたか？

一人で悶々としていると背後の大扉が開いた、開けた主は魔理沙だ

魔理沙は俺の顔を見ると背後の大扉が開いた、頬を染めながらこちらに歩いて来た

魔 「よう、や、弥生？」

魔 「昨日の事覚えてるか？」

弥 『！、わ、悪い、覚えてない』

俺がそう言つて魔理沙は驚き、肩を落としていた

魔 「まあ、あんな酔いも回つてるときに話した私が間違いだったな」

弥 『え、ま、魔理沙？』

魔 「良いんだ！、心の準備が出来たらまた話すから」

そう言つて魔理沙は走つていった、何？、何事なの？

背後に気配を感じ振り返るとレミリアやフラン、パチュリーが並んで蔑みの目でこちらを見ている

取り敢えず美鈴お前は仕事しろよ、まだ昼休みにすらなつて無いし

フ 「鈍感」

レ 「意気地無し」

パ 「ヘタレ」

紅 「朴念仁」

弥 『え、待つて、なんで俺こんなに罵倒されてるの酷く無い?』

弥 『あと美鈴お前門番でしようよ、持ち場離れるんじや無いよ』

紅 「大丈夫!、咲夜さんにはバレてないですから」

フ 「残念だね美鈴」

紅 「え?」

美鈴が壊れた人形の様子に首を動かすと、そこにはニツコリと笑った咲夜がいた
美鈴もつられて笑っているが、冷や汗ダラダラである

咲 「何が大丈夫なのかしら美鈴?」

紅 「さ、咲夜さん、これには深い訳が…」

咲 「さ、こつちに来ましようね」

紅 「ああ！、誰か！、弥生さん助けてッ!!」

叫びながら美鈴は何処かに引き摺られて行った

その後少し遠くの方で叫び声が聞こえたのは言うまでも無い

弥 『ああ…、美鈴、ご冥府をお祈りします…』

レ 「ほら、弥生、そこ座りなさい、教えてあげるから」

弥 『あ、はい』

俺が椅子に座ると向かいにレミリアが座り、なぜ魔理沙が走って行ってしまったかを教えてくれた

…

…

弥 『俺そんな事したのかよ…』

弥 『酔いが回って魔理沙に抱き着いたり、頭おかしいのか俺は』

弥 『その後魔理沙は俺の耳元でなんか呟いたけど肝心の俺は覚えてないし』
いや、マジで頭おかしいのか俺は、バカなのか

そんな事考えているとフランがニヤケながら口を開いた

フ 「ほんつと大胆だったね、見てるこつちが赤くなつたもん」

レ 「確かにそうね、ほんとこつちが恥ずかしいくらい大胆だったわ」

レ 「最終的には隣にいたフィガロが麻醉弾で眠らせて家に帰ったのよ」

フィガロ、ナイスな判断だけでもう少し早くそうしてくれたら良かったのに
レ 「あら、噂をしたらなんとやら、ね」

フ 「お兄様、お話があります」

弥 『何…、昨日の不祥事に関してはおめんなさいの世界だけど…』

俺はフィガロに手を引かれ部屋に連れ戻された、凄い怒ってる気がする

…

…

フ 「さて、昨日の事をお兄様は憶えてないんですか？」

弥 『さっぱり、レミリアに聞いて自己嫌悪に陥ってます』

フ 「私がお兄様の事が好きなのは一旦置いて置きますけど、アレは無いですよ」

フ 「女子に抱き付くなんて…、有り得ません、外なら強制わいせつで訴えられても文句は言えませんか？」

フ 「萃香さんに無理矢理酒飲まされた、としてもあれは駄目です」

フ 「何より、私の前でするなんて当て付けか何かですか？、監禁しますよ？」

弥 「マジで悪いとは思ってるけど、監禁はやめなさい」

フ 「まあ、取り敢えず落ち着いたら魔理沙さんの所に謝りに行きましょう」

弥 『ああ、分かった』

こうしてフィガロの説教は終わった、その後部屋の鍵を閉められたのは別の話

忘物

弥 『あ』

フ 「どうしたんですか？、お兄様」

弥 『机の鍵忘れた』

……

…

さて、鍵を単冠湾に忘れたせいで単冠湾鎮守府にいる訳だが…
寂れ具合に拍車が掛かっていると言うかなんと言うか…

磯臭さはいつも通りだ、臭い臭い

フ 「あからさまに嫌そうな顔してますね」

弥 『だって臭いんだもの』

フ 「私が？、気を付けてるんですけど…」

弥 『じゃなくて、ここ、磯臭いだらって話』

フ 「ああ、そっちですか、確かに臭いですけど」

弥 『どんな間違え方だよ…、まあ良い、行くか』

やけに大きな扉を開くと大淀さんはまた嫌そうな顔をしていた

いや、嫌われてるのは知ってるけどさ、そんな顔しなくても良いじゃない
大人なんだから隠しなさいよ、全く

大 「御用件は？」

弥 『私達がいた部屋に小さな鍵落ちてませんでした？』

大 「いえ、心当たりは無いですね、御自分で見てきたらどうです？」

弥 『それもそうですね』

大 「知ってると思いますけどその突き当りを右です、それじゃ」

そう言うで大淀は何処かへ行ってしまった、ブツブツ文句を言いながら

まあ鍵ここに無かったら作ればいいのか、て言うか何で俺あんな嫌われてるんだ？

……

……

つて事で俺は応接間、つて言うには余りにも何も無い部屋の中で鍵を探している
まあなんと言うか、無い、全く見当たらない、俺どこやったっけ

フ 「同じ所探しても見つかりませんよ」

弥 『分かってる』

そんな訳でフィガロにも手伝って貰っている

しかし二人掛かりでも中々見つかからない、多分柵の裏にでも落ちたのかなそんな事をしてしていると部屋扉が叩かれた、聞き覚えのある声と共に

あ 「弥生殿、失礼しますぞ〜」

そう言つてあきつ丸は入つて来た、情報行くの早く無いか?、まあ良いがにしてもだいぶ雰囲気が変わったな、なんと言うか大人っぽくなった

グレーだった制服は黒に、それに伴い帽子も黒くなっている

マントを羽織つているのはこいつの趣味だろうか?、陸軍のそこには着てる奴ほぼ居なかつたし

あ 「久々でありますな!、弥生殿、いかがお過ごしでした?」

弥 『普通、異変解決を野次馬に行つたり、その辺りを走りに行つたり』

あ 「本当にいつも通りでありますな…、この装いはどうでありますか?」

弥 『よく似合つてる、そのマントもな』

あ 「そうでありましょう、改二の証であります!」

弥 『そいつは良かった、強くなつて帰つて来るつて言つてたもんな』

あ 「ええ、褒めて下さい!!?」

前言撤回、全然大人っぽくなってません、褒めてくださいってなんだよ、馬鹿かよその上後ろに佇むフィガロの顔怖いし、笑顔が怖いって最早どうなの…

殺気を帯びたファイガ口はゆらゆらと霊の様にあきつ丸の肩に手を乗せた

フ「……コホン」

あ「ああ！、ファイガ口殿！、お久しぶりでありますな！」

フ「ええ、そうですね、所であきつ丸さん」

あ「なんでありますか？」

フ「取り敢えずお兄様…、じゃなくて兄さんから離れなさい…？」

あ『は、はい…』

気迫に押されたあきつ丸は俺から離れた、あきつ丸オドオドしてるぞおい

あきつ丸の影から見えたファイガ口の顔はまるで死神の様な凄みがあった

フ「後本州でのお仕事はどうしたんですか？」

あ「ああ、単冠湾泊地に自分配属されたんです！」

フ「単冠湾でのお仕事は？」

あ「特にありませんけど？、だから紅魔館に帰投する予定です」

俺から引き剥がされたあきつ丸が少し怯えながらそう言うのでファイガ口は頭を抱えた

フ「田舎の泊地だと仕事すら無いのか…」

弥『お前サラツと失礼な事言ってるからな』

フ「…まあ良いです、仕事をすつぽかしてこちらに来ているわけでは無い様なので」

あ 「勿論です、プロですから」

フ 「本当にプロならこんな所に来ませんよ」

弥 『お前が言えた事じゃなく無いかファイガロ』

フ 「私にとつてはこれも仕事、と言うか最優先事項です」

弥 『意味分かんない』

何はともあれあきつ丸が帰つて来た、また騒がしくなりそうだ

……

：

あ 「にしても迎えに来てくれるなんて感心でありますなあ、うりうり」

弥 『うっさいわ、肘で人の事小突くな』

付いて来る気満々のあきつ丸が居るわけだが、仮にも配属先の提督に挨拶はしておくべきだろう

あきつ丸はもう話は付けてあるつて言つてたけどな、なんて言うか信用出来ん

にしてもさつきから明石が走つて逃げて行つたり加賀さんが右往左往してたり騒がしいな

なんか頭の中が空の人の部屋から女子が騒いでる声が聞こえる、テンションが空に似てるし

ってか空のやつどこにいるんだよ!!?、あいつの部屋には女子一人だぞ、女の子待たして何やってんだ?

俺も右往左往していると気付いた加賀さんが話し掛けて来た

加 「あ、弥生さん、どうしてここに?」

弥 『探し物に、まあ見つからなかった訳ですけど』

弥 『それはそうと提督は何処ですか?、あきつ丸が話があるってうるさいんです』

あ 「うるさいってのは余計でありますぞ、弥生殿」

加 「提督なら…、あの部屋の中に居ますよ」

そう言つて加賀さんはさつき女子がいた部屋を指差した

加 「あそこに居る女の子が提督です」

加賀さんは半笑いでそう言った、その顔は少し悲しげだった

友人の異変

さて、状況を整理しよう、空は提督をクビになつては居ない、ただ女体になつただけだ

……は？、整理されるどころかむしろ散らかつたんだが、意味不明にも程がある
薬で性別が変わるだど？、世界のパワーバランスを歪めかねない代物じゃねえか

あ「うーん……、頭がこんがらがって来ましたなあ」

加「要は薬のせいで女体化したって話です、信じられません但し事実だし仕方ありません」

加「明石の話では数日で元に戻るって言つてましたが……、あまり信用出来ないし」

加「取り敢えず私は明石に薬を急かして来ますから、それでは失礼します」

そう言つて加賀さんは研究室の方へ走つて行つた、いつになく必死だな

弥「もしかしてよ、加賀さん空に気があるのか？」

あ「え、気付いてなかつたんでありますか？」

弥「うん」

あ「はあ……、なんと言うか、流石というか」

弥 「なんだよ」

あ 「やっぱり鈍感でありますなあ、目を見れば分かるってものでありましょう」

弥 「さっぱり分かんない」

あ 「良くそんな鈍感で生きて来れましたなあ」

あ 「ま、取り敢えず自分も提督殿に話があるんで、部屋で待つて居て下さい」

そう言つてあきつ丸は執務室に小走りで行つた、一人になつた私、寂しく部屋に戻る事にした

なお明石の研究室から不思議な叫び声が聞こえたのは多分俺の気のせいだ

……

…

途中でトイレに行きたくなりトイレに行つた、一通り終わらせて手を洗つていると女性化した空が入つて来た

…ん？、ここ男子トイレ、今あいつ女子、だけどあいつ中身男子…

これは判定が分からん、何なら今あいつもトイレの前で頭捻つてるし、まあアレが無
いからな

まして普通男は着ないスカートに戸惑つてるし、なんで着たんだよ

そんな観察をしていると涙目になつた空が話し掛けて来た

空 「あ、あのおく？」

弥 「安心しろ、話なら聞いているから」

空 「ああ、なら良いんだが…、どうすれば良いんだ？」

弥 「知らないし、適当に洋式の方で座ってしろよ」

空 「そ、そっかあ」

弥 「後男子トイレ入んなよ」

空 「女子トイレ入れる訳無いだろうが!?、社会的に死ぬわ!」

弥 「女子のうちにしときや良いだろ、今なら合法だ」

空 「そう言う問題じゃねえだろ…、中身男子だし…」

弥 「それに、俺の居心地が悪いだろうよ、仮にもお前今女だし」

空 「はあ?、中身が男だから関係ないだろ!」

弥 「そういう所が鈍感だな、この鈍感野郎め」

弥 「ま、俺には関係ないし、大体なんでそうなったんだよ?」

空 「薬の話は聞いたか?」

弥 「聞いた」

空 「その薬は角砂糖みたいな形しててよ、紅茶に入れて飲んじまったんだ」

弥 「間抜けなこったな」

空 「明石の野郎…、後で仕返ししてやるから覚悟してろよ…」

弥 「そうかよ、まあ取り敢えず早くトイレ入れよ、漏らしても知らんぞ」

空 「あつ、そうだった」

そう言つて空は洋式に入つて行つた、こんな話したの中学ぶりか？

しかし女体化するとあいつ胸デカいな…、なんだか分からんがムカつく

そんな事を考えつつ俺は部屋に戻る為廊下を歩きだした、無駄に広いんだよこゝ

…

…

部屋に戻るとあきつ丸とフィガロは長机を挟んで別々の作業をしていた

あきつ丸は十四式の整備、フィガロはカフカの『流刑地にて』を読んでいる

寒い部屋の中よく出来るな、俺ならページすら捲れない

にしてもフィガロは昔からカフカが好きだ、イチオシは『変身』らしい

フ 「座つたらどうですかお兄様、貧血で倒れますよ」

弥 「まあた昔の話を…、取り敢えず貧血は治つたよ」

あ 「昔貧血だったんでありますか？、弥生殿」

弥 「軽い程度だけだな、立ち眩みぐらいだ」

あ 「へえ、意外であります」

弥 「そーいや空に何話して来たんだ？」

俺がそう聞くとあきつ丸はこっちに向き直し、満面の笑みでこう言った

あ 「正式に提督殿から許可を貰って来たんです！、また一緒に暮らせませよ、弥生殿

!!??」

あきつ丸がそう言うと言つてファイガロは読んでいた本を音を立てて閉じた

フ 「はあ？」

あ 「何でありますかファイガロ殿」

フ 「貴女ここでの仕事はどうするんですか？」

あ 「大丈夫であります！、ほぼ任されてないし!!??」

フ 「開き直らないで下さい!!??」

あ 「つて事で弥生殿、よろしくお願いします！」

弥 「ん、OK」

フ 「お兄様あ!!??、軽く決めないで下さあい!!??」

こうしてあきつ丸はまた一緒に暮らす事になった、また賑やかになりそうだ

……

……

用事も済ませた所だし、そろそろ帰る事にした

あきつ丸も自分のMARCHに荷物を積み終わり、準備万端と言った面持ち
なんと言うかあきつ丸は車を買ってから元気に拍車がかかっている

まあ欲しかった車を手に入れたのなら仕方がないな、俺もそうだったし

あ「どうしたんでありますか弥生殿、柄にも無くニコニコして」

弥「失礼だな、俺だって笑うし」

フ「確かに不気味と言えば不気味ですね、まあそれすら私は愛おしいのですが」

あ「気持ち悪いですぞ、ファイガロ殿」

そう言ったファイガロは俺の方を見て微笑んだ、ハイライトの無い瞳と相まって不気味
である

弥「お前も車に荷物積んじやいな、こっちいつ戻って来れるか分からないからな」

フ「大丈夫です、大切な物は全て紅魔館に運んであるし、一番大切なのはお兄様です
から」

弥「そ、なら良いけど」

そうして俺たちは幻想郷へのゲートを通った、向こうで波乱が巻き起こる事など露知
らずに

地底　　〽　はみ出し者の棲む処　　〽

地殻の下の嫉妬心

人間は何かと深い所を物語の題材にしたがる、ジュールベルヌの『地底旅行』とかな
 何でこんな話してるかって？、今俺は地底に来ているからさ

しかしイメージの地底とは違って…、繁華街みたいなんだ

あ「ほんと、自分たちは厄介事に巻き込まれますなあ…」

…

…

ゲートを通った先は暗い異様な空間、無数の目玉がギョロギョロと蠢き不気味だ

MARCHのヘッドライトをハイビームにして奥を見るが暗闇が続くばかりで何も
 見えない

俺はこの風景を知っている、紫のススキマの中だ、不気味な目玉が何よりの証拠

取り敢えずヘッドライトをそのままに外に出ると、バリバリと車体に張り付いた氷が
 割れる音が響く

トンネルの中の様に三台の排気音が辺りに響いているばかりで何も分からない

フ「?、?は?」

いつもの様にMARCHの後ろにはFigaro、K10MARCHが並んでいる
三台共氷漬けになっているが珍しくエンジンを停止していない、何故だろうか
あきつ丸が呆れた様に車から出てくると開口一番にこう言った

あ「また面倒ごとに巻き込まれた様でありますなあ…」

弥「はあ、だな、こんな所来た事ないぜ」

紫「でしようねえ、初めて繋げた所なんだから」

何処からともなく声がすると、空間が裂け紫が出て来た

いつもの胡散臭い雰囲気を漂わせる紫は何処へやら、真面目でキリツとした面持ち

紫「ここに来て貰ったのは他でも無く、地底の偵察役として働いて貰いたいからよ」

紫「最近は地底の動きが活発だね、そこで怪しい動きが無いか見て来て欲しいって

訳

弥「拒否権は?」

紫「もちろんあるわよ?、ただ私が貴方にどれ程の施しをしてあげたか忘れた訳

じゃないわよね?」

弥「…はあ、分かりました、見てくれば良いんですね」

紫「ありがとう、話が早くて助かるわあ、あ、因みにレミリアには言っているから

安心して良いわよ」

任務を押し付けられて俺が溜息をつく頃、あきつ丸が口を開いた

あ 「だけど自分で自分達が行くんでありますか？、紫殿が行った方が良いのでは？」

紫 「そうしたい所なんだけど私地底でも有名だし、偵察には不向きなのよ」

紫 「それに何より、天界やら外来人やらで私がやらなきゃいけない事が多くて手が

回せないって訳」

あ 「ああ、大変そうですね」

紫 「じゃ、車にみんな戻って、地底まで送るから」

紫がそう言うので一同各自の車に戻ると正面にスキマが開いた、向こうは薄暗い洞窟

の様だ

紫 「みんな、行ってらっしやーい！」

車を走らせスキマを抜ける頃、後ろからそんな声が聞こえた

……

：

人間は何かと深い所を物語の題材にしたがる、ジュールベルヌの『地底旅行』とかな

しかしイメージの地底とは違ってここは…、繁華街みたいなんだ

あ 「ほんと、自分たちは厄介事に巻き込まれますなあ…」

弥 「だな、本当いつも面倒くさい」

赤い反り橋を境に向こう側は昔の遊楽や飲屋街の様に賑やかだが

何と言うか、強い者が発するオーラ？の様なものを多数感じる

確か貸本屋で読んだ妖怪の本には地底には厄介な妖怪が多数居るって話だったな

厄介だ、取り敢えず壊されたらマズイ物に自己修復機能を付与して……と

あ 「綺麗でありますな」

弥 「旧地獄って言う名前には似付かわしく無い程にな」

俺達側と街の間には川があり、なかなか深い

近くには橋がありそこを通らなければ向こう岸には行け無さそうだ

反橋の道幅は狭く車は通れない、ここからは徒歩って訳だ

弥 「んじや、行きますか」

フ 「ですな、あの紫とか言う人の指図を受けるのは癪に触りますがね」

弥 「致し方無い事さね、幻想郷の管理者に楯突く必要も無いだろ」

しばらく歩き橋を渡ろうとしていると、ふと横から声が聞こえた

？ 「女を二人引き連れてここを渡ろうだなんて妬ましい……」

俺ら三人は同時にホルスターに収まった銃に手を掛けたが依然として相手の姿は見

えない

弥 「誰方ですか？、私達に敵意は無いですよ？」

？ 「銃に手を掛けた状態で言われても説得力無いわよ」

弥 「これは条件反射のような物ですよ、誰も居ないと思っていた所から声が聞こえたら武器に手を伸ばしたくもありません」

？ 「じゃあこうすれば良いのかしら」

すると俺達と対する様に少女が現れた、緑色の発光する眼をしたエルフの様な少女が
 ？ 「貴方達、ここに何しに来たって訳？、不可侵条約を知らない訳じゃ無いでしょう
 ？」

弥 「勿論知ってますが、幻想郷の管理者様に送り込まれた身でして」

？ 「追放されたって事？」

弥 「似た様な事です」

すると彼女は少し考える素振りを見せた後、こちらを向き直し溜息を吐きながらこう
 言った

？ 「ここは旧地獄、誰も貴方達を拒む者は居ないわ」

？ 「取り敢えず付いて来なさい」

彼女はそう言うのと繁華街の様な街の中心部に歩き始めた

……

：

弥 「私は弥生、あつちがあきつ丸でこつちがフィガロです、貴女は？」

？ 「んあ？、初対面で私の名前を聞くなんて妬ましいわね、水橋パルスィ、種族は橋姫、貴方も人間じゃ無いでしょ？」

弥 「私は蓬萊人ですが、あきつ丸とフィガロは人間です」

あ 「自分は艦娘であります！」

フ 「話がややこしくなるからやめなさい、あきつ丸」

パ 「楽しそうで妬ましいわね、さ、着いたわよ」

パルスィに案内された飲み屋は、想像を絶する量の酒と喧騒が待ち受けていた

混沌

眼前に広がる惨状、旧地獄を体現して居るかの様な荒れ具合

鬼と思われる男達があつちでは喧嘩、こつちでも喧嘩、そしてあちらでも喧嘩

かと思えばここには酔い潰れた鬼がいたり、へべれけになつて同族の女性に絡んだり
そして殴られたり、言うなればカオスと言つた所だ

パルスィに案内されて此処に来たが…、入つて数秒で出たくなつて居る俺がいる
弥 「えーつと、帰つて良いですか？」

パ 「ええ、私もそう思つてた所よ」

パルスィと俺達三人は踵を返し店の引き戸に手を掛けた時、後ろから声を掛けられた
？ 「おう！、パルスィ！、来てんなら言つてくれよ！、それと…、新入りさんかい？」
振り返ると金髪の長い髪に一際目立つ赤い角を携えた女性が立っていた
片手には盃、周りには日本酒の空き瓶がこれでもかと転がっている

見るからに鬼と言つたご様子、萃香とはまた違つたタイプの様だ

？ 「見るからに地上から来たつて感じだねえ…、今どうなつて居るのか話、聞かせて
おくれよ」

そう言った一角の彼女はこちらに手招きして来た、残念ながらこちらに拒否権はなさ
そうだ

……

…

さて、一通り話終わったが話の片隅で出て来た我が愛車、MARCHに興味が湧いた
らしい

んで、今は飲み屋の外に居るって訳

因みに鬼の彼女は星熊勇儀、案の定萃香とは知り合いらしい、ってか飲み友達

勇 「話に聞いてた車ってのは操作しないと動かないんじゃないか？」

弥 「その通りです、普通なら、ですが」

そう言つて俺が指笛を吹くと遠くでセルの回る音がした

咆哮にも似たエキゾーストノートを奏でながら砂煙と共にMARCH、もといミアが

目の前にやって来た

目の前でドアを開いたミアは液晶の中で不機嫌そうにこう言った、寝てたのかこいつ

ミ 「あれ、弥生君君さ僕に向かつてさつき待機してろって言ったよな？」

弥 「ああ、確かに言った」

ミ 「見るからに急用じゃ無いよね？、例えば早くここから脱出したいとかじゃ」

弥 「悪い、色々あつて勇儀さんがお前と会いたいつて言つたからさ」

ミ 「第一、あそこの反橋道幅狭いんだよね、それにジムニーじゃ無いんだから凸凹した道走りたくないんだよ、下擦つちやうと僕だつて痛いし」

弥 「ほんと、ごめんつて、後で埋め合わせするから」

ミ 「まあ良いけど、で、勇儀さん、なんで僕に会いたかつたのさ？」

ミ アは少し高圧的にそう聞いた、流石にいきなりの事で勇儀もたじたじと言つた様子
勇 「車の話を弥生から聞いてさ、気になつたつて感じ」

ミ 「そう、で、見た感想は？」

勇 「あんた、いい性格してるねつて思つた」

ミ 「そう？、褒めても何も出ないよ／＼／＼」

液晶に映るミアの顔はあからさまに赤くなつていた、耐性が低すぎないか？、褒めてないし

ミ 「せつかくだし勇儀さん乗つて行く？、家を教えてくれたら送つてくよ」

どうやらミアは上機嫌になつた様子、こいつ感情を起伏が激しいな

まあ、悪魔つて事もあつて人と喋り慣れてないんだらう、その割に饒舌だけど

勇 「いいや、あたしやまだ飲むつもりだから、あんたは…、酒は飲めそうに無いね」

ミ 「うん、僕はお酒飲めないからその弥生を連れて行くと良いよ」

弥 「あ、おい！」

ミ 「じゃあまた今度、勇儀さん」

ミアは余計な事を言つて前輪を空転させながら去つて行つた、あの馬鹿：

俺はゆつくり勇儀の隣から離れて：

勇 「何処に行こうつてのさ、弥生？」

弥 「ちよつとお手洗いに……」

勇 「はいはい、嘘吐くんならもう少しましな嘘吐くんだね」

弥 「あ、ちよ、待つて、普通に歩けますから！」

そうして何故か俺は勇儀に姫抱っこされた状態で入店する事になった

店で随分飲んだあきつ丸に弄られたのは言うまでも無いし、フィガロに誤解されたのも言うまでも無い

……

……

さて、鬼と飲むと碌な事にならないと前回萃香と飲んだ時嫌と言うほど分かつた

しかし私、中島弥生は同じ轍を踏む程馬鹿では無い、つまりは酔わなければ良いと言

う事

だから私はある秘策を考えた、至つて簡単、アルコールを体外に拡散すれば良いと言
う事

そこで能力のコピーを使つて萃香の能力をコピーさせて貰つた

要はアルコールを霧にして拡散させるつて事だ、素晴らしいと思わんかね？

と言う事で試したら…、周りがすごい酔つ払つた

あ「弥生殿お、自分は単冠湾で待たされた時凄く寂しかったんでありますよお？」

フ「お兄ちゃあん、留学なんてしなくて良いんだよお？、私を何で置いてくのお？」

今は両側をあきつ丸、フィガロに固められてる状態だ

と言うか、あきつ丸は良いとしてフィガロいつの話してるんだ？、幼児退行つて奴？

冷静に考えれば俺からアルコール放出したら周りが酔うじゃん、俺の馬鹿

アルコールなんて飲むより吸引する方が体内に吸収するつてのに…

勇「ハハッ、両手に華で良かったじゃないか！」

弥「片方妹ですよ、まあ聞いてれば分かると思いますよ」

向かいに座つている勇儀は他人事のように笑つているがそれ所じやない

こんな酔つ払い2人連れて宿探しだけ、本当先が思いやられる

弥「それはそうとこの近くに宿つてありますか？」

勇「あら、あんた達泊まる所無いのかい、うちに泊まつて行きなよ」

弥 「え、良いんですか？」

勇 「他に行く当てもないんだろう？、ま、その代わり酒の相手、して貰うけどね」

弥 「喜んで引き受けさせて頂きますよ、まあ私が相手になるかは分かりませんがね」

そう言うわけで俺達は宿を手に入れたのだった、その後他の鬼と喧嘩になったのは又

次回の話

喧嘩と私とあきつ丸

どこにだつて敵対者はいる、今俺の目の前にいる奴もそうだ
いやさ、人間VS鬼つて…、桃太郎かよ

？「オラ掛かつて来いよおコラあ！、ビビつてんのかあ？」

見るからにガラが悪い、めんどくさいなこいつ

…

…

さて、何故こんな状態になつたか、答えは簡単、絡まれたからだ

どうやら勇儀の舎弟的な物で、いきなり家に泊まるのが気に入らなかつたらしい
んで、今喧嘩に発展しそうだ、火事と喧嘩は江戸の花つてか？、ここ旧都だろ

誰一人止めようとしなしいし、何なら煽つてるし

あ「弥生殿！、頑張つてでありますよ！」

弥「少しは止めろよお前は…」

フ「お兄様、負けるとは思っていませんが少しでも危なくなつたら呼んで下さい」

弥「お前は危ないからダメ、相手が危ないから」

相手の方に向き直し面を拝むと、まあニヤケている、確実にこつち側下だと見下して居る顔だ

まあ別に良いよ？、確かに種族的には格下かも知れない、只こつちは蓬萊人だ別に死んだ所で痛いだけ、すぐに回復する、その上こつちは道具もあるし

何なら能力で如何とでもなる、こつちが劣ってるのはプラットフォームの性能だけ負ける要素はあんまり無い、初見殺し食らう可能性はあるが

弥 「ビビってるのはそちらでは？、煽るだけで全然攻撃して来ないですし」

？ 「あ？、この俺様がビビってるだろ、舐めてんじや無えよッ！」

軽く煽るだけでこの始末、何でこう言う奴って煽り耐性低いの？

あからさまな開戦の合図と共に鬼の足元にはクレーターが出来、相手は消えた

次の瞬間鬼は俺の目の前で腕を振り上げ、勝ちを確信した表情を浮かべている、ト
ラップに気付かずに

？ 「あッ？？」

相手の顔から笑みが消えた頃、俺は霧となつて攻撃を避け、代わりに拳が当たったのは手榴弾だ

周囲が爆風に飲まれ、煙から出て来たのは俺だけ、奴は出てこない

死にはしないにしてもダメージがでかいのは確実、対妖怪用手榴弾作っにおいて正解

だったな

あ 「弥生殿！、大丈夫でありますか？」

弥 「ん、大丈夫では無いな、鬼一人怪我させたし」

蓬萊人VS鬼の戦いは、蓬萊人の勝利で幕を閉じたのだった

……

……

近くにある酒屋に例の鬼は運び込まれた、やっぱり鬼って頑丈だなおい

外傷は服が破れ肌が煤けた程度、ファイガロに診てもらったが骨折一つ無い

にしても流石ファイガロ、優秀な妹で兄も嬉しいぞ

フ 「見た感じ問題無さそうですね、骨も折れてない様ですし」

弥 「マジか、手榴弾の直撃を食らったのにスゲエな」

フ 「にしてもお兄様は危なっかしい戦法ですね、少し間違えたら自爆ですし」

弥 「プラットフォームの性能が低いからな、人間って、こうでもしないと勝てないん

だよ」

フ 「そうですか…、私としては体を大事にして頂きたいんですけどね」

フ 「それに、いつの間にかお兄様人外になってるし…、まだ私は説明されてないですからね」

だ

土間や囲炉裏がある所なんかは白玉楼とは違う、あそこはそんな装備じゃ賄えないからな

勇 「じゃあ、適当に始めようか！」

パ 「なんで私まで連れて来られたのよ…」

酒瓶を片手に勇儀はそう言った、何と云うか予想通り

勇儀の後ろには樽に入った日本酒がざっと20個以上、一体どれだけ飲むつもりなんだ

…

…

さて、パルスィとフィガロは出来上がってしまった所で俺達は抜け出した

にしてもフィガロあいつ酒強いな、あいつだけで何本飲んだんだ

そんな事を考えていると、あきつ丸がほろ酔い状態で口を開いた

あ 「あ、そういうえば弥生殿お、何でMARCHに乗ってるんですう？」

弥 「と、言うとう？」

あ 「弥生殿は中島元帥の息子さんでありましょう？、何故わざわざMARCHを選んだのかなって」

弥 「ああ、そう言う事、意外と簡単な理由よ」

あ 「何でありますかあ？」

弥 「元々俺『速く走る為に生まれた』って車好きじゃ無いんだよ」

弥 「例えばR32とかFDとか、NSXなんて最たる例だね」

弥 「MARCNなんて速く走る車じゃ無いでしょ？、だけど改造すれば速く走れる」

あ 「天邪鬼でありますなあ」

弥 「そうだね、まあ、MARCNをあそこまで持つて行くのは大変だよ」

あ 「と、言うとは？」

弥 「まずSR20を積むでしょ？、で馬力が150ぐらい、パワーはもう足りたね」

あ 「ふむふむ」

弥 「だけどボディ剛性、足回りが足りない」

あ 「ほほう？」

弥 「だからスポット増しとか、後輪ブレーキをディスクにしたり、色々」

あ 「だからあんなに速いんですなあ、だけど何故AT？」

弥 「オートマで何処まで行けるのか、後めんどくさいから」

あ 「何故そこで手を抜くんですかあ…」

そんな話をしつつ、俺たちは風に当たりながら酔いを覚ましていた

その後ファイガロに強制送還されたのは別のお話

波乱の予感

地底に来て早一週間が過ぎた、慣れて来たところである

そろそろ地底の主、悟り妖怪の所にも行きますかね

と、言うのも手紙が届いちゃったからだ、だいぶ丁寧な文だった

要約すれば挨拶をしたいがこっちから行けないから来てくれって話

流石に挨拶した方が良いだろう、主って位だから強そうだし

つて事で今、地霊殿の目の前にいる、紅魔館に負けず劣らずデカイな

あ「うわあ、大きな御屋敷でありますなあ…」

フ「私達の実家よりデカイ…」

しかしまあ大きい、ベルが無いけどどうすれば良いのかね

勝手に入る訳にも行かないし、ねえ…

フ「お兄様、何してるんです？、早く行きましようよ」

弥「えっと、君には遠慮とか常識とかが無い訳？」

フ「遠慮しても先に進めないし、何よりベルが無いのが悪いんですよ」

弥「自分勝手な話ですこと、じゃ、行きますかね」

フィガロの言い分にも一理あるって事で、中に入ってみることにした

……

…

中に入って周りを見るとまあ、幻想的な建物だ

ステンドグラスから透ける光がまた綺麗だが、何故か少し不気味なイメージがある
室内は外に比べ暖かいが暖炉などがある訳ではない、エアコンも無いのにどうしてる
のかしら

あ「えつと、ここ動物園でありましたっけ？」

何故あきつ丸がそう言ってるのか、答えは簡単だ、本当に動物園レベルの動物がそこら
を闊歩しているから

いやね？、幻想郷は不思議な現象が多いよ？、ただこれは対応に困るよ

虎とか普通にいるし、檻に入らないと凄い迫力だなあ、襲われそうで怖いなあ…
そんなこんなでだいぶ進んで来たが…、未だに人もしくは人に近い者に出会ってない
いるのは動物だけ、まだ妖怪では無い様で一言も喋らない、敵対心が無いと言うより
無関心の方が正解の様だ

？「ニヤーン」

ふと足元を見るとこれ見よがしに足元に猫が擦り寄ってきた、尻尾が二股な事から妖

怪の様

所々赤色の毛が混じっている事からも普通の猫ではない事が分かる、ま、それ以外は普通の黒猫だけだ

あ 「人懐っこい猫でありますなあ、よしよし」

? 「ニヤー」

あきつ丸が黒猫の頭を撫でている、まあマイペースさはいつも通りだ

ファイガロはファイガロで撫でに行っているし、まあ女の子らしくて良いんじゃない?

? 「ニヤニヤ」

黒猫はそう言うとききつ丸とファイガロの手を擦り抜け廊下の角に消えたが、すぐに頭を出してこちらを見ている

付いて来いと言っている様だ、取り敢えずナビが来てくれて助かったぜ

フ 「付いて来い…、と言っているようですがどうします?」

弥 「付いて行くしか無くないか?、このままだと迷うだろこの広さ」

フ 「そうですね……?」

その瞬間、廊下にピープ音が鳴り響いた、ファイガロ愛用の衛星電話からだ
ファイガロは慌てた様にそれを取り出すとオタオタしながらボタンを押した
フ 「あつ、こちら中島です、あ、少佐さん、どうしました?」

あ 「ここ衛星電話通じるんでありますね…」

弥 「だな…」

さつきまで薄く微笑んでいたフィガ口の顔が強張った、少し冷や汗が出る程に

フ 「はい、やはりでしたか、引き続き調査をよろしく頼みますよ」

あ 「どうしたんでありますか？」

フ 「幌筵泊地…、やはりでした」

フ 「現在地下施設を調査中ですが…、凄惨を極めた状態です」

あ 「ああ、あそこは少し前から…」

勝手に話が進んでいる訳だが、まあ俺には関係無いしまあいいか

なんか不穏な言葉ばかり聞こえるがまあ、触らぬ神に祟りなしだしな

フ 「所々異形化した遺体が発見されているようです、しかも多数」

弥 「ツちよつとフィガ口、詳しく聞きたい」

フ 「お兄様いきなりどうしたんですか、まあ良いです、何を聞きたいんです？」

流星にそれは気になるぜおい、あそこで見たのとは違うと良いが…

弥 「具体的にどんな異形だ？」

フ 「変なお兄様…、舌が長く爪が発達していて、目は退化した様な」

フ 「体はまるで皮を剥いだ様に筋繊維が剥き出しらしいです」

弥 「そうか…」

やつぱあそこで見た奴と同じだ、ラクーンシティで見たあの化け物…

忌々しい皮を剥ぎ取った鶏の様な姿、舌と爪が発達しているのもあいつと同じ

弥 「リツカー…、何故日本国内に…」

フ 「リツカー?、舐める者ですか…」

弥 「現地の者に伝えろ、奴が生きていたら躊躇わず引き金を引け、死にたくなければな、と」

俺がそう言うと、二人は小首を傾げていた、まあ意味が分からなくても仕方ない

今はもう存在しない滅びし街の記憶だからな、滅菌作戦で何も残ってないだろうし

弥 「まあその話は後だ、今は猫について行こうぜ」

フ 「…まあ、そうですね」

俺は強引に話を終わらせた、まだこいつらに話す程整理が出来てないからな

…

…

黒猫について行くところある大きな扉に突き当たった、主人がいるのかしら

大きな扉は軋みを上げつつ開き、中に黒猫が擦り抜ける入り込んだ

俺らも後にとそこには…

? 「ああ、お憐、ご苦労様」

さっきの黒猫、名はお憐と言うらしい、今は飼い主と思われる少女の膝の上に乗っている

? 「お待ちしておりました、私が地霊殿の主、古明地さとります」

フランやレミリアと同じくらしいの背丈をした桃色の髪をした少女がいた

優しげに微笑むその顔は、まるで全てを見透かしているような穏やかな顔だった

番外編 あきつ丸より

番外編 あきつ丸の一日

弥生殿が帰られて早2週間、自分は未だ始末書作りに必死であります：

そもそもあんな僻地の海域に行かされたら誰だつて道に迷うと思うんです

まして偵察だからと言つて一人なんて…、だけど自分、その後の記憶が無いんでありますよなあ

と云うか偵察ならば海軍の空母どもにやらせれば良いと思うんですがねえ…、何故自分か

ま 「あきつ丸さん、手が止まっていますよ」

あ 『あ、ごめんなさい』

つて事で今自分はまるゆに手伝ってもらいつつ始末書を書いているんであります
にしてもあの鬼と恐れられたフィガロ殿が弥生殿の妹だったとは、驚きましたなあ
その上弥生殿の呼び方が（お兄様）とは…、人は見かけによらぬもの、でありますな
それにいつもとは違って職場でもゴスロリファッションとは、勝負服なんでありま
しょうな

しかしフィガロ殿、いつも目が死んでいますな、なんか理由があるんでしょかね
弥生殿が妹であるフィガロ殿の話をしながらないのも気になります

さて、集中してやらないとそろそろまるゆの目が怖くなって来ました

……

…

今日の分の始末書が終わったのは夕方5時ぐらいでありました、これで満を辞して走りに行ける！

そんな事を考えていると隣のまるゆが口を開きました

ま 「あきつ丸さん、今日まるゆ車で来てないんです」

あ 『ああ、あのホンダZ?、なんかあったんですか?』

ま 「オーバーホールの時期でして、それでまるゆの家まで送ってくれませんか?」

あ 『別にいいですけど、何処まで?』

ま 「何言ってるんですか、同じマンションでしょ」

あ 『あれ、そうでありましたか』

ま 「ヒドイですよ、忘れるなんて」

そんな談笑をしながら車に乗り込みました、K I O M A R C H、この前弥生殿と選んだ物であります

スーパーターボ用のエンジンを敢えてターボのボディに積み込み、足回りもスーパーターボ用にすると言う誰得な改造が施された逸品、バンパー一体型のフォグランプとデジタルメーターが気に入っています

ま 「この音、スーパーターボなんですか？、外見はターボなのに」

セルを回しエンジンに火を入れると過給器の金属音が聞こえて来ました、気分が高揚しますなあ

地下駐車を回って外に出たいんですが…、ああ、あそこですか

あ 『そうなんでありませよ、面白いでしょ？』

ま 「ええ、いよいよグレード不明感が凄いです、ボディカラー黒だし」

あ 『マーチターボって言ったらあのツートンカラーが白でありますからな』

ま 「そうですねえ、そういうえば改になった気分はどうですか？」

あ 『気分も何もまだ戦いに出てないから分からないでありますよ』

ま 「ああ、そうでしたね、陸軍のお偉い方も過保護ですよ」

あ 『早く艀装の試運転したいんですが、まあ仕方ない事でありますな』

まるゆとお話ししながら家路に着くことにしました、車歴はまるゆの方が長いのでありますよな

…

…

マンションに着いてまるゆと別れ、自分の部屋に帰って来ました

いつもの部屋着に着替え夕食を作る事にします、そういえば弥生殿この服見て疑問符を浮かべていましたな、そんなにおかしくないと思うんですが

今日は何を食べましょうか、ご飯を炊いてお魚なんてのも良いですね

それで日本酒を飲んで…、よし、そうしましょう

炊飯器の釜に米を入れて水で研ぎ、釜の中にセットしてスイッチを入れました

少ししてから網を用意して味醂干しを焼きます、焼き過ぎに気を付けて…と

お味噌汁も作りましょうかね、お湯を沸かし味噌を入れてワカメとお麩を…

炊飯器のアラームが鳴りご飯が炊けました、少し蒸らしてから茶碗によそつてと

焼き上がった味醂干しを皿に乗せて、お味噌汁を準備して…、よし、出来た!

冷蔵庫に入れてあった日本酒を出して来て…

あ 『いただきます!』

味醂干しから骨を取り、口に入れる、そしてご飯を頬張れば…

あ 『美味しい!』

日本酒を煽りつつ夕食を食べました、中々美味しかったでありますよ

…
…

：

昨日は中々良い日でありましたなあ、そんな事を考えながら朝起きました
いつもの制服に着替えマンシヨンの駐軍場に車を取りに来たんであります

このマンシヨンは退役軍人が運営している事もあり陸軍人が多く居るんであります
超高級車なんかも周りを見ればチラホラある中、自分のMARCHがこじんまりと停
まっています

何と言うか、申し訳なさそうなのはなんででしょうかね

陸軍省に着くと上官から呼び出しを受けました、恐らく次着任する鎮守府が決まった
んでありますよう

上官の執務室に行くといつも怠そうに仕事をしている上官…、宮田大佐が仕事に追わ
れて書類にサインをしていました

あ 『大佐、何故自分は呼び出されたんでありますか？』

宮 「ああ、次配属される鎮守府が決まったよ、単冠湾だ、あの気味の悪い提督が居る
ところ」

あ 『え、あ、え？』

宮 「ん？、嫌だったかな？」

あ 『ああ、いえ、いつ頃配属でありますか？』

宮 「そういう詳細はもう少ししてから決めるらしいよ、まあ俺はそれを君に知らせるだけ」

あ 『そうでありますか、他に無いなら失礼致しますが?』

宮 「他には無いよ」

宮 「じゃあね、ご苦労さ〜ん」

あ 『ご苦労様、であります!』

自分はそうして部屋を後にしました、弥生殿、案外早く再開する事になりそうでありますな

人物紹介

登場人物紹介. I

・人物紹介

・中島 弥生

身長180cm 男性

搭乗車種は日産 MARCH K11 (ライトグリニッシュシルバー、IMPALエ
アロ、RSワタナベ 8スポーク)

容姿は黒髪で右目を隠している

黒い服を好む為全身黒である事が多い、懐中時計派

使う銃火器はマウザーC96、ベレッタM8000、ストライカー12等一貫性は無
い

性格は飄々としているが正義感是人並み以上にある、キレると手が付けられなくなる
女性に対しては一人に尽くすタイプだが人様から向けられる好意には気付き難い
虐められて居た過去を持つ為捻くれているが、根は素直である

最近はおきつ丸に心を開いている、案外チョロいタイプだ

車の運転は上手いのだがバトルになるとガードレールに擦ったりする為愛車には生傷が絶えない

最近ではMARCHの自動回復がある為開き直り、それが顕著に出ている

蓬萊人な為死ぬ事が無く身体が爆ぜても生き返る、自身の能力との応用で体を作る場所を変えられる上に

いつ生き返るまで指定出来る様になった、尚能力は《作る程度の能力》

能力使用時には目が赤く光るがまだ調整が上手くいつていないのか古い電球の様に揺らめいている

今作は基本的に此奴の一人称視点で話が進む

・中島 フィガロ

身長165cm 女性

搭乗車種は日産 Figaro FK10（スーパーブラック、ボーダー社FC用リ
アウイング流用、RSワタナベ 8スポーク）

容姿はゴスロリファッションにペストマスク、マントを着込む奇怪なセンス、顔立ち
は猫顔

使う銃火器はゲーリングルガー、ベレッタ1934等、古い物が好きなタイプ

性格は暗いが礼儀正しい、兄の弥生の事になると周りが見えなくなる、俗に言うヤン

デレ

昔から兄に仇なす者には容赦が無く中学時代には暴力事件まで起こしセーラー服が血に染まった

車の運転は上手いがバトルと言うより攻撃に特化している為、振り切るのは容易である

しかし最近では弥生を追い掛けて居る為速くなつてしまった、諸行無常あきつ丸を容認しているのは同じ陸軍の人間だから

と言うのは表向きで、本来は兄である弥生に嫌われたくないからである

・あきつ丸

身長175cm 女性

登場車種は日産 MARCH K10 (ブラック、ターボ用フォグランプ内蔵バンパー、エンケイRPO1)

容姿は軍帽に軍服、制服制度に準ずるが太腿にホルスターを付けている、腕時計派使う銃火器は十四年式拳銃のみ、後は弥生に貸して貰ったりしている

性格は活発で礼儀正しいが最近では砕けてきている、海軍は嫌いだが単冠湾鎮守府は例外な様だ

弥生の事が好きな様だがいかんせん弥生が鈍感なせいで先に進まない

為
弥生に会った時は改修前のグレーの制服だが、東京に帰った際改修の手続きが済んだ

現在は改の黒い制服になった、お陰で弥生とお揃いだと喜んでいらしい

番外編の主人公を務める事になった、副主人公である

・コレット

身長170cm 女性

容姿は黒いドレスに黒髪ロング、胸が無い事を気にしている

しかし未だに精神世界にしか出れないので何故体が固定なのかは分からない

蛇であり、ツンケンしている割に放って置くとすぐ拗ねる、俗に言うツンデレ

・ミア

MARCHに憑いている悪魔、気の使える良い子

車載コンピューターを付けた際謎のプログラムで話せる様にした為今は話せる状態

現在は車内の液晶にデフォルメされた姿で表示されている

それによって僕っ子であった事が判明、弥生に衝撃を与えた

・紅魔館

・レミリア スカーレット

身長132cm 女性

容姿は薄い紫の髪にナイトキャップを被っており、背中には蝙蝠のような羽が生えている

武器はフランと同じくあまり使わないが、グングニルと言う槍を持っているがもっぱら投げている

性格は落ち着きがありカリスマ性を持っているが、妹の事になると周りが見えなくなる事もしばしば

弥生の事は信頼しているが危なっかしい所がある為心配している、フランが絡むと胃が痛くなるらしい

能力は《運命を操る程度の能力》、未来が見えるらしい

・フランドール スカーレット

身長130cm 女性

容姿は金髪をサイドで結わきナイトキャップ被っており、背中に水晶をぶら下げた様な羽根を付けている

武器は基本使わないが、レーヴァテインと言う槍を持っている時がある、魔力を固体化させている様だ

性格は聞いた程狂っているわけでは無いが世間知らずな所がある

弥生の事は紅魔館から連れ出してくれたりする為気に入っている、死なないし能力は《ありとあらゆるものを破壊する程度の能力》初対面の弥生はこれの犠牲になつた

・十六夜 咲夜

身長175cm 女性

容姿は銀髪でメイド服に身を包んでいる、懐中時計派

武器はナイフでメイド服のあらゆる所に隠し持っており、投げて使う事が多い

性格はしっかりしておりルールに厳しい、が偶に天然で紅茶に福寿草を淹れたりする、危ない

弥生の事はあまり話さないで良く分かってないが、驚かすと面白いので気に入っている

マウザーKar98を貰った時は嬉しかったらしい、ぶっ放したかったそうだが

能力は《時間を操る程度の能力》これで弥生を驚かせている

・パチュリー ノーレツジ

身長168cm 女性

容姿は長い紫の髪にナイトキャップ、ローブとゆるふわな感じ

武器は基本使わず魔法で攻撃するが非常時は魔道書でぶん殴る時がある、人が吹っ飛

ぶってどんな：

性格はクール、それに尽きるがノリが悪い訳では無い、何かと一番苦労している
 弥生には魔法を教えているため師弟関係がある為、偶に無茶振りして遊んでいる

能力は《火＋水＋木＋金＋土＋日＋月を操る程度の能力》つまりは魔法使いと言う事
 だ

・紅 美鈴

身長180cm 女性

容姿は赤い髪に人民帽、チャイナドレスと中国感溢れる見た目

武器は使わない事が多いが、トンファーやヌンチャクを使う時もある

性格は真面目で気さくだが、門番の勤務中に寝て居たりとあまり勤務態度は良くない
 弥生にはあまり会う事がなく、車でカッ飛んで行くのを見る事が多い

能力は《気を使う程度の能力》波紋使いでは無い：筈

・小悪魔

身長166cm 女性

容姿は赤い髪に蝙蝠の羽の様な物が生えている

武器はあまり使わないが、大きな鎌やチェーンソー等どこから持つて来たのか不明な
 物が多い

性格は悪戯好きで、弥生に対してもセクハラ紛いの悪戯をした事がある

能力は不明、分からないって怖い

・博麗神社

・博麗 霊夢

身長173cm 女性

容姿は巫女服なのだがオフショルダーになっており、頭には大きなリボンが付いている

武器はお札や退魔針等、やっぱりどちらも投げ使って使う、肉弾戦もかなりのものである
性格はサバサバとしており、人に興味が無い様にも見えるがそれでも無いらしい

何かと苦勞人で宴会の後片付けは基本的に彼女が1人でこなしているが、最近は萃香も手伝わせている

弥生の事はパシリと思っっている節があるが、別に弥生自身嫌がっていないので良いやと思っっている

能力は《空を飛ぶ程度の能力》

・伊吹 萃香

身長140cm 女性

容姿は薄茶のロングヘアを赤いリボンで留め、鬼らしく身長に不釣り合いな角を二本

生やしている

武器は素手だが、下手な兵器より強く地面にクレーターを作る事もしばしば

性格はかなりの飲兵衛でいつも酒を呑んでいるが、かなりの洞察力があり切れ者

弥生の事は飲み友達と思っており、いつかは酔い潰れるまで呑みたいと思っっている

能力は《密と疎を操る程度の能力》

・魔法の森近辺

・霧雨 魔理沙

身長174cm 女性

容姿は金髪に三角帽子の魔女らしい格好、片手には基本箒が持たれている

武器はミニ八卦炉と呼ばれる魔道具で攻撃し、恋符「マスタースパーク」は規格外の

威力を誇る

性格はサツパリしており人当たりも比較的良いが、手癖が悪く平気で嘘を吐く

捻くれ者同士弥生とも気が合う様だ、家は散らかっており足の踏み場も無い

最近は弥生の事を意識しているが、やはり弥生は鈍感だった

能力は《魔法を使う程度の能力》

・アリス マーガトロイド

身長176cm 女性

容姿は金髪、色白で人形のようなものである

武器は人形、人形に攻撃させたり自爆させたりして居る

性格は他人に興味はなく魔法に執着しやすい反面、人間には友好的である

車酔いしやすい体質のようで、MARCHの後部座席で失神した過去を持つ

能力は《人形を操る程度の能力》尚、弥生は人形が苦手でありスの家で戦々恐々とし

ていた

登場人物紹介。 I I

・ 人物紹介

・ 白玉楼

・ 西行寺 幽々子

身長178cm 女性

容姿は髪は桃色で癖っ毛、水色の浴衣を左合わせで着ている

武器は必要ない、何故なら彼女の能力が《死を操る程度の能力》だから、危ないっただけ
らありやしない

性格はふわふわしており何を考えているか分からないが、切れ者である事は確かだ

弥生の事は可愛らしいと思っており、出来ればもう少し白玉楼にいて欲しかった様だ

・ 魂魄 妖夢

身長162cm 女性

容姿は銀髪に髪飾りを付けている、背後に白い餅の様な物が飛んでおり、それが半霊らしい

武器は刀で「楼観剣」と「白楼剣」の二振の刀を使う、近接戦闘なら右に出るものは

居ないだろう

性格は真面目で堅物、その上半霊のくせに幽霊が苦手らしい

弥生の事はあまり良いイメージが無い様だ、すぐに居なくなつて清々したらしい

永夜異変時、フィガロと意気投合したらしく人里で話している所が目撃された

能力は《剣術を使う程度の能力》

・マヨヒガ近辺

・橙

身長136cm 女性

容姿は二股に分かれた尻尾と猫耳が生えており、猫の妖怪という事が分かる

武器は爪、引つ搔かれると痛い、死にはしない

性格は良くも悪くも猫らしい、言う事は基本的に聞かない

弥生とは話した事が無く、紫に聞いたぐらいである

能力は《妖術を使う程度の能力》

・八雲 藍

身長177cm 女性

容姿は狐耳に道士服、大きな尻尾と個性的

武器は弾幕や式を打ち戦う、つまりは素手である

性格は真面目で礼儀正しい、趣味は計算らしいが常人には理解出来ない物も多い
 弥生には橙と同じく会った事が無い

紫に話を聞かされる位だが、その話をしている紫が幸せそうでどんな人物なのか会ってみたい様だ

能力は《式神を使う程度の能力》

・八雲 紫

身長179cm 女性

容姿は金髪に大きなリボンのついた帽子を被っており、紫色のドレスを着ている

武器は特に無いが、道路標識を振り回している事があつたらしい、怖ッ

性格は掴み所がなく何を考えているか分からない、しかし幻想郷への想いは本物の様だ

弥生の事は気に入っており、何かと気にかけている

能力は《境界を操る程度の能力》

・向日葵畑

・風見 幽香

身長180cm 女性

容姿は緑色の髪にチェック柄のベスト、スカートを穿いている

武器は日傘で薙ぎ払う様な攻撃が多い、先端からマスタースパークを放つこともしばしば

性格はドSだが反面寂しがり屋な所があり、花を愛している為粗末に扱う者には死の制裁が待っている

弥生の事は気に入っており無茶振り等で遊んでいる、その時の表情は楽しげ必ず一週間に一回は来る様に要求しており、破るとずっとその事で詰られる

能力は《花を操る程度の能力》

・リグル ナイトバグ

身長132cm 女性

容姿はショートヘアにブラウス、短パンとボーイツシュ、頭には長い触覚が生えている

武器は虫に襲わせると言う中々ダメージの大きい攻撃

性格は常識人で話のわかるタイプ、最近はツツコミ役に回っている

弥生の事は遠目に見た程度で、背が高いなど思っていた

能力は《蟲を操る程度の能力》

・湖周辺

・チルノ

身長135cm 女性

容姿は青い髪にリボン、青いワンピースと一貫性がある

武器は能力で作った氷柱など、冷気を振り撒き凍傷にする事も可能

性格は少々お馬鹿、最強を自負しており格上の相手にも臆する事なく立ち向かう

弥生の事は慧音先生を連れて来た嫌な奴と思っており、あわよくば凍らせてやると

思っている

能力は《冷気を操る程度の能力》

・大妖精

身長133cm 女性

容姿は緑の髪をサイドポニーにしており、昆虫のような羽根が生えている

武器はクナイの様な弾幕だが、避けるのは容易だ

性格は礼儀正しくしっかりしているため、お転婆なチルノに振り回されている

弥生の事は遠目で見た程度、身長高いなど思っ居たらしい

能力は不明

・ルミア

身長140cm 女性

容姿は白い長袖のブラウスに胸元までの黒いワンピース、髪はショートヘアにリボン

を付けている

武器は持たず素手で戦うが、妖怪の為並みの人間では太刀打ち出来ない

性格はほわほわしているが核心を突く事も多く、切れ者の様だ

弥生の事は非常食だと思っているが、寝ている時に齧ったら美味しくなかつたらしい

取り敢えず持ちつ持たれつな関係を築いており、信用している様だ

能力は《闇を操る程度の能力》

・レテイ ホワイトロツク

身長165cm 女性

容姿は白いブラウスに青いベストを着ている

武器は持たず冷気を使い攻撃する、チルノとは格が違う…、らしい

性格はほんわかしており心なしか幽々子と似ている

弥生の事はある程度気に入っており、冬になったらまた会いに行く予定らしい

能力は《寒気を操る程度の能力》

・人里周辺

・上白沢 慧音

身長177cm 女性

容姿は薄い青の髪に不思議な帽子を被っている

武器は基本使わないが宿題を忘れた子供に頭突きをする場合がある、威力は高い
 性格は真面目で堅物だが、子供が居なくなってしまう等想定外の事が起きるとテンパってしまう

弥生の事はチルノ達を探してくれた恩人だと考えており、いつか礼をする予定
 能力は《歴史を食べる程度の能力》

・本居 小鈴

身長140cm 女性

容姿は飴色の髪を鈴付きの髪留めで二つに止めており、本を読む時のみ丸眼鏡
 性格は好奇心旺盛で天真爛漫、妖魔本を集めており時折それで問題を起こす事がある
 弥生の事はたまに本を借りに来るお客さんだが

何かと話題になっているので一度深く話してみたい様だ

能力は《文字を解読する能力》

・稗田 阿求

身長142cm 女性

容姿は紫色の髪に着物を着ている

性格は真面目だがはっちゃける事も多い

弥生には会った事がないが、幻想郷縁起の為話を聞きたいらしい

能力は《一度見聞きした事を忘れない程度の能力》

・甘味処のおっちゃん

身長170cm 男性

容姿は浴衣姿に短髪、髭も生やしており強面

性格は豪快で気前が良い、奢ってくれる事もしばしば

体が大きく筋肉質なので過去に何か武術をしていたのかもしれない

・永遠亭周辺

・八意 永琳

身長178cm 女性

容姿は銀髪に服は赤と青で星座で覆われている、看護婦の帽子に似たような物を身につけている

武器は和弓を使用するが通常の木材製や金属では無く、不可思議な材質だ
性格は天才と言う事もあり常人には理解できない事を平気でやってのける
弥生に関しては自分が作った筈の蓬萊の薬を飲んでいるため怪しんでいる、信用はしていない

能力は《あらゆる薬を作る程度の能力》、医者なだけはある

・鈴仙 優曇華院 イナバ

身長173cm 女性

容姿はうさ耳にブレザー、月の軍隊の制服らしい

性格は真面目だが臆病、月の都から逃げた理由もそれらしい

弥生に対しては当初月の都の使者かと思っただけらしい、ふと冷静になってから気付いたらしいが

能力は《狂気を操る程度の能力》、目を見ると気が狂う様だ

登場人物紹介。鎮守府

・登場人物

・単冠湾鎮守府

・如月 空

身長178cm 男性

搭乗車種はスズキ Jimmy SJ30（メタリックブラック、外装フルノーマル、5速ミツシヨン）

及びトヨタ STARLET EP82（スーパーホワイト、TRDフルエアロ、TE37ブロンズホイール）

容姿は基本的に白い提督服を着ている事が多く、普段着のセンスは壊滅的

武器は九四式のほかスナイパーライフル全般を使い、接近戦では銃剣突撃等日本陸軍
紛いの攻撃法を使う

性格は常時薄ら笑いを浮かべており感情が読み取り難いが、傷付きやすい面がある
弥生の事は来ると面倒だが断る事が出来ない厄介な客だと思っっている

・加賀

身長175cm 女性

容姿は青を基調とした弓道の道着を着ている

武器は弓を使っているが、従来の物と違う様で不可思議な能力を持っている

性格はクールでキツイがそれは過去のトラウマの為で、慣れた人間には冗談を飛ばしたりする

弥生の事は客人として紹介されたが軍人の格好をしていなかった為、困惑していた様だ

・赤城

身長175cm 女性

容姿は赤の加賀と同型の道着を着ている

武器は弓を使い、加賀と同じ様に不可解な能力で攻撃する

性格は落ち着いており優しげ、その上核心を突いた発言も多く切れ者の様だ

食べ物に目が無くいつも何かしらを食べている、カレーを食べる姿は圧巻

弥生の事は食べ物くれた良い人だと思っている、尚尊はそのあと聞いたらしい

・龍田

身長170cm 女性

容姿は紫色の髪で、頭の上に天使の輪の様なユニットが乗っている

武器は薙刀を使用し、こちらにも不思議な能力が付いている

性格は怒らせるとちよつと怖いタイプでしれつと恐ろしい事を言ったり、やったりする

弥生の事は初対面の時に切り付けた為負い目を感じていたが、天龍を弥生が蹴り飛ばした為＋10になった

・天龍

身長170cm 女性

容姿は紫色の髪で、猫耳の様なユニットが付いている、あと眼帯

武器は刀：？を使っており、それで砲弾を弾いた事がある

性格は粗暴だが、姉御肌な所があるのか面倒見が良い

弥生には一度蹴飛ばされている、尚、弥生を襲った理由は化け物と噂の弥生が龍田と話していた為である

龍田を守らなければと思ったそうだ

・摩耶

身長177cm 女性

容姿は栗色の髪にアンテナの様な棒が立っている

武器は腕に付けた連装砲と呼ばれる携帯兵器、ここから20.3cmの砲弾を弾き出

すらしい

性格は荒い雰囲気似合わず気遣いが出来、世話焼きさんな様だ

弥生の事は化物と噂されていた為、危険なら排除するつもりで会いにいった様だ

車が好きな様で弥生のMARCHのエンジンを言い当てた、自身はR32GT-Rに乗っていた様だ

・大淀

身長172cm 女性

容姿は黒いロングヘアにメガネ、まるで生徒会長のように

武器は腰の辺りについた15.2cm連装砲、人間相手にはオーバースペックだろうが…

性格はイメージ通り真面目、鎮守府の問題やら色々全て彼女の元に集まる為最近お疲れ気味

弥生の事は全く信用していない、飄々とした態度が気に食わないらしい

・金剛

身長180cm 女性

容姿は茶髪に装飾の付いたカチューシャを付けている

武器は41cm連装砲、強い。

性格は明るく、帰国子女な為片言の日本語で喋る

弥生には何も知らず話しかけ、その後化け物騒ぎの話聞いたらしい

・まるゆ

身長147cm 女性

搭乗車種はホンダZ（白、チンスポイラー、汎用オーバーフェンダー加工、RSワタナベ 8スポーク）

容姿は白いスク水に水中メガネ、一度見たら忘れないだろう

武器は十四式拳銃、あきつ丸のとは違い後期型

性格は人見知りな様で喋り方も頼りない感じ

弥生の事はあまり知らないが悪人とは思ってない様だ